
NEXT GEARS

結城 祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N E X T G E A R S

【Nコード】

N 7 0 6 8 B

【作者名】

結城 祐

【あらすじ】

地球とは全く違うレランガートと言う名の世界で一人の青年と二人の神様の長編ファンタジー。

大昔に起きた人類そして神と魔族の戦争から、5万年。

神と人間と魔族、3つの種族が世界をどの様に動かすのか。

そして神を従えた青年はどの様になり、世界を変えてゆくのか。

それぞれの意思や目的の為に、世界は次の段階へと動き出す。

次の歯車は一体どのような形をしているのだろうか。

プロローグ

此処は我々が住む地球とは違う、レランガートと言う名の世界。

レランガートはその昔、人類、動植物が共に共存し魔術や機械などの文化が栄えていた。

だが、いつからかレランガートには「魔族」と呼ばれる者達が現れだした。

魔族は優れた魔力でレランガートを支配していった。

人類は戦闘兵器などを駆使し、魔族の侵攻を抑えようとするも徐々に魔族の侵攻は進んでいった。

しかし、神は人類を見捨ててはいなかった。

精霊と契約をする人々が現れ始めたのだ。

人々は神に近い存在とされる「精霊」と力を合わせ共に戦った。

精霊の力により形成は逆転し、戦争は人類の勝利で終結に向って行くと思われた。

が……強大な力を持った「魔族の王」の出現により戦いはまた振り出しに戻った。

そこへ、魔王討伐を世の人々に約束した一人の青年が現れた。

その青年は他の精霊を持つ者とは根本的に違っていた。

彼が契約を交わしたのは「戦いの神オーディン」。

そう、彼は神に近い存在の「精霊」ではなく「神」そのものを相棒としていた。

その青年は魔王との死闘を5日間繰り広げ、見事魔王討伐に成功した。

しかし、「神を持つ青年」もまた、力尽きその場で息絶えてしまった。

そして、その相棒であったオーディンも主を失いそこで消えていった。

その、死闘の舞台には今もなおその青年が使った剣が残されており、オーディンが眠っているという。

そして、そのレランガート至上最大ともいえる戦争が終結してから約5万年後。

一人の「神を持つ青年」を中心に止まっていた歯車がまた動き出す・
・・。

次へまた次へと繋がっていく歯車が・・・・。

プロローグ（後書き）

初、ファンタジー物。

世界観は完全オリジナル。

肝心の主人公達はプロローグでは登場しませんでした。第一話から本格的になっていく予定です。

乞うご期待下さい。

遅く、騒がしい出発準備

戦争終結から約5万年後、魔族の王はいなくなったものの、レランガートには未だに魔族が世界中に生息している。

そのレランガートの第二の都市、デイルモートの周りは何も無い荒地だ。

荒地側から見ると、荒地の真ん中にドンと巨大な壁が建っているように見える。

この大きな壁は魔族除けの為に町の周りを囲ったものだが、これはデイルモートだけ特別にあるという訳では無く、ある程度大きい町などには全てある物だ。

そのデイルモートの町から数キロはなれた場所。

もちろんそこは荒地のど真ん中なのだが、そこに大きくも無く小さくも無い2階建ての木造の家が建っている。

家の前を遮る物などは無い、その為大きくなくても十分目立つ。

その家の二階にある部屋の一室。

部屋には本棚、机、タンスなど、木素材の家具が置いてあり、部屋の窓際に置かれたソファーに一人の女性が寝ている。

そしてそのすぐ隣に置いてあるベッドにも女性が一人寝ていた。

二人とも、眠っているところを見ているだけでも分かる程の絶世の美女で肌の色は二人とも白く透き通っていて美しい。

髪の色はソファーで寝ている女性が眩しい銀色、対照的にベッドで寝ている女性が深い黒色だ。

二人ともスヤスヤと幸せそうに寝ている。

（ボタンツ！！）と、いきなり彼女達が寝ている部屋の扉が勢い良く開かれる。

「・・・何時だと思ってるんだよお前ら・・・もう昼過ぎてんぞ」

ドアの開き方とは対照的に、一人の青年が静かに言葉を発した。怒り半分、呆れ半分といった感じだ。

この、青年の名はクレイヴ・フォード。

目は切れ長で鋭く、薄い青色、とても整った顔立ちをしている。髪の色は金色で肩の辺りまで伸びている。

「おいっ！！いい加減に起きろっ！！」

クレイヴは返事が無い女性達二人に対し痺れを切らし、叫ぶ。

「・・・何？？もう朝？？」

最初に返事が返ってきたのはソファアの銀髪の女性から。

続いてベッドの黒髪の女性からも寝ぼけたような声で返事が返ってきた。

「深夜に決まってる・・・」

良く見てみるまだ真っ暗だ・・・」

「そつだよね・・・真つ暗だもんね・・・」

「・・・二人とも大ハズレ。

もう、昼過ぎてるんだ。

大体な・・・カーテン三重にして太陽の光さえぎってたら暗いのは当たり前だ!!」

クレイヴが強く言葉を発すると同時にカーテンを思いっきり横に引っ張る。

当然、まぶしいばかりの太陽の光が窓際で寝ている二人へ直射する。

「もう昼過ぎなの?・・・」

ソファアの上に起き上がり外を見て、呑気な声で銀髪の女性が言う。

「昼過ぎてるのか・・・確かに外の光が眩しいな」

黒髪の女性もベッドの上に座って、目を細めながら、言葉を発する。

「ああ、そつだ、昼過ぎだ。

こんな寝てばかりの神様なんているのかよ、全く・・・」

「「ここにいる」」

二人は声をそろえて言った。

この自分自身を神と言う女性二人。

銀髪で眩しいばかりの輝きを放つおっとりした女性がクレイヴと契約を交わしている

光の神シャーネル。

黒髪でシャーネルとは対照的に、暗い雰囲気を出している男性のよ
うな口調の女性も同じく、クレイヴと契約を交わしている
闇の神ネイラ。

二人とも髪の色以外は見分けがつかないほど良く似ているが、眼の
色はシャーネルが明るい黄色で
ネイラが吸い込まれそうな黒い瞳を持っている。

「大体ね。

もう契約して3年経つんだよ？

私達の強さぐらい分かってるでしょ」

シャーネルは自信満々でそう言った。

因みに、レランガートの時間の概念は地球と全く同じである。

「強さは認めるけど、お前ら見てると神様とは思え——・・・ど
うでもいいから、早く今日の依頼の準備してくれ。

それを伝えるために起こしに来たんだ」

クレイヴは否定しようとしたが、途中、部屋に来た理由を思い出し、
今日の依頼の支度をするように頼んだ。

依頼とは、レランガートの職業の一つであるレンジャーが受け持つ
仕事の事だ。

依頼者はレンジャーのギルドへ依頼を登録し、それをレンジャーが
見て依頼を請け負う。

依頼は危険度が低いCランクから危険度が最も高いSランクまでで分類されている。

人探しの依頼から、頼まれた区域の魔族の排除等、様々だ。

そして、それらを達成した報酬金でレンジャーは生活しているのだ。

「じゃあ着替えるから出て行ってくれ」

ネイラが言う。

神とはいえ人間と契約している以上は、実体化しているか、その契約者の精神の中でしか生活することしか出来ない。

契約者の精神ではその契約者と話す事ぐらいしかできない、つまり実体化している以上、戦闘の身支度も自分で済ませなければならぬのだ。

ちなみに食事や睡眠もとる。

身体を維持するためにはそういった事が必要不可欠だからだ。

これは、精霊にも言える事だ。

「・・・寝るなよ」

「チツ・・・承知した」

舌打ちをし、ネイラはしぶしぶ了解した。

「寝るつもりだったのかよ・・・」

「まあまあ、なるべく早く準備するから。

一階でまっけてね」

シャーネルがニツコリと笑って言う。

「・・・シャーネルも寝るつもりだったろ」

「な、何の事??」

図星だったのか、シャーネルは明らかに動揺している。

「はあ・・・一階に行ってるからなるべく早く支度してくれ」

クレイヴは部屋のドアノブに手を掛け「・・・絶対に寝るなよ」と言葉を残し部屋を後にする。

そして、数分後。

身支度を済ませたシャーネルとネイラが一階へ降りてきて

椅子に座っているクレイヴの隣にクレイヴを挟むように椅子に座る。

「それじゃあ、今日の依頼内容だが。」

まず難易度はB。

此処から南にある、ハンザードの町はずれの畑を荒らす魔族共を退治して欲しいとの事」

クレイヴが依頼内容の書いてある紙を見ながら一通り説明する。

「Bか。」

依頼内容を聞く限り、私かシャーネル、どちらかがクレイヴ着いていけば余裕だろう」

ネイラがいかにも、私は行きたくありません的な、空気を醸し出しながら言った。

「念の為に二人共連れて行きたい所なんだけど。
この間、お前らが変な事やって吹っ飛んだ部屋あるだろ？」

「あゝそれって暇だからネイラが太陽を隠すか、私が太陽を闇から守れるか力試した時だよ。
その途中にちよつとした不祥事が起きちゃってその部屋が一個吹っ飛んだよね。」

シャーネルがとんでもない事を口にした。

「あの時クレイヴは町へ買い物に行ってたからな。
知らなくて当然だろう」

ネイラがその時の事を思い出しながら言った。

「・・・さてよ、お前ら俺が帰ってきた時なんていったっけ?？」

「・・・さ、さあ??？」

とぼけるようにシャーネルが言う。

「大型の鳥系魔族が空から現れて、咄嗟に魔法を撃ったらああなつたとかいったよな？」

クレイヴが問う。

「い、いや、本当に飛んできたんだよ」

「ああ、飛んできた」

「ウソ付けっ!!」

「……ごめんなさい」

二人が罪を認めた。
案外認めるのが早い。

「はあ……」

溜息をつくクレイヴ。

「……なら、あの日、数分間太陽が半分になっていたのは、お前らの仕業か？」

もう一度クレイヴは二人に聞いた。

「そついう事だな」

「……まさか、町が大騒ぎになった原因が家にいるなんて思わなかった……」

「え……そんなに騒ぐ事じゃないのにねえ」

「ああ」

シャーネルの言葉を肯定するネイラ。

「いや、町の人々の反応は正しいと思うぞ」

通常いきなり太陽が半分になったら驚くのは当たり前である。

「で、話を戻すけど、今日その部屋を直しに来てもらっただ。そういう訳で、一人留守番してもらおう」

「それでは、家は私に任せておけ。
部屋が吹っ飛んだのは私の責任だからな。
シャーネル、クレイヴを頼んだ」

ネイラがシャーネルの肩をポンと叩き
ここを立ち去ろうとする。

「えー、ちよつと・・・」

シャーネルが不満そうに言う。

「あ、そうそう、言い忘れてたけど」

クレイヴが思い出したように手をポンツと叩く。

「今回の依頼の対象、畑を荒らす魔族は夜に出現する魔獣型だからな。」

そういう訳で・・・分かるかな??」

それを聞いたネイラの肩がガクツと落ちた。

「・・・面倒な依頼を受けたものだ・・・」ボソツとネイラが呟く。

何故ネイラという選択なのか。

それは、夜の戦闘ともなると辺りは暗闇。

暗闇だとシャーネルの光の能力は十分には発揮されない。

故に闇の力を持つネイラと行動した方が良くクレイヴは判断したのだ。

相手が光に弱いヴァンパイア系統ならシャーネルも良いが、今回は相手が夜行性というだけで特別光に弱い訳ではないからだ。

「それと、シャーネル。

しっかり留守番しておいてくれ」

「寝てちゃいけないの？」

「・・・だめだろ、普通。

誰が修理屋が来た時に説明するんだよ？」

「あ、それを私がやるのか」

「そういう事だ。

しかし、本当にどれだけ寝られるんだお前は」

「最高16時間」

ニツコリとピースをしてシャーネルは言う。

「流石、神様」

クレイヴが皮肉をこめて言う。

「照れるから止めてよ……」

それを思いつき真に受け、色白の顔を赤らめる光の神様なのであった。

「褒めてねえよ……」

クレイヴは照れているシャーネルに聞こえないようにボソッとそう言った。

遅く、騒がしい出発準備（後書き）

此処からが本編であります。

とりあえず、クレイヴはクールだけでも
何処か熱い青年を。

シャーネルは光の神らしく明るく優しい感じで
ネイラは対照的にクールな神様。

てな、感じで書いていこうと思います。

それでは、今後ともよろしく願いします。

森林での遭遇

クレイヴ、そして彼と契約を交わした闇の神ネイラ、二人の目の前に広がるのは緑一面の広い畑。

クレイヴ一行は家から3時間ほど歩き、受け持った依頼をこなす為此処にきている。

魔法で一氣に移動しても良かったのだが、「何があるか分からないから、魔力は温存して行く」というクレイヴの案によりその手段は使わなかった。

「結構広いもんだな」

クレイヴが緑いっぱいの開放的な空間を気持ちよさそうに感じながら言った。

クレイヴの家の周りは荒地故に、緑は一切無い、だからこそ余計に気持ちよく感じるのであろつ。

「ああ、緑があると良いものだ。

ただ、戦闘をしに来たのだからな、この広さは厄介だ」

ネイラがクレイヴの言葉に肯定しつつ、戦闘に関しては厄介だという事を伝える。

確かに、畑の面積が広いということは、それだけ広い所に視野を置かなければならない。

「ああ、確かにな。

だけど今回は、魔族退治だ、畑の防衛じゃないからな。

ある程度退治すれば、他の奴らは恐れをなして逃げていくだろうからな」

そう、今回は畑の防衛ではなく、畑を荒らす魔族の退治だ。

要は以後、この畑の敷地内に魔族が来ないようにすれば良いのだ。

「そうか……。

被害はどれ程抑えれば良いのだ？」

ネイラが疑問を口にした。

この被害と言うのは魔族の影響によるものではなく、ネイラが戦闘で起こす被害の事だ。

ネイラ程の力を持っていると半径数キロメートルの破壊は容易い、それ故力の加減を知らなければならぬ。

「え」とだ。

ある程度の被害までは大丈夫だそうだ」

クレイヴが依頼内容が書かれた紙を取り出し言った。

「ならば、畑ごと穴クレーターにならないよう気をつければ良いか」

「……悪魔でも『ある程度』だからな。

被害は抑えるに越した事は無いぞ」

「御意」

「まあ、抑えるって言ってもな・・・コレ見ろよ」

下の地面を指差しクレイヴが言った。

「・・・これは・・・酷いな」

「全部、地面の下の野菜が乱暴に食い散らされてるだろ。表面上は緑があるにしろ、地面の下は酷いもんだ。

これで抑える意味があるのかは分からないが・・・。

——つとそろそろ日没だ」

二人が此処に着いたのは夕方だった。

畑までにかかった時間が3時間と、予想以上の長距離だった為、夕方と言う日没ギリギリの時間に到着した。

もちろん神様二人の大寝坊も若干関係しているのだが。

・・・日が沈む。

それは戦闘開始の合図でもある。

クレイヴの表情が真剣になる。

ネイラも同様に真剣な眼差しになる。

これからやるのは命の取り合い。
下手をすれば、命を落とすのだ。

焔は一面シーンとしている。

すると、唐突に「グオオオ」という獣のような鳴き声が全方位から
一斉に聞こえてきた。

クレイヴは戦闘をする時は、常に二本の剣を背中に十字になるよう
背負っている。

一本は、縦に背負われた光り輝く白い剣、もう一本は横に背負われ
た黒く染まった黒色の剣だ。

クレイヴは咄嗟に背中に背負っている二本の剣の内、黒く染まった
方の剣を引き手に持った。

「・・・もうすでに俺たちがいることは、ばれているみたいだな」

クレイヴが言うとおり、魔獣達は警戒して中々焔に侵入してこない。

「ネイラ、闇視強化頼む」

「ああ、分かった」

闇視強化とは、簡単に言えば目を暗所向きにする魔法である。

逆に明るい所では不利になるのが弱点だが、今は気にしなくて良い
だろう。

魔法がかかるとほぼ同時に、魔獣達は一斉に焔の中の二人へ向って
きた。

「ちっ！全方向からか！！」

揃っている所を見るとどうやら操っている者、又はリーダーがいるのかもしれない」

クレイヴが舌打ちをして言った。

「仕方が無い、こんな雑魚などさっさと片付けてしまおう。

クレイヴ、脚部強化と視力強化をかけておくから、今から上空へジャンプして

空から親玉を探してくれ」

ネイラが魔法をかけながら言った。

この魔法はいわゆる身体強化と呼ばれる基本的なものだ。今回は足の筋力と視力を上げている。

「ああ、分かった」

クレイヴが頷くと、クレイヴは思いきり上空へジャンプした。

「さて、ではやるか。。。

魔力変換！！闇魔力から闇黒大魔剣へ！！」

ネイラの手に膨大な闇の魔力が集まってくる。

その闇魔力がネイラの手のひらで徐々に剣の形となっていく。

完全に剣の形が形成された時にはも魔獣達はすぐそこまで迫っていた。

「出力は・・・中程度で十分だろう」

ネイラは手に形成された大剣を手に持ち、それを振り回すように一回転した。

すると、剣の大きさより遥かに大きい衝撃波がネイラを中心に半径30メートル程飛んでいった。

無論その範囲内にいた魔族は引き裂かれ断末魔の叫びをあげながら闇へと消えていった。

「さて、これで全部か・・・先に家に帰っても文句は言われないだろう。

仕事は一応こなしたからな」

トンッとネイラは地面を蹴って空へとジャンプした。

・・・一方クレイヴは、森の中に立っている一人の青年を見ていた。

（あいつか・・・さっきの魔獣共を操っているのは・・・）

「・・・ちっ・・・全滅か。

何やってるんだ」

（全滅??きつとネイラがやってくれたんだろう。

あいつの強さならあの程度の事、造作も無いだろうからな）

「!!!!・・・そこにいるのは誰だ!!!!」

その青年は振り向く際に、魔力で形成された刃を飛ばした。

（スパンッ!!）

木が倒れる。

「・・・ここら一帯の魔獣を操って畑荒らしてるのはお前か？」

クレイヴが青年に尋ねる。

「ああ・・・そうだが？」

お前は一体誰だ？」

「ここで消える奴に名乗っても意味が無いだろう。

あの世で恨まれちゃ、たまったもんじゃないからな。

まあ、とりあえずお前を消しに来た者とだけは言っておく」

「ハッ・・・俺がここで殺される？」

人間如きにこの俺がか？」

クレイヴの言葉を半ば呆れ半分で聞き返す。

（人間如き？・・・そうか、こいつはヴァンパイア型の魔族か）

ヴァンパイア型の魔族は魔族の仲では上位に位置する種類だ。

弱点は光に弱い事。

銀にも弱いという弱点も有るが、光ほどではない。

「ああ、そうだな。

結局教えても意味が無いだろう。

どちらかが消えるんだからな」

クレイヴが言う。

「畑を荒らした理由とかも聞かないのか??」

「どうでもいいさ」

「そうか、、、そうだよな」

青年がクレイヴの言葉に肯定してから数秒後。

青年がクレイヴの方向へ目にも留まらぬ速さで突進すると同時に手から魔法剣（魔力で出来た剣、先程のネイラが行った事も魔法剣の延長線上の技である）を発動しクレイヴに斬りかかった。

クレイヴは咄嗟に剣を引き抜き青年の魔法剣を受け止め、剣で弾いた。

それに合わせ青年も身を一步引く。

ヴァンパイアの外見は人間とそう変わりはない。

しかし、身体能力は人間を遥かに凌駕する能力を持っている、故に身体能力強化がかかっているクレイヴですらもギリギリで反応するのがやっとであった。

「ふむ。」

人間にしては反応が早いな」

「それはどうも。」

一応この仕事で生活しているんでね」

「ハハッ、そりゃあ、今夜は楽しめそうだな」

青年は笑いながらそう言った。

そしてすぐさま、クレイヴに目にも留まらぬ速さで斬りかかった。

（・・・しかし、ヴァンパイアは光に弱いと言っても、シャーネルはここにはいない。

どうするべきか）

クレイヴは相手の攻撃を防ぎつつ、シャーネルも連れてくればよかった、という後悔の念を抱く。

（・・・後悔してもしようがないか。

他の方法を考えないとな。

このままでは流石にまずい）

ヴァンパイアには通常の剣の攻撃は全くと言っていい程効かない。切っても人間の何百倍もの自然治癒力で傷口が閉じてしまい、すぐに元通りになる為だ。

（・・・銀に関する物は持っていない。

するとやはり、光を当てるしかないか。

だが、どのようにすれば・・・）

クレイヴは青年の猛攻撃をギリギリで受け流しながら必死に模索する。

「コレが限界か??」

どうせならそのもう一本の剣も使ってくれよ。

まだ本気じゃないんだろ??」

まるで勝負を楽しむかのように青年は言った。

(・・・もう一本・・・!!!!・・・そうだ、そういえば以前)

——数ヶ月前、クレイヴ宅。

「クレイヴ」。

この剣の色って、何で黒と白なんだと思う???

シャーネルがクレイヴに言う。

「あ??だから黒い剣は闇の魔法を

白い方は光の魔法の効果を得る事が出来るようになるんだろ??
だから、単純に見分ける為のもんじゃないのか??」

「まあ、それもあるんだけど・・・。

剣の色の意味はね、黒い方は闇黒鉄つてのが素材になっていて、
闇の魔力を蓄える事が出来るんだよ。

逆に白い方は——」

（逆に白い剣は・・・光の魔力を蓄える事が出来る・・・！！
確かあの時にシャーネルが光魔力をこの剣に入れてくれた覚えがある）

クレイヴは自分めがけて飛んできた魔法剣を黒い剣で受け流した。

「おっと・・・」

青年の体制が崩れる。

（今だ！）

クレイヴは黒い剣を地面に落とす。

闇の魔法の効力を受けられなくなったクレイヴの視界は一気に暗くなる。

ズシャ・・・。

クレイヴはすかさず、白い剣を引き抜き青年の胸へと突き刺す。

「おいおい、コレが仕事なのにヴァンパイアの特性も分かってないのか？？」

俺にはこんな只の剣なんか――」

自分の胸に刺さった剣を見ながら青年が言った。

「特性？・・・分かってるに決まってる？」

クレイヴがそう言った刹那、剣から光があふれ出す。

「！！！！なっ・・・」

青年は体の内側から発せられた光により消滅した。

「この仕事で生活してるんだから」

クレイヴはそう一言呟いてその場を立ち去った。

「ふう・・・ただいま。
今帰った」

「・・・」

クレイヴは、ネイラの自分の仕事が終わるとすぐに家に帰る癖にはもう慣れているので、戦闘が終わるとそのまま自宅へ直行した。
クレイヴには身体強化がかかっていたが、先程の戦いで黒い剣を落

とし闇魔法の補助を一旦切った為、クレイヴは何も無い状態で、行きと同じように

3時間かけて帰ってきた。

なので、自宅に着いたのはもうすでに明け方であった。

流石にクレイヴの顔には疲れの表情が見える。

自分の言葉に対する返事が返ってこない為、クレイヴは二階へ上がり問題の神様二人の寝室のドアをノックした。

ノックに対する返事も返ってこないなので、クレイヴは中を覗く。

そこで見たのはベッドとソファで幸せそうに眠る、銀色の美女と黒髪の美女の寝顔であった。

それを見たクレイヴはフツと微笑み、静かにドアを閉めた。

「・・・さすがに眠い。。。」

起きるのは夕方頃になりそうだな・・・」

そう言いながらクレイヴは自室に入り、ボフツツと自分のベッドに倒れこんだ。

森林での遭遇（後書き）

今回、ほとんどボケ無しです。

単純にカッコよさを出したかったのですが如何でしたか？

これからも戦闘以外はドタバタ、戦闘はクールに、と
メリハリをつけていきたいと思います。

それでは、次話もよろしく願います。

巨額請求につき。

世の中には地図に名前が載っていないような小さな村がある。

ここはその村の内の一つである「シアの村」だ。

小さな村と言っても住人は100人程いる為、色々な人の姿が見られる。

毎日家族を養う為に一所懸命に仕事をしている男性達。

家の前で談笑している主婦達。

池の周りで友達同士会話をしながら楽しそうに釣りをする子供達。

そんな、何処にでもある日常。

何処にでもある平和。

「何処にでもある、当たり前な物、ごく自然な事・・・だからこそ脆く、崩れやすい・・・」

遠くから村を見つめる男性の口から言葉が漏れた。

そしてその口はつり上がっていて、笑っているように見えた。

——ビュンッ！——

剣を持つ一人の金髪の青年——クレイヴの目の前を、獣型の魔族の鋭い爪が空気を切り裂くかの如く通り過ぎる。

「っ危なっ！」

バラバラ・・・とその青年の前髪が数本切れて地面へと空中を舞いながら落ちる。

この鋭利な爪に、この勢いで体を突かれたらひとたまり無いだろう。

「ふう・・・かんいっぱ・・・っ！」

更にクレイヴの左側からも同様に鋭い爪がクレイヴの顔めがけ襲い掛かる。

クレイヴは咄嗟にしゃがみ、慣性に逆らえない魔族の腹を剣で刺し、すぐに引き抜く。

このような獣型の魔族は、一般的に群れを成して獲物に襲い掛かる。ただし、この前畑にて戦った魔獣と違って攻撃がバラバラなので、リーダー的存在はいないと見られる。

クレイヴの周りには、まだ数匹の魔獣がクレイヴの隙を窺っていた。

「クレイヴ、何をやっている、それ位さつさと倒せ」

闇の神——ネイラが敵を闇魔力で構成された剣でなぎ払いながら言う。

「そうそう、コレ位の敵クレイヴならどうって事ないでしょ?」

光の神——シャーネルも同様にして、魔族と戦いながら言う。

「・・・一つ質問するぞ」

クレイヴは周りの魔獣から目を離さず、二人に言う。

「こうなつたのは誰のお陰だつた?」

「クレイヴだ」

「クレイヴ〜」

すでに敵を倒し終えたネイラとシャーネルは（むしろ彼女ら二人が強すぎて敵が近寄ってこないのだが）共に自分の契約主の責任だと主張する。

「いや、断じて俺では無い!」

「じゃ、誰?」

クレイヴの無罪を訴える言葉にシャーネルが聞き返す。

「誰って、、三日前の事だぞ!」

その年齢で耄碌もろろくするな!!」

「ギリギリの状態で私達に怒ってるクレイヴの方が頭大丈夫?？」

「お前に言われないし、全然ギリギリじゃない!

こっちは余裕タップリなんだ」

意地を張っている事が丸分かりである。

「……汗を浮かべながら戦う様の何処が余裕なのか理解できん」

ネイラのこの一言に、意地を張っていたクレイヴは――

「……あゝ、分かった!!

ハッキリ言って余裕無い!

手を貸してくれ!」

――助けを求めた。

「「ヤダ」」

(くっ！！・・・コ、コイツ等・・・覚えておけよ・・・)

「・・・」

二人同時に返ってきた言葉に、返答できない程の怒りを覚えるクレイヴ。

「そ・れ・に私達はもう、1000年以上生きてるんだよ??
忘れ事とかあっても仕方が無いでしょ。」

それとも、私たちの年齢知らなかったとか?」

「ふゝん、知らなかったよ。」

見かけに寄らず年取ってるんだな。

婆さんはもつと遠くに避難した方が――」

クレイヴが驚きもせず、シャネルに言い返そうとした瞬間。

(ヒュン！！！)

「のわっ！！危ないだろ、いきなり魔法撃つなよ!？」

「ふんっ、婆さん呼ばわりしたし・か・え・し!」

「へいへい、申し訳ありませんでした、お姉様」

「分かれば良しっ」

「で、三日前とは何の事だ??」

二人のやり取りが終わると同時にネイラが口を開く。

「……ホ、ホラ！」

ネイラも忘れてるじゃない!!」

「……ネイラもなのか。。

本当にお前ら頭大丈夫か??」

ネイラはシャーネルと違って

頭の方はしっかりしていると、思い込んでいたクレイヴはショックを受けている。

「「クレイヴの頭が??」」

「そこ、揃えるな!!」

しかも、明らかに俺は何処もおかしくないだろ?!

……とりあえず三日前だ。

三日前の夕方を思い出してみろ。

少し時間やるから！」

そう言つて、クレイヴは剣を前方の敵に向け、その敵めがけ走り、剣を振り落とした。

——三日前、夕方……

レランガート第二の都市ディラモートの周りの何も無い荒野。

その荒れ地にポツンと立つ二階建ての大きくも無く小さくも無い家。

その家からは青年の怒りの声が聞こえてくる。

「おい、シャーネル！！なんでこんなに高額を請求されてるんだ！！！」

クレイヴが、部屋の修理屋が置いていった領収書を持った手を、ブルブルと震わせながら叫ぶ。

クレイヴが持っている領収書には、数字と見るにしてはまだ良いが、お金として見ると頭が痛くなる程の数字が書かれている。

「な、何でって言われても……。移動費……。とか？？」

この、シャネルと呼ばれている銀髪の眩しい程の美女はやや動揺して答える。

「・・・確かに、町からここまで結構な距離があるが、そこまで移動費はかからない筈だ」

クレイヴは領収書から目を離さず言う。

「・・・私は修理屋さんが来て少し言葉を交わしただけだよ？」

「・・・言葉を交わしたってどんなだ」

「ええ・・・とお。」

ドアがノックされたから、ドアを開けて、挨拶して・・・」

「そこまでは大丈夫だな」

「それで、その後”絶対に壊れない位、丈夫にお願いします”ってクレイヴは思った。
それだ、と。

「それで??」

「修理屋の人が、少し高くなりますけど???って言ったの」

「・・・それでシャネルは――」

「お願いします。。。と」

シャーネルが上目づかいでクレイヴを見る。

「はあ〜」

溜息をついているクレイヴ。

「ごめん・・・」

「シャーネル、落ち込む事はない。

神様に家の留守番させるからバチが当たったに違いない」

そう豪語するのは、もちろんクレイヴでは無い。
今二階から降りてきたネイラだ。

「そうだ、そうだ〜」

「何でそこでシャーネルは無罪になる！！？」

・・・まあ、いい。

明日また依頼探してくるから」

「頼むよ〜チミい」

クレイヴを指差して偉そうにそう言ったのはシャーネル。

「・・・シャーネルも付いてこい！！」

「ええ〜・・・」

「ええ〜じゃ無い！！」

次の日……。

レンジャーギルド、ディラモート支部にて。

「何……？」

つまり今ディラモート近郊で完了できる依頼は無い……と？」

「ええ、そういう事になります」

「それは困ったな……」

次の日、クレイヴはディラモートのレンジャーギルド支部に訪れた。何か近場で完了できる依頼はないかと受付嬢に尋ねてみたが、そう都合よく依頼は見つからないもので、そのような依頼は見つからなかった、と返事が返ってきたのだ。

ディラモートのような大都市には、その大きさに見合うだけの戦力がある。

その為、このようなケースも珍しい訳ではない。訪れるタイミングが全てなのだ。

何時もなら出直す事もあるが、今回ばかりはそうはいかない。

兎に角、クレイヴには大金を支払うための金が”今”必要なのだ。

仕方が無い、とクレイヴは受付嬢に言った。

「それじゃ、ここから一番近い所でこなせる依頼内容を見せてくれ」

「はい、……こちらになります」

受付嬢は手際よく、分厚い紙の束からその依頼内容が書かれたものを抜き出しクレイヴに差し出す。

「……Aランクか……まあいい、コレでいい」

「了解しました」

「あゝ何とか思い出した」

ポンッとシャーネルは手で相槌を叩く。

「ふう、これで最後っ！！……」

クレイヴは仲間が全て倒され、動揺している敵に剣を振り下ろす。魔獣は断末魔の叫びをあげ、その場に倒れた。

敵ではあるものの、生き物を殺したと言う事には変わりはない。
そのような考えから、クレイヴは何時も戦闘が終わった後は複雑な
表情をする。

「クレイヴお疲れ」

シャーネルの明るい声を聞き、クレイヴの表情は元に戻る。

「・・・で、思い出したんだな??」

「うん」

「だろ?、やっぱりシャーネルがわるか・・・」

「クレイヴが悪い!!」

「何故そうなるっ!??」

「ん~~~~・・・何となく??」

「聞くな!!」

もういいっ!
先に進むぞ」

「りょうかい」

「・・・全く・・・五月蠅い二人を仲間に持ってしまったものだ」

ボソツとネイラが発した言葉は、対象の二人には聞こえなかった。

案外ネイラが一番大人なのかもしれない。

巨額請求につき。（後書き）

どうもです。

前の話とは違った、新しいストーリーがココから展開していく訳ですが、真の意味でのストーリーはまだ始まってない”かも”です。まずは、この三人を良く知ってもらおうという次第ですが、あくまでも”かも”ですので、関わりがある話かも知れません。

その所は想像にお任せします。

何処からこのドタバタな三人が世界と大きく関わっていくのか！！
乞うご期待下さい。

目標物の行方は

「ふう、やっと到着か。

依頼内容が物資の運送だけなのに、難易度がAだった理由は道中の大量の敵を見れば納得できるな」

クレイヴ達はあの後も何度か敵と遭遇したが、傷一つ負わずに目的地に到着した。

いや、正確的にはシャーネルの治癒系の光魔法で直しただけなのだが。

もちろん神様二人はそのような魔法は使わずとも、傷一つ付いていない。

クレイヴも大量の数の敵に集中的に狙われながら、傷は一つや二つ程度だったのを見ると

彼の実力の高さがどのようなものか分かる。

「小さな村だな・・・。

入り口にも人一人いないのか」

ネイラが何の気無しに発した言葉に、クレイヴは村に起こっている何かを直感的に感じた。

「この村、、何かおかしいぞ」

クレイヴが言葉を発した瞬間、3人は消しかけていた警戒心を強める。

「うん、確かに。。。

普通の村の雰囲気じゃないよね。

何か空気が張り詰めてるといつか、これは……………」

「強い殺気」

シャーネルが最後の言葉を言おうとした瞬間、クレイヴとネイラは同時に同じ言葉を発した。

その時……………。

（ドオオオオン！！！！）

3人の耳には大きな爆音が入ってきた。

三人は同時に爆音の聞こえた方向を見る。

目に映ったのは……………まるで、絵に描いたような「化け物」。

体長10m以上あるうかという程の黒い毛に覆われた巨体に三つの狼の頭。

それが、その化け物の姿だった。

「うつわ、大きいね」

「あれは……………魔族の中でも上位クラスに位置する三頭超魔獣ケルベロス……………魔獣の長だ」

呑気なシャーネルに続いてネイラが口を開く。

「あれが魔獣の長か・・・さつき戦った奴らの敵討ちにでも来たのか？」

クレイヴが微笑を浮かべながら言う。

「いや、魔王が消滅した今、知能が低い魔獣系では、魔界からこちらにくる方法は限られているはずだ。

一つは、魔界から他の魔族に転送してもらう方法だが、ケルベロス程の大きさでは魔王でもない限り不可能だろう。

もう一つは、こちらから魔方阵を描き、そこに一定のエネルギーを流し込み、召還する

もちろん例外はあるが、この二つ以外は使われることはまずない」

「ならケルベロスを呼んだ張本人はこの町に居る訳か」

「ああ、村の損傷状況を見ると、奴は「最近」現れたようだからな、そう考えても良いだろう」

「何で、クレイヴと一緒にいると余計な事が多発するんだろうね？」

シャーネルが頭に疑問符を浮かべてクレイヴに尋ねる。

「・・・俺が一番聞きたい」

「「「「・・・はあ・・・」」」」

やれやれ、と三人同時に溜息をつく。

「・・・兎に角、目標物が破壊されちゃ意味が無い。
先に物を回収するか。

それとも、先に奴を倒すか？」

クレイヴが気を取り直して尋ねる。

「先に物を回収した方がよさそうだ。

まだ奴は、私達の存在に気が付いて無いようだからな。

村人もこの様子を見ると避難・・・したかどうかまでは分からないが

少なからず村にはいないようだしな。

物を発見したら全力が出せる」

「私もそう思う。

久しぶりに全力で戦えるしね」

「それもそうだな。

流石に相手があれば・・・手加減できないな」

クレイヴ達はケルベロスの力量を直感で理解していた。

奴は強い。

それこそ先程戦った魔獣等とは比べ物にならない程、だという事を。

だからクレイヴは二人が全力を出してどんな事になるのかを理解し

ていても、それを拒みはしない。

「よし、じゃあ三人散らばって回収物の魔力石を――」

「待て、クレイヴ」

クレイヴはすぐにこの場を離れようとしたが、ネイラの言葉に反応し、その場に留まる。

「なんだ？」

「その、魔力石の属性は？」

「確か闇属性だったような……ああ、そういう事か」

クレイヴはネイラのその一言で、ネイラが言いたい事を理解した。

ネイラは闇属性の物全てを司る存在。

闇属性エネルギーが発せられている場所は、それが例え微量の物であつても位置を特定できる。

「そういう事だ。」

この村に近づくにつれて、強い闇属性のエネルギーを感じていたからな」

「で、それは何処にあるの？」

シャーネルが首を傾げて聞く。

「……あそこだ」

ネイラが指を指したのはケルベロスがいる方向。

「何???つまりケルベロスの近くの家に入らないと——」

「勘違いしてはいけない。

言っておくが、今、私達が探している物はこの村には無い。

悪魔でも、私が指し示したのは、大量の閻属性のエネルギーがある場所だ。

この意味が解るか?」

クレイヴが言葉を全て言う前に、ネイラがそれを否定し、逆に聞き返す。

暫く顎に手を当てて、考えた後、クレイヴはハツとした表情をする。

「つまりだ。

もう、その魔力石は使われてしまったのだ。

莫大なエネルギーを消費する「モノ」に・・・」

ネイラはクレイヴの表情をみて説明する。

「その、莫大なエネルギーを消費する「モノ」が、奴か・・・。

それで奴が今、ここにいる理由も説明がつく訳だ・・・」

「じゃ魔力石は使われちゃったんだ?

それじゃ、帰ることに——」

「ならねえよ!!」

「ちえ・・・」

「・・・恐らく、ケルベロスを倒せば魔力石の原石程度は戻ってくるだろう。」

原石さえあれば、後は私がどうにかしよう」

ふてくされている、シャーネルを無視してネイラは話を進める。
どうやらネイラは今回の依頼の重大さが解っている様である。
最も、この依頼を重大にしたのはシャーネル以外の何者でもないのだが。

「ああ、そうか、ならいい」

先程にも述べたとおり、ネイラは闇を司る神という存在だ。
ネイラならどうにかなるだろう、とクレイヴはネイラの言葉を信じることにした。

そして再びケルベロスの方に目をやり、キツと鋭く睨みつける。

「それじゃ、そろそろ始めるとするか」

コクリ、とシャーネルとネイラはクレイヴの言葉に頷く。

クレイヴは背中に背負っている白い剣を抜いた。

目標物の行方は（後書き）

更新が非常に遅く申し訳ありません。（汗）

しかし、まだ終わってません。

必ず最後まで書き切りますので逃げないでくださいね。

さて、ここからあとがきです。

入村直後に問題発生でございます。

まあ、今回は前回と違って敵にもいろいろ訳ありなようです。

それが、どのような理由で？

本当に悪なのか？

色々な考えを膨らまして是非次回をお楽しみに！

悲しき男の求める答え

「それじゃ・・・シャーネル、頼む」

「・・・うん、それじゃ何時もので良いよね？」

シャーネルは未だに不満気だ。

仕事が嫌なのにも拘らず、何故クレイヴと契約したのかは謎である。それはネイラにも言える事でもあるが、今回は真面目にやっているようだ。

「え」と・・・ああ、そうだ。

ついでに空気抵抗の軽減も頼む」

「またマニアックな能力使うね」

「いいから」

「はいはい」

シャーネルはクレイヴの方に手を開き、両手を重ねる。

その重ねられた手からは白い光が溢れている。

そして、その光がクレイヴを包みこむ。

シャーネルが行ったのは、前の戦いでネイラが行ったものと同じ系列の魔法だ。

物体その物を強化するネイラの闇魔法に対し、シャーネルが使用するのは空間の条件を変える光魔法。

今クレイヴに掛かった効果は、クレイヴの体と空気の境目に光の壁を発生させ防御性能を上げる防御魔法。
物にかかる重力軽減、そしてクレイヴが言った空気抵抗の軽減だ。

「で、それを使ってどう戦うの？」

「説明してる時間は無い。

まあ、見れば解るさ。

とりあえず合図したら、二人とも俺の指示通りに頼む」

「了解」

「よし、行くぞ・・・」

三人は同時にケルベロスへと駆け出した。

3人は後ろへ回って攻撃する事はしない。

何故なら魔獣系は知能こそ低い。身体能力に優れている種類の魔族である。（もっともケルベロスは魔獣系の頂点に君臨する魔族ゆえ知能も他の魔獣と比べ高い）

視覚、聴覚、嗅覚・・・あらゆる器官が人間より優れているのだ。

わざわざ後ろへ回って近づいても足音でばれてしまう。

それどころか、移動中に見つかり、不意を突かれようものなら形勢が悪くなってしまう。

ならば、正面から一気に近づいたほうが良い。

それがクレイヴ達の魔獣系を相手にする時の暗黙の了解であった。

「っと・・・流石に見つけるのが早いな」

ケルベロスは3人が駆け出して、間も無く3人を発見した。

「・・・奇妙だな。

何故攻撃してこない??」

ネイラが言うとおり、ケルベロスは攻撃してくる気配は無く、ただ3人をじつと鋭い目で睨んでいる。

ネイラがケルベロスの行動を疑問に思うのも可笑しくは無い。賢いといえども所詮魔獣、獰猛なケルベロスは敵を見つけたら襲い掛かってくるはずである。

「いいんじゃない?

攻撃してこないなら一気に叩けば終わりじゃないの?」

「何か引つかかるな。

・・・よし、二人とも止まってくれ。

ここは歩きながら近づくことにするぞ」

「・・・うむ、クレイヴの意見に賛成だ。

何があるか分からんからな、慎重に進むべきかもしれん」

ネイラの言葉を最後に、三人はスピードを落とし歩き出す。ケルベロスはまだ3人をじつと見ている。

しかし、3人とケルベロスの距離が10m程になった瞬間その沈黙

は破られた。

「——まさか、まだこの村に人がいるとはな・・・」

「っ！？喋れるのか?!」

本来言葉を話すはずが無い魔獣が言葉を発した。
クレイヴが驚くには十分な理由だ。

「驚くのも仕方が無い・・・か。

俺自身も、望んでいたはずのこの姿に驚いていた所だ。

まさか、魔力石一つを使用するだけでここまで簡単に心体融合が・
・・・力が手に入るとは思わなかった」

「心体融合だと・・・??

すると、お前は本来人間で・・・魔力石を利用してケルベロス
と融合したと?」

ネイラは驚く様子も無く、ただただ無表情でケルベロスに問いかけ
る。

「そうだ。

これで、力が手に入った、何者にも負けぬ力が・・・」

「全ては力の為って言う訳??」

シャーネルもネイラと同じように無表情で問いかける。

「ああ、そうだ。

ただし、俺は無駄な殺戮をするつもりは無い。

今だって、あんた等が道を開けさえすれば危害を加えるつもりは無い」

「まあ、細かい経緯はよく分からないが、黙って通す訳にはいかないな。こちらにも仕事があるからな」

クレイヴはあくまでも仕事第一の男だ。もうすでに現実を受け入れ冷静にケルベロスの相手をしている。

「仕事？」

俺を倒しに来たのか？」

「ふっ、まさか。」

あんたその姿になってまだ数分・・・長くて一時間って所だろう。そんな短時間で依頼の登録は出来ない」

「なら何故ここに来た」

「依頼内容が魔力石の回収だからさ。でも、あんたの予想、半分は当たりだな、笑ってすまなかった」

「・・・どういう意味だ」

「あんたがさっき”使った”って言った瞬間、標的は自動的に――

クレイヴはトンツと地面を蹴る。

普通なら只のジャンプになってしまうが、

今は重力軽減の効果が掛かっている為一気に30メートルの所まで

体が浮く。

——あんたの命になったからだ」

クレイヴがそう言った瞬間、上昇するクレイヴの体は空中で止まり、落下し始める。

「聖なる光の剣により悪しき心を滅せん——中級光魔法剣、シャイクソード」

クレイヴが呟いたのは、魔法剣の術文である。

術文とは、その魔法の効果を言葉に圧縮したもので、術文を唱えることにより体内の魔力が変換され効果が発動するのだ。

ネイラやシャーネルは直接魔力エネルギーを扱える者なので、ある程度までは術文なしでそのまま発動できるのだが

生身の人間では、よほど魔力に優れていて初級を術文なしで、発動可能するのが限界である。

もちろんクレイヴは神と契約している身ではあるが、それ以外は生身の人間となんら変わりは無いので中級魔法では術文は必要となってくる。

クレイヴの持つ剣から光が溢れ、その長さは30m程になった。そして、一気に地面にいるケルベロス目掛け振り下ろす。

ケルベロスは何も臆する様子も無く、地面を一蹴りし、光の刃から身を回避させる。

「やはり、見逃してはくれないようだな。。」

いいだろう、ならば相手をしようではないか。
新しい体に慣れる良い練習くらいにはなるう」

「ああ、その体の感覚をしっかりと味わうんだな。
最初で最後の戦いだ」

スツ、と着地したクレイヴはケルベロスにそう言い放つ。

「面白い冗談でも言っているつもりか？
それとも虚勢を張っているのか？

まあどちらにせよ——」

三つの内の左右二つの頭の口が大きく開いた。

「お前に生きる道はもう無い」

中心の頭がそう言った直後、左右の開いた口から、クレイヴ目掛け
灼熱の炎が襲い掛かる。

そしてクレイヴはあっという間に炎に包まれた。

「・・・口ほどにも無いな。

実力以上のことをやろうとするとこうなる。

あとはあの若い娘が二人か、、さてどう——」

「化け物の体を借り、自分の実力以上の事をしてるのはお前の方だ
ろう・・・」

油断していたケルベロスの表情が一気に鋭くなる。

そして、声のした方向へ顔を向けるとそこには傷一つ無いクレイヴ
が剣を構え立っていた。

「な・・・何故だ。」

このケルベロスの火炎に直撃して生きていられる奴など・・・」

「所詮・・・自分の力じゃない力なんてそんなものさ。」

真のケルベロスが全力で火を吐いたら、俺は多分、灰も残らずにこの世からいなくなつて――」

（ビュウン！！！！）

「――のわっ！！」

真剣そのものの表情で話をしていたクレイヴはいきなり何かを避けるように横に飛んだ。

先程までクレイヴがいた場所は黒くこげていて、煙が地面からプシューという音を立てて出てきているのが見える。

「・・・おい、シャーネル。」

何のつもりだよ？」

クレイヴは先程避けた「光属性の魔法」が飛んできた方向を見てそう言った。

「光属性の魔法」なので無論クレイヴが向いた方向はシャーネルの方向となる。

「クレイヴ？」

さっき自分が何言つたか分かつてる？」

「何か気に障ることでも言つたか？」

クレイヴもシャーネルも無表情であるが、それでも、いや、それだからこそ二人の心の怒りを感じ取る事が出来る。

一方ケルベロスの方はこの二人の雰囲気には圧倒されてか、手を出す事も出来ず、ただただ啞然としていただけである。

「クレイヴさっきこう言ったよね？」

『真のケルベロスならクレイヴはとっくにこの世から消えてる』
「つて」

「ああ」

「それはつまり、私の光の壁がこんな犬コロ一匹の炎なんかで消えちゃうって意味だね？」

「あ・・・いや、それはその・・・」

クレイヴは無表情さを崩し、急に、しまった、という表情になる。
先程までの威勢がまるで嘘の様である。

「何？何か言う事あるなら5秒以内に言ってよ。」

5・・・」

「5秒！？え〜と・・・」

「43210、いつきま〜す」

「カウント早ッ！！まつ、待て！！」

「もう待ったでしょ？」

暗黒魔法、ダークネス・インヴェイション」

ネイラの手には大量の闇エネルギーが放出され、それが徐々にケルベロスを覆っていく。

「くっ……！！お前らは……一体——」

ケルベロスはそれを何とか逃れようとするものの、迫り来る闇に打つ手も無く、闇に包まれてしまった。

「……一応、闇の神様をやっている者だ」

その黒い空間に向って最後ネイラはそう呟いた。

さらに同時刻、村の中心部では光が発せられ

「や、止めるおおお！！！！」

と言う叫び声と共に大きな爆発が起きた。

そして数秒後。

「ネイラ、終わったよ——」

シャーネルの呑気な声が聞こえてくる。

（私は二人の勝敗等どうでもいいのだが——）「——こちらも今終わった所だ」

ネイラもシャーネルに届くように大きく返事をした。

「ああ、そう？

なら、この馬鹿契約主を連れて今そっち行くから」

その様な声が聞こえてすぐに、シャーネルが走ってきた。

もちろん片方の手には、ボロボロの気を失っているクレイヴが引きづられている。

しかし、クレイヴの手にはまだ剣が握られており、彼の意識の強さが窺える。

「・・・では、目標物を回収してさっさと帰って寝るぞ」

このような光景をみても動じないネイラの神経も相当なものである。

「うん」

「う・・・う・・・う・・・」

「ん？まだ息があったか。

流石はケルベロスの「肉体」だな。

私の扱う魔法の中でも上位のものを受けて生きているとは」

辛うじて生き残り、苦しそうな声を出しているケルベロスに対し、無表情で皮肉っぽく語るのはネイラである。

「な・・・何故だ・・・。」

お、俺はアイツの為にも・・・。」

その言葉を聞いて、少し考える仕草をした後、ネイラは再び口を開いた。

「・・・経緯はよく分かんが、息がある内は話くらいは聞いてやっても構わんぞ？」

お前が分からない事が分かるかも知れない」

「・・・俺が分からぬ何か・・・。」

そついえば先程、お前は自分を闇の神だと言ったな」

「ああ。」

信じられないのなら、別にそれでも構わん」

「いや。」

それは俺自身の身を持つてお前達が只者じゃないことを理解したからいい。

ただ、死ぬ前に俺の分からない何かがある可能性があるのでしたら・・・

死までの残り少ない時間を闇の神に託そう・・・そう思ったただだ」

「ふっ・・・それでは話を聞こうか。。。」

何故こうなったのか、何がお前をこうさせたのか」

「11年前・・・・・・・・。。。」

俺の名はファラエルリンク。

俺は14歳でデイラモートにある、デイラモート魔術学校に入学した。

知っていると思うが、デイラモート魔術学校は幼い子供から大人まで、世界でもトップレベルの才能ある奴らが入学できる。

俺は周りに無理だと言われ続けたが必死に勉強して入学した。入学した理由は今まで良くしてもらっていた両親の為・・・・つまりは親孝行が目的だった。

そして、俺が2年生に上がって間も無いころ、両親は仕事の都合で・・・・何処だったかは忘れたが1週間出かける事になったんだ。

本来なら俺も学校を休み着いていく予定だったが、たまたま年に4回行われる魔法の実技試験の日と重なってしまっ
着いていけなかった。

俺は同じくディラモートの中にある祖母の家に一週間居る事になった。

実技試験当日。

俺の中では5度目となる実技試験。

入学して以降、必死で周りについていこうという気が俺を後押しして、俺は校内でもそこそこの名の知れる存在となっていた。

もちろんその日の試験も無事終了した。

いつもどおり、いや、何時も以上に手応えがあった。

順位の発表が楽しみだった、5番以内いやトップすらも狙えるかもしれない。。。

そんなような喜びを味わいながら、俺は祖母の家に着いた。

「ただいま」

「あ・・・ああ、お帰りなさい」

気のせいか祖母の雰囲気は何時もより暗かったような気がした。

でも、そんなことは、喜びで満ち溢れていた俺には解らなかった。

そしてそのまま、俺は話した。

「今日の試験は凄く良い出来だったよ。
下手したら、トップだって狙えるくらいだった」

「そう。

それは良かった・・・」

その時の祖母の顔は確かに笑っていた。
今思い出せば、その顔に何か別の物が見えたかもしれない。

でも、その時の俺には、その祖母の顔は笑っているようにしか見えなかった。

「早く父さんや母さんにも知らせたいよ」

順位が発表された訳でもないのに本当に舞い上がっていた。
せめてこの気持ちだけでも両親に伝えたかった。

そして順位発表の日。

俺は、生きてきた中で一番の幸せだった。
見事、成績で一位を勝ち取ったのだ。

そしてもう一つその日は楽しみがあった。

両親が帰ってくるのだ。

早く家に帰って両親の帰りを待とうと、俺は祖母の家まで全力疾走した。

「ただいま」

「お帰りなさい・・・」

一週間、毎日聞いた祖母の声が返ってきた。

「やった・・・」

トップだった。。

とうとうやったんだ！」

「おめでとう・・・」

よくやったね」

今日も、あの日と同じで祖母の雰囲気微妙に暗かったが、そんな事はもちろん解らなかった。

もっと喜んでくれるだろうと思って、心の中では拍子抜けしたが、そんな事はどうでも良かった。

「さて、あとは父さんと母さんの帰りを待つて、帰ってきた瞬間驚かしてやるう」

俺は、心躍る気分で、玄関のすぐ近くにある背もたれの無い簡素な木のイスに座った。

数分後、俺はウキウキしながら踊る気持ちを抑えながら、じっと座っていた。

もうすぐ・・・もうすぐ帰ってくる。

と、強く思いながら。

数分間の沈黙。。。

「うつ・・・うつ・・・」

祖母が唐突に涙を流し始めた。

「????・・・何かあったの?」

俺は訳が分からずただそう聞く事しか出来なかった。

「・・・実は・・・父さんと母さんは・・・帰ってこれなくなちやったの・・・」

「えっ・・・」

一瞬、祖母が何を言ったのか理解できなかった。

「帰ってこない?」

「・・・うん・・・」

言葉を理解した俺は、てつきり期間が延びただけだと思っていた。しかし、俺は涙ながらに答える祖母の姿を見て、ある最悪の状況が

脳内を過ぎる。

「な、なら、何時帰ってくる？」

その考えを振り解こうと、俺は祖母に話しかける。

「・・・あの、試験の日当日に、連絡が入ったの。。

一台の車両が魔族の魔法に当たって大破したって・・・」

祖母の声はかすれて聞き取り難かったが、このような事を言ったのは確かだ。

そんな事故の話をこのタイミングで切り出されたら、嫌でも祖母が何が言いたいかわかる。

何故帰ってこないのか、その車両は何処の家の物なのかも全て理解できた。

「そ、そんな・・・」

「ごめんね・・・。

あなたの喜ぶ姿を見てたら言い出せなくて・・・」

俺はその言葉を聞いた瞬間、祖母の雰囲気がかここ最近暗かった意味もようやく理解できた。

俺の心はつい先程、喜びの頂点にあった。。。それが一気に絶望の渦の真ん中に叩き落された。。。

伝えたい事が伝えられない、合いたい人にもう会えない。一晩中、そして次の日も何もやる気が出なかった。ただ、出てくるのは目から溢れる涙だけ。こんな悲しい事が世の中にあるのかと思った。

何日か経って、心が落ち着きを取り戻した後、俺は再び学校に通い始めた。

だが、両親を亡くした俺は何も目標と呼べるものが無くなりつまらない日常が繰り返されていた。

目標が無けりゃ誰だって行動を起こさない、そうだろう？

確かに俺はあの事件から毎日の日々に飽き飽きしていた。

学校を辞めてしまおう。

いや、いつその事死んでしまおうか。

そんな事も思った。

しかし、そんな考えを打ち消す出来事があった。

それはある女性との出会いだった。

彼女は毎日庭で花の世話をしていた。

それはもう大切そうにニコニコしながら花と接していたんだ。

花の世話をしている時の彼女の笑顔が眩しくて、俺は気になって彼女に話しかけてみた。

何故そんなに花を大切にしているのか、と。

その時返ってきた返事に俺は――

「・・・私、実は捨て子なんです。

私は物心がついた時から一人でした。

拾われて、孤児院に入った時も・・・。

でも、花は何時も私に微笑みかけてくれます。

もう花は私の家族同然なんです」

―― 衝撃を受けた。

何処に衝撃を受けたのだろうか。

彼女が捨て子だという事？

違う。

初対面の俺にここまで自分の事を話してくれた事？

違う。

俺が驚いたのは、彼女が親の顔すら知らないで今まで生きてきたと言う事だ。

親の温もり・・・家族の温もりすらも彼女は知らない。

その、温もりを求めて見つけた家族が「花」なのだろう。

俺は自分の両親の死を聞いた時から・・・本気で自分が世界で一番不幸なんだと思い込んでいた。

今考えてみればバカバカしい。

本当の家族の温もりが分からない。

それ程不幸な事があるのか・・・。

俺は自分の愚かさに気付いたんだ。

彼女の話聞いた後、俺は自分の事を自然と話し始めていた。

家族の事、そしてあの事件の事も。

彼女はとても熱心に俺の話を聞いてくれた。

両親が居ないという悲しみを誰よりも理解しているからだろう。

そして俺は彼女に惹かれていった。

俺達は、何時しか恋人同士となり、それはもう、とても毎日が楽しかった。

『目標』を無くした俺は、代わりに一つだけの『生きがい』を神様から頂いたのかもしれない。
そんなことも思った。

そして、時は流れ卒業試験の日——あの悲しみは再び繰り返される。。。。。

卒業試験は大規模な魔術を使うため、デイルモートから少しはなれた何も無い所で行うことになっている。

魔族が現れた場合に備えて、校内でも有能な魔術師数名が同行している。

これなら、何時誰が襲ってきても何事も無かったように試験ができるだろう。

皆そう思っていた、もちろん俺もその一人だった。

だが、現実とは違った。

「ギヤアアアアア……！！！」

悲鳴が響き渡る。

あたり一面煙だらけ。

周囲を確認するにも出来ない状況だ。

ただ、ついさつき何がこの場で起こったかは理解できた。

杖をもった黒い影が試験中にフワッと現れ呪文を唱えたのだ。

授業で習った魔族だ。

あまりに有名でむしろ名前を知らない人のほうが少ない。

上級魔法を使いこなし、知能も高く、人間との会話も可能と聞いている。

マジシャン系の魔族の頂点に君臨する魔族——ネクロマンサー。

俺は奴の姿を見た瞬間適わないと判断した。

そこから、彼女を連れて逃げ出そうと思ったのだが、煙で何も見え

ない、故に彼女の位置も分からない。

分かるのは、回りから聞こえる悲鳴は同じ学校で6年間過ごしてきた者たちのものだということだけだ。

もうすでに彼女は殺されているかもしれない。

そう思うと足が震える、しかし俺はその場を蹴って走りだす。何に走っているのかは分からない。

この方向には誰も居ないのか、彼女が居るのか、それとも魔族がいるのか。

だが、運がいいことに俺が走り出した瞬間、煙がはれてきた。

俺は立ち止まり辺りを見回す。

周りには少し前まで生きていたのかすら分からない程、黒焦げになった死体が転がっていた。

俺はこの死体の中に彼女が居ない事だけを願った。

「——ファラエル——!!」

誰かが俺の名を呼んだ。

間違いない、これは彼女の声だ。

俺は声が聞こえてきた方向に振り向く。

「ファラエル！逃げて！」

全身の毛穴という毛穴が開いたような気がした。

ネクロマンサーが彼女の方を向いて立っている。
手には鋭い刃物が先についた杖を持っている。

そして俺は瞬時に理解した。

この後、彼女の身に何が起こるのかを。

理性も何も無い、ただ本能だけで俺は彼女の元へ駆け出した。

「・・・ファラエル、、お願い・・・逃げて。。」

しかし、彼女の頬を涙がつたうのが見えた瞬間、俺は足を止めた。

「ファラエル・・・ありがとう・・・」

私はあなたに出会って、本当の人の温もりが分かったの・・・」

ネクロマンサーが持っている杖の刃を彼女の方へ向けた。

「っ・・・!!」

「そんなファラエルにはこれからも多くの人を幸せにして欲しいの・・・」

だから逃げて。。」

「な——何言ってたんだ！俺は——」

「私は何処に行っても絶対に忘れない。。」

家族同然の一人の温かい同級生の事を・・・」

——お前がいたからこそ・・・」

「本当にありがとう……」

ネクロマンサーは彼女の腹へ刃を突き刺した。

刃を抜くと彼女はその場に力なく倒れた。

そしてネクロマンサーはこちらをチラリと見た。

悲しみ、恐怖、憎悪……全てのマイナスの感情が俺の中では交じり合っていた。

ネクロマンサーが目の間にフツと現れた。

「さっさと殺してくれ。」

今の俺は死んだ方が幸せになれる」

これは、俺の心の底からの願いだった。

しかし……。

「……町へ戻れ。」

そうすれば次にお前がやる事が見つかるはずだ。

それが終わった後に、、願えば私はお前の前に姿を現そう。

そして、先ほどの願いを叶えようではないか。
だから今は・・・お前は生きるべき存在だ・・・」

ネクロマンサーはそういい残し、そのまま何処かへ消えてしまった。

負の感情の逃げ場を失った俺は・・・泣いた。

「うつ・・・うつ・・・うつ・・・」

彼女にさえ・・・出会わなければ・・・出会いなどと言うもの
さえなければ。。。」「

こんな悲しい思いをせずに済んだのに・・・。

俺は一時間泣き続けたあと、ネクロマンサーの言葉通り、その場を
立ち去り、町へ戻った。

そして、その一週間後だ。

悪夢の日に同行していた魔術師が魔法すら使えない只の王国の
兵士だという事が分かったのは。

俺は彼女や両親の為に王国の奴ら・・・いや、魔法そのものを無く
してやるう、何としてでも力を手に入れようと強く心に誓ったのだ。

「……つつ……おい！！シャーネル！！……
って、何泣いてんだよ？」

話が終わるタイミングを見計らったようにクレイヴは目を覚ましこ
う言った。

「クレイヴ、起きたか」

「だつてええ。。。。」

可愛そうじゃん。。。。

クレイヴのばかああ！」

シャーネルの手から、またしてもクレイヴに向って光魔法が放たれ
る。

「いや、ちょっと待て意味がわから——」

たった今起きたばかりのクレイヴの、ない、と続くはずの言葉は

(ドォーン)

と言う音にかき消され、クレイヴはまたもや気絶してしまった。

「……いつも、二度寝をするなど言っているのはクレイヴだとい
うのに」

正確的には、強制的に二度眠らされているだけである。
それを分かっているネイラは普段の仕返しとばかりにクレイヴに言った。

無論返事は返ってはこない訳だが。

「そろそろ、良いか？」

俺はもうそんなに長くは無い・・・」

ケルベロス・・・いやファラエルは3人のやりとりが終わった事を察し、そう言った。

「ああ、すまん」

「・・・では、教えてくれ。」

人と出会えば別れはやってくる。

私は人と会おう意味が分からないのだ。

そこには悲しい別れがあるだけではないのか？」

「・・・・・・・・もし人との出会いがなければ――」

ネイラは少し考えた後、静かに口を開いた。

「――止めておこう」

「ちょっと！！ネイラ！」

何！？久しぶりに良い事言うかと思っただのに！」

「久しぶりとは余計だが・・・。」

ならばシャーネル、今ファラエルに答えを教える事に意味はあると思うのか？

それは意味を成すのか？」

ネイラの何時もとは違う雰囲気にくるたえるシャーネル。

「それは・・・で・・・でもっ！！！」

「いいんだ・・・白い嬢ちゃん・・・」

「・・・すまん、今は教えられない。

これがあんたにとって最善だと思ったのだ」

「謝る事はない。

俺は過ちをせずに済んだのだからな。

それに死後の世界でその答えを探すという目標も見つかった」

「ふふっ・・・その言葉を待っていた」

ニツコリとネイラが笑う。

「・・・それで、お前らは何故この村へ、魔力石を回収しに来たと言ったな？」

「ああ」

その返事を聞いたファラエルの体が急に光を帯びた。

「ファラエルさんっ！！何を！！？」

シャーネルは驚きファラエルの元へ駆け寄る。

「私の最後の力を振り絞り、この体を犠牲にすれば原石にも再び闇の魔力を戻す事が可能だろう」

「そつ、そんな!？」

「・・・闇の神に任せれば原石に力を宿す事は可能だろう。だが、最後まで迷惑を掛けっ放しでは俺も死ぬに死ねん。どうせもうじき死ぬ体だ、自分で巻いた種くらいは自分で処理をしよう」

「ファラエルさん・・・」

「それと・・・村人はここから東にある洞窟に逃げ込んでいるはずだ」

ファラエルは頭だけ東の方向へ向け、そう言った。

「殺したのでは無かったのか」

村には人一人居ない、ならば何かしらファラエルが手を加えたと考えるのが普通である。

「一応この村で数週間生活したものだ。情が湧いてしまつて殺すに殺せなかった。

村の人たちに伝えてくれ、恩を仇で返してすまないと・・・」

そう言い終わるとファラエルを包む光が強さを増してきた。

それは同時にファラエルの死期が迫って来たことを意味する。

「達者でな」

ネイラはそれを察して別れの言葉を告げる。

ファラエルは口の端を吊り上げ、苦しそうな表情の中に笑みを作って光の中へ消えていった。

「・・・ねえ、ネイラ」

「何だ？」

「別れて寂しいね・・・」。

ファラエルさんの言うとおり人との出会いと別れは悲しみしか生まないのかな？」

「例えば・・・私やクレイヴがいなくなってしまうたら・・・。シャーネルの心に残るのは悲しみだけだと思うか？」

「・・・」

「人と人は出会い、そして別れにより成長できる。

思い出を懐かしみ、悲しみを乗り越え、より人は成長する。

出会わなかったら、それこそ何も生まれない。

そうは思わないか？」

「・・・うん。

そうだよね！

何か分かったような気がする」

「そう――」

ネイラはスッと空を見上げた。

ファラエルはその何かを探しに……今、旅立ったのだ。

3分後・・・・・・・・。

「う・・・・・・・・痛っ！！・・・・・・・・何が起きた・・・・・・・・？」

「起きたのは、クレイヴだぞ？」

ネイラがクレイヴに皮肉っぽく言葉を返す。

「そうじゃなくて、何で俺が二度も気絶してたかって事だよ・・・・・・・・。」

あ・・・・・・・・そういえばシャーネルの泣き顔を最後に見て記憶が飛んでるような・・・・・・・・。」

クレイヴは頭を抱えながら必死に考える。

それを見たシャーネルはそれを止めさせようと必死に誤魔化そうと始める。

「き、きつと一回目の気絶が影響したんだよっ！」

「一回目？・・・だったらシャーネルのせいって事に・・・」

「あ・・・」

全く逆効果の誤魔化しである事にシャーネルはより一層焦りだす。

「いや、それは・・・その・・・」

「クッ・・・ははっ、シャーネル、嘘は止めたほうが良い。
もう分かってるよ全部」

微笑みながらシャーネルに言葉を掛けるクレイヴ。

「全部？」

寝てた訳では無いのか？」

「えっ！？そうなの？」

「ああ、気絶してるフリと言うか・・・。

気絶するかと思っただけで気絶しなかったから間を伺ってたただけだ。
二回目も同じようにな。

何はともあれ、流石、世界一の光魔術を扱う者の防御魔法だ」

シャーネルの方を向きクレイヴはそう言った。

「ははははっ」

そうして、三人は再び笑いあいながら村を後にし、東の洞窟へ向い、人々を村へ送り届けた。

「ただいま〜〜〜!!!」

シャーネルが勢い良く家のドアを開ける

その瞬間。

（バキッ!!!）

ドアが吹っ飛んだ。

「あ……………」

「……………シャーネル……………」

「……………ふむ……………」

上からシャーネル、クレイヴ、ネイラの反応である。

「は……………はははっ……………修理屋呼ぼっ！」

何故か笑った後、シャーネルは笑顔でそう言った。

「……………呼ぶのは勝手だが相手はお前にさせんぞ」

「りよ……………了解……………」

クレイヴにそう皮肉を言われたシャーネルは、ただただ苦笑いするばかりであった。

先程までドアのあった場所からは、シャーネルの心境を表すかのごとく、乾いた風がスースーと入りこんできていた。

都市でも嵐は止まらない

デイルモートの城下町。

日中は大勢の人で賑わい、買い物や話をして楽しんでいる。店も、色とりどりの野菜やら、食べ物かどうか分からないような物を並べてる店まで様々である。

そして丁度その時間帯、人ごみの中には何時もの、あの三人も混じっている。

そして、早速クレイヴは人混みに揉みくちやにされていた。

「おいっ！！シャーネルッ！」

人混みに揉みくちやにされながらクレイヴはそう叫ぶ。

「何〜〜？？」

シャーネルは振り向くも、声の発信源が何処にいいのかをキョロキョロと探している。

勿論シャーネルの周りにも人はいるが、その特別際立って見える輝きに皆避けて通っているように見える。

ちょっとしたクレーターが出来ていってると言っても過言ではない。

「何？じゃない。」

あんまりはしゃぐなって言ってるだろ！」

「今日で町に来たの3回目だよ？

騒いで当然っ！！

それに、そんな事言ってたっけ？」

「今ので14回目だ。

契約主が信用ならないのは分からないでもないが、迷子になっては困るぞ」

そう冷静にクレイヴの後ろで淡々と語っているのはネイラだ。ネイラの周りも、ネイラ特有の美しさに近寄れないでいる。

「ネイラ、後半部分結構引かったぞ。

どさくさに紛れて、結構無茶苦茶言っていないか？」

「・・・真実だ。

違うか？」

「・・・信用してないなら契約するなって・・・・・・・・」

ボソッと、クレイヴはネイラの言葉に文句を漏らした。

「何か言ったか??」

「いいや、何も」

「二人とも何言ってるの~~~~!!？」

聞こえな~~~~い!!！」

先程よりも確実に、シャーネルの声が聞こえなくなってきた。
あの大声が小さく聞こえるのだ、二人の話し声など町の賑わいにか
き消されて当然である。

「つて、おい!!」

シャー・・・ネ・・・ル？」

「見えなくなっ たな」

ネイラのその一言に、クレイヴは溜息をついた。

「光の神様、迷子・・・か」

「フツ・・・」

一方、シャーネルは・・・。

「あれ？二人とも、いなくなっちゃた。

全く・・・人と神様が同時に迷子になるなんて・・・聞いた事
無いよ」

そう言って立ち止まり、ヤレヤレと肩を落としていた。

明らかに自分が迷子である事には、気付きそうも無い様子だ。

「まっ、いつかー!!今日くらい自由でもー!!」

シャーネルはウキウキした様子でまた歩き出すのであった。

クレイヴは一旦、人混みから脱出しようと、ひたすら人混みをかき分けていた。

「つと……ネイラ」

クレイヴは人を交わしながら後ろにいるネイラの名を呼ぶ。

「なんだ」

「今日は何しに町に来たんだ？」

クレイヴは自身が一番分かっている質問を聞いた。

ネイラもそれを聞いて不思議そうな顔をするが、とりあえず気を取り直して質問に答える事にする。

「???……食料を買いに来たのだろう？」

「買い物をすると言ってたのはクレイヴ自身ではないか」

「正解。」

でも、今やらなきゃいけない事は？」

「・・・１ シャーネルを探す、２ 食料を買う」

少し考えたのか、少し間を空けてからネイラはそう答えた。

「何で早速やる事が２つに増えてんだよ！！！」

歩きつつ、頭を抱えるクレイヴ。

他の通行人も、いきなり叫んだクレイヴの方向をチラチラ見ている。確かに端から見るクレイヴの動きは不審である。

「私に怒られても困るのだが・・・。
何時もの事だろう」

「そうだが・・・」

「見る、人が少なくなってきた。
幸先良いスタートではないのか？」

ネイラの言うとおり、人が少し減ってきた様に見える。

余裕が出来たからか、クレイヴは急に振り返ってネイラの顔を見る。

そして顔を見ながら、地面を指差し言う。

「シャーネルが今ここにいれば最良だった。
あいつを町へ放つてみる・・・」

その言葉の後、クレイヴは少々考えるような仕草をして、また口を開く。

「例えば……始めて3人で町へ来た時だ。
どんな事が起こったか覚えてるだろ？」

「シャーネルが町でガラの悪い10人余りの男達に絡まれ、
それを全て振り返り討ちにする過程で、近くの家、4、5軒の壁に大
穴を開ける等して多大な被害を齎した」

一回も息をつかず、口から流れ出るようにネイラはそう言った。

「……正解。

つまりだ。

見つかった頃には重大な問題が10個以上に、膨らんでる可能性
すらある」

「確かに」

ネイラも納得してしまうほどのクレイヴ、いや、シャーネルの説得
力は並々ならない。

「どうすれば……ああー！！もうっ！！！！」

色々な感情が入り混じって混乱したのか、金色の髪を思い切り手で
掻き毟る。

もともと、人々の間を抜けてきたお陰でクシャクシャになった髪に
はそう変化は起こらなかったが。

「落ち着いて、探すしかないろう？」

問題が起こる前に解決するのが、現状で考えうる一番の方法だ」

「・・・そうだな。」

「落ちていてここは——」

「——昼寝でもするか？」

「いや、しないから。」

「大体、問題起こす前に解決するって言ったのネイラだろ？
ほら、行くぞ」

「む・・・落ち着くには昼寝が一番——」「行くぞ——」
・・・了解」

ネイラのしぶしぶした返事を合図に、二人はまたゆっくりと歩き出した。

その頃シャネルは、何もする事が見つからないのか、フラフラと町を歩いていた。
いや、フラフラしているだけでも楽しいのだろうか、その表情には笑顔が見られる。

「ふう〜ん。」

「色々な物があるんだ」

色々な店がある為か、全く飽きが無いのかもしれない。

事実、シャーネルはあまり町の事に関してはあまり知らなかった。

それは、先程クレイヴとネイラが話していた事件以来、クレイヴがシャーネルを町に連れて行く事を、酷く嫌っていたからだろう。

しばらく店を見て回ると、シャーネルは店の並びを抜けた先の何かを発見したようだ。

「ん??あの建物はなんだろう?」

その黄色の瞳の先には、大勢の人々が大きな円形の建物で列を作っているのが見えた。

「何やってるんだろ?」

「ま、楽しそうだから行けば分かるかな」

そうしてシャーネルはその建物へと小走りで向ったのであった。

クレイヴとネイラはあれからシャーネルを探す為に再び商店街へと入っていた。

「クレイヴ」

「ああ」

ネイラはクレイヴを呼びかけるが、クレイヴは探すのに必死なのか、曖昧な返事が返ってきた。

「クレイヴ」

「ああ」

またもや同じ返事。

少々顔を引きつらせたネイラは、三度口を開く。

「お前は誰だ？」

「ああ」

「ああ、と言う名前なのか、変な名前だな、アホ契約者」

バシィン！と勢い良くネイラがクレイヴの頭を引っ叩く。

「つ！……痛つてえ……何だよ？」

「何だよ、では無い。」

先程から呼んでいるのに曖昧な返事しかないものだから、神から天罰を加えたのだ」

神様に言われては返しよの無い言葉だ。

「すまん。

ちよつと探すのに夢中になってな。。。
で、何だ？」

「手当たり次第ではなく、探し方を工夫したらどうだ」

「工夫って言つてもな。。。
例えば？」

「シャーネルのいそうな場所を探す。
そうだな。。。人だかり等があったら、まず興味を持つのではないか？」

「。。。成る程な。

それじゃあ、人が集まつてる所でも探してみるか」

そつして、二人はシャーネルが厄介事に足を突っ込みかけてる事も知らずに、歩き出すのであった。

「うつわ〜広っ！！」

真ん中の舞台で何かやるのかな？」

シャーネルは先程見つけた円形の建物の二階にいた。
その大きさに驚いている様子である。

「クレイヴの家もコレくらい大きければなあ。。」

神様なんだからこれ位用意して欲しかったんだけど・・・文句言えないかあ」

この建物。

屋根は無いが、中心に正方形の大きな舞台があり、外から見たとおり円形に舞台を囲むように席が並んでいる。

席は2、3万人が座れる程あるように見えるが、多くの人々で賑わっていて、全ての席が埋まりつつある。

シャーネルは取り合えず、席が埋まる前に、急いで空いている席に座った。

すわり心地は中々のようで気に入った様子だ。

鼻歌混じりでシャーネルがくつろいでいると、唐突に会場中に声が響き渡った。

『本日は

これより、ディラモート王国主催、第129回「アン・トルノ・ディ・ラモート」を開催いたします』

聞こえてきたのは女性の声だったが、そんな事はシャーネルには関係が無かった。

人々の歓声、そして今から何が始まるのかで胸が一杯だからである。

『今日は、デイルモート王国王子、ファン＝デイルモート＝ワーズナー王子も会場三階の特別席にてご観戦なされています。皆様盛大な拍手を』

丁度、シャーネルの向かい側の席、つまり円形の反対方向の三階に座っている人物が立ち、手を振った。それに答える様に、会場中が拍手に包まれる。

「王子だか何だか知らないけど、早く始めてよっ」

何が始まるのかワクワクしているシャーネルには、全く関係の無い事だったが。

その後しばらくして、中心の台に両側から二人の男が上がってきた。一人は、槍を手にしている細身の男性。もう一方は剣を手にしている男である。

『それでは・・・第一回戦 一組目 ヨハン＝ヴォルス選手 対
アーロン＝デニス選手。
・・・始めっ!!』

その合図と共に、台の上の二人は互いに持っている武器を相手に向け突進していった。

薄暗く人通りの少ない路地。

クレイヴとネイラはその暗い路地で何やら話しているようだ。

「さっきの人が言ってた闘技場での大会が今の所一番有力か」

「ああ、そこにいる可能性はあるだろう」

「・・・でも、どっちに行けば闘技場に着くんだ？」

クレイヴは、今着た道に行くか、それとも先へ進むかをネイラに聞いた。

「・・・地図を持っている訳では無いから、そのような事を聞かれても困るのだが。。」

第一、クレイヴの方がこの町について詳しいのではないか？」

「買い物するだけなのに闘技場には行かないだろ」

確かにデイルモートの町はレランガート第二の都市だけあって広い歩きで全てを回ろうとすると、歩きつづけても何日掛かるか分からない程だ。

そこで巨大な建造物とは言え、一つの間所を特定するのは難しい。

呆れ気味に話すクレイヴはハアと溜息をつき、また口を開いた。

「・・・仕方ないか。」

ネイラ、ちよつと空から何処にあるか見てきてくれ」

「うむ。」

それが最良の方法だな。

それでは行ってくる」

そう言つて、トン、とネイラは地面を蹴った。

ネイラは黒く美しいその髪を靡かせながら上昇していく。

通常、デイラモートでは、町の中で許可の無い場所では魔法は使つてはいけないというルールが法律で定められている。

しかし、そのようなものに従つていては、シャーネルが問題を起こすに決まっている。

そう考えた二人は今や法律など関係が無い。

むしろ、この場合法律を破った方が言い結果が出るとも考えられる。

人通りが無い路地なので、見つかる事も無いだろうが。

「・・・あれか」

ネイラは空から見た景色を見てそう呟く。

上から見ても分かる程の人の多さ、そして何よりも闘技場特有の円形の形。

目標物を発見するにはそう時間は掛からなかった。

ふわり、といった感じに黒い髪が動くと同時にネイラの体は降下していった。

「で、どこにあった？」

地面に着地したネイラに、すかさずクレイヴは問う。

「ここから戻ってひたすら北だ。
そう距離は遠くなかった」

ネイラはそう言って、ついさっき歩いてきた道を指差した。

「よし、行くぞ」

そして、二人は全速力で道を引き返した。

『勝者、アーロン!! デニス選手! 見事2回戦進出決定です』

シャーネルがいる闘技場では、一回戦の二組目が終了したと同時に、ワアアという歓声が闘技場全体に響き渡った。

そして戦った者同士は、互いに握手をして選手が退場していった。

「ふうん、町ではこんな面白い事もやってるんだ」

シャーネルもすっかり周りの観客同様、闘技場での戦いにハマッてしまったようである。

「・・・クレイヴは参加する気はないのかな？」

今度誘ってみよう！

こっちは楽しんで、クレイヴが勝てば優勝賞金が・・・ふふふふ」

シャーネルは一人不気味に笑いながら、次の戦いが始まるのを待っていた。

「クレイヴ」

「なんだ」

「こっちは選手用の通路ではないのか？」

クレイヴとネイラは闘技場に到着すると同時に選手用の通路を突っ走っていた。

ここに侵入する為に、ネイラの黒魔法を使った事は言うまでもない。勿論、今も走りながらネイラは係員が二人に気付く前に眠らせている。

「ああ、そうだけど、どうかしたか？」

ネイラの言っている事がよく分からないのか、クレイヴはネイラに聞き返す。

「クレイヴは参加者ではないだろう」

「観客席に混じって一人の人物を探すのは至難の技だろ？」

だったら、一番目立つ所で呼ぶしかない。

それとも何か？

今日ここに来ているらしい王子様とやらに、刃を向けて国中の指名手配者にでもなるか？」

さも当然のようにそう話すクレイヴだが、言っている事は無茶苦茶である。

何せ、国が主催の大会を止めようとしているのだ。

外見は何時ものクールなクレイヴだが、過去のシャーネルの事故もあり、クレイヴは相当焦っている様だ。

「それもそうだが・・・あのシャーネルが呼んだからと言って、自分から現れるのだろうか？」

「・・・信じるしかないだろう」

最も、クレイヴにとって今一番信用なら無いのがシャーネルであったりするのだが。

「それよりも見る、あそこから会場に入れるみたいだ」

クレイヴは光の見える方向を指差し、そう言った。

「係の者とは格好が違うが・・・あの男も眠らせるぞ？」

ネイラが言った、あの者、とは先程クレイヴが指した所に立っている男の事である。

確かに、剣を背中中の鞘に収めて武装しているので、明らかに身軽な係員とは違うものである。

「ああ、頼む」

その言葉と同時に、今入場をしようとした男は、バタリ、と倒れてしまった。

「・・・悪いな。」

少し試合を遅らせる」

クレイヴは、通り過ぎる際にその倒れた男がこの大会の参加者である事に気付き、男にそう告げて、ネイラを連れて大歓声の中の会場へと駆けていっ

た。

『それでは、一回戦 二組目の選手が入場します』

そう、会場にアナウンスが入ると同時に、舞台へと向う大柄な男が出てきた。

筋肉質なその肉体に手に持つ斧がマッチしている。

「あっ！おじいさん！始まるよっ！」

「みたいじゃが・・・。」

もう一人の選手がいないぞい？」

「あ、ホントだ」

シャーネルは待ち時間の間、隣に座っていた老人とすっかり意気投合してしまったようである。

「あ、走って出てきた」

「ほっほっほ、なんとも人騒がせな奴じゃわい」

「あははははっ」

二人は、後から入ってきた男に指差し笑った。

「……って、あれ？おじいさん、もう一人ついてきたよ？
女の人みたいけど……」

シャーネルは笑うのを止めて後ろから着いて来たもう一人の人影を指しながら、老人の顔を見る。

「む？本当じゃのう……」

老人が首を傾げたその時、シャーネルはある事に気付いた。

「……クレイヴと……ネイラ？」

「む？お嬢ちゃんはあるの二人と知り合いなの？」

「うん、町であるの二人、私から逸れちゃって……」

あくまでもシャーネルにとって、いなくなったのはクレイヴとネイラのようだ。

「ふむふむ、なる程な」

「クレイヴ……出るなら出るって言ってくればいいのに……」

シャーネルはまた一人で大きな勘違いを起こしてるようだ。

「じゃが、あのような痩せ型の男では……。
お嬢ちゃんには残念じゃが、あの大柄な男の勝ちじゃの」

「そうかな？」

シャーネルはそう言ってニツコリと笑って老人を見た。

「私はクレイヴが勝つと思うな」

そう言って、シャーネルは舞台の方へ目を移した。

「……シャーネル!!」

クレイヴは何回も舞台の上で名を呼ぶも、大歓声の前にその声はいつも簡単にかき消されてしまう。

「おい、何叫んでんだ？」

クレイヴの目の前に立つのは、先程眠らした男の対戦相手の男だ。体格はかなり大きく、身長は2mはありそんな巨体である。

身長が180cmあるクレイヴですらも、痩せ型の体系の影響からかなりの小柄に見えてしまう。

「・・・悪いが、お前には関係無い、ただ人探しをしてるだけだ」

そう、男に言った後、またシャーネルの名を呼び始めた。

「人探しだ？」

それなら、この俺を倒してからにしてくれ。

こっちは早く戦いたくてウズウズしてんだよ!!」

「頼むから少しだけ時間をくれ。

お前の本当の相手はあつちに――」

『一回戦 二組目 コリンⅡヘイラー選手 対 ニールⅡアンデル
ソン選手

・・・始めっ!!」

クレイヴが先程眠らした人物の方へ指を指した瞬間、アナウンスが
鳴り響き、クレイヴの声はかき消されていった。

「おらああああ!!!!」

「チツ・・・仕方ない・・・」

試合開始の合図を聞いた大柄な男は、横に高速で斧を振りぬいた。
大きな斧を軽々と操るこの男の腕力は相当なものだと思われる。

それに対しクレイヴは咄嗟にしゃがみ、男の横に回りこむように横
に一回転しながら、背中の鞘に収まっている剣を右手で抜く。

「あ、、、あ……あ」

そして、その剣先は男の首の側面スレスレで止まっていた。
男は動く事も出来ずに、ただただ呆然としている。

会場中が静まり返る。

明らかに不利だと思っていた側の圧倒的勝利。
観客を黙らせるには十分な程の演出だった。

「悪いが、少し黙ってくれ」

固まっている男にそう言うと、男はコクリと、なるべく首を動かさないように頭だけで頷いた。

そして、クレイヴは観客の方を向き言った。

「俺は選手として戦った訳ではない！

俺は只、人を探しているだけだ！！

この会場に、もし心当たりのある者がいれば今すぐここに来い！

」

「っは〜、やっぱりクレイヴは強いね〜」。
ねっ！おじいさん？私の言ったとおりでしょ？」

「こ、これは驚いた。。」

あれ程まで華麗に数分の狂いも無く勝ってしまうとは・・・」

シャーネルの隣に座っている老人も呆然としている観客の一人だった。

「・・・しかし、あの青年の言ってる人物とは、お嬢ちゃんの事では無いのかの？」

「ん？ああ、多分そうだね。

早く行かなきゃ怒られちゃうから、またね！おじいさん！」

シャーネルは舞台の方へ向っていった。

「ん、お嬢ちゃん？」

ここは三階だから舞台へ出るなら——あ、危ない！！」

老人が叫ぶのは当然だ。

先程まで話していた女性が三階の観客席から舞台へ飛び降りたのだから。

しかし、その老人の気持ちとは裏腹に、シャーネルは、ゆっくりと空中を舞うように降下した後、音も無く舞台へ着地した。

その光り輝く髪を靡かせ着地する姿を見た会場の人々は、思わずその美しさに息をついた。

「シャーネル、勝手にいなくなるなよ」

何も起こらなかった事に、少々安心しながらも疲れた表情でクレイヴは言った。

「何言ってるの？いなくなったのはそっちでしょ？」

「何言つて——」「……どちらでも良いからさっさと退場するぞ」——「……ああそうだな」

ネイラはクレイヴが言い返そうとする所に割って入りクレイヴを納得させる。

どうもネイラは目立つ所が苦手なようだ、まあその容姿故、嫌でも目立ってしまうのだが。

「よし、それじゃ、大会を中断する形になってすまなかった！
大会を再開してくれ」

クレイヴは会場の観客全員に聞こえるようにそう叫び、入場してきた所へと観客の声援を浴びながら歩き始めた。

しかし、間もなくクレイヴが足を止めた。

「……アンタは——王子か？」

クレイヴが足を止めた理由、それはクレイヴの目の前に立っている人物にあった。

その人物とは、今日この大会を見に来ていたディラモート国の王子、ファン・ディラモート・ワグナー王子である。

年齢は20台前半あたりだろうか、スラッとした長身で整った顔にシャーネルと同じ銀色の髪。

目立った装飾品も身に付けることも無く、育ちの良さが窺える容姿である。

「貴様ッ！王子に向かって何という口を！！」

王子の斜め後ろに立つ兵士がクレイヴに向かって声を上げる。

「待て、よいのだ」

スツとその兵士の顔の前へ手を翳した。

「クレイヴ殿、と申しましたね？」

一瞬であつたが見事な剣技でした」

「……それで？」

「一国の王子が俺に何の用で？」

「いや……私が用があるのはクレイヴ殿では無く——」

王子がクレイヴの横を通り、歩いた先には。

「あなたです」

—— シャーネルがいた。

そして王子はシャーネルの前に跪きこう言った。

「おお・・・何と美しい・・・」

あなたのように美しい人がこの世に存在しようとは・・・これが一目惚れというものでしょうか。

あなたを目の前にして一層決心が強くなりました、私の・・・妃になつてはいただけないでしょうか」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・」

シャーネルは開いた口を両手で塞ぎ、

「・・・・・・・・こうなるのかよ・・・」

クレイヴは片手で額に手を当て、

「シャーネルがいなくなつて何も無いで済むはずが無いとは思ってはいたが・・・・・・・・ここまで大きくなるとは」

ネイラは何時ものクールな表情が少し崩れて、驚いている。

「あ、あの・・・・・・・・私・・・」

シャーネルが少し困つたような顔をしながら、王子とクレイヴの顔に視線が行ったり来たりしている。

「駄目……ですか？」

王子が上目遣いでシャーネルを見る。

整った顔の王子がそれをやるとまるで子供のようだ。

「いや……駄目と言うか……何て言うか……その……」

そして、その顔を見たシャーネルはそのまま押し黙ってしまった。
彼女はとても活発ではあるが、優しい心の持ち主だ。
王子の申し出も断りたくても、断れないのであろう。

シャーネルは更に困ったようにクレイヴに目線で助けを求めた。

「……もしや……」

そう言っ、て、王子はスッと立ち上がると、クレイヴの方へ目をやった。

「あなたはクレイヴ殿に――」

どうやら、シャーネルの目を向けた先によって王子の誤解を招いてしまったようだ。

「ちょ……ちょっと待ってくれ！俺とそいつはそういう関係じゃない」

焦りだすクレイヴ、しかしその焦りの表情がさらに誤解を招いてしまう。

「何も隠さなくても良いではないですか！

愛し合っているのなら愛し合っていると、何故隠すのです!？」

「だから、そんなんじゃ——」

徐々に苛立つてきたクレイヴが声を張り上げようとした瞬間。

「二人とも止めたらどうだ。

ここは男らしく、力でシャーネルを争えば良いではないか」

ネイラが二人の間に割って入ってきた。

クレイヴが熱くなって王子に手を出そうものなら国家犯罪者も同然だ。

ネイラは取り返しのつかないことになる前に止める事を選択したのだ。

「力??」

王子はネイラに向って聞き返した。

「ああ、明日の午後、ここにて二人の勝負を行う。

そして勝った方にシャーネルをプレゼント。

それで良いではないか」

「プ、プレゼントって、私、物じゃないんだけど・・・」

「気にするな。

で、どうなんだ?二人とも」

「良いですよ」

「・・・分かった」

溜息をつくシャーネルを尻目に、しづしづ了解する二人であった。

その晩、クレイヴ一行は王国の一室に泊めて貰える様に王子から直々に手配された。

王子曰く「万全の状況で戦ってもらわねば困りますからね」とのことだ。

宿泊している城の一室の広さはかなりのもので、100人位は入れるのではないのかという様な広さ。

家具類は全て上等なもので揃えられていて、ベッドなどもちゃんと3つ用意してあるが、

3つとも人が4、5人は寝れてしまうのではないかという大きさである。

そして、大人の背丈程もある大きな半円形の窓から月の光が差し込んでいる。

クレイヴは、その月の光を一部さえぎるかのように窓の枠の部分に腰掛け、窓の外を切れ長の鋭い目でじっと見つめていた。

肩の辺りまで伸びた金色の髪に、月の光が反射して輝いているよう

に見える。

「クレイヴ？」

不意に後ろから声を掛けられ。クレイヴはそちらへ振り向く。
シャーネルだった。

シャーネルは城の者に着るように言われて純白のドレスを着ている。
ネイラも着る様に勧められたが「私はいい」と一言で断った。
因みにそのネイラは部屋に着くなり、例の巨大ベッドで眠りについてしまった。

「シャーネルか……。」

「どうした？」

「いや……何やってんのかなあって」

クレイヴは決して外の風景を見ていたわけではない。
正確には考え事をしていただけだった。

しかし、考え事をしてた等と言うと、きつと問い詰められる。
そう思ったクレイヴは一瞬返事に迷いが生じたが、クレイヴは視点を
シャーネルから外の風景に戻した。

「町の夜景を眺めてただけさ。」

「こんな景色は中々見れるものじゃない」

確かにクレイヴの言うとおり、城下町の夜景は非常に美しい。
夜でも栄えている街は眠ってはおらず、所々で小さな光がいくつも
光っている様子はまるで地面に星空があるかのようだ。

「あ・・・ホントだ。
綺麗だねえ・・・」

クレイヴに言われて視点を外に移したシャーネルも、いつの間にかその町の美しさに見とれてしまっていた。

しばらく、無言で外を眺めていた二人だったがシャーネルが口を開いた。

「・・・その・・・迷惑掛けてゴメンね・・・」

「もういい。
終わった事だ」

外を見ながら、クレイヴは言った。
シャーネルが素直に謝るのが可笑しいのか、顔には微妙な笑みが浮かんでいる。

「それに・・・」

「それに？」

「お前を町に放り出して只で済むとは思ってなかったからな」

「そうだよね」

「そうだよねって・・・分かってるなら少しは自重しろよ」

「だって面白いんだもん」

やれやれ、とクレイヴは溜息をつくと改まって口を開いた。

「始めて3人で町へ来た時覚えてるか？」

「あ、、私がガラの悪い奴らに絡まれた時？」

「そう、あの時全員を返り討ちにし、周りの家に多大な損害を齎した」

「ま、いいじゃない？」

あの時の責任はすべてあのガラの悪い連中もちになったんだから」

「今回は、後処理が俺って事を考えると笑えないけどな」

「う、ごめん……」

「ははっ……冗談だ」

「もう……それじゃ私そろそろ寝るね？」

「ああ、お休み」

「お休み」

そっいつてシャーネルは窓の方向に向いた体をベッドの方向へ向けた。

「明日は頑張ってね」

と、一言言つて、ベッドの方向へ歩いていった。

「・・・人事じゃないだろ・・・」

と小さく呟いてから、クレイヴはすぐに先程の「考え事」に思考を戻した。

勿論視界は外の夜景に向つていたが、意識はその景色ではなく思考の中にあつた。

それは、つい先程の話だ。

闘技場での出来事の後、王子に招待されてこの町の中央に聳え立つ城に招待された3人は部屋の準備をするからと言つてとある城の一室で待つように言われていた。

部屋の中には5人ほど座れる、座り心地の良い椅子がそれと同じ長さのテーブルを挟んで中央に置かれており、

その他には絵画や花などしか飾っていない簡素な部屋であつた。

もつとも、普段からこのような場所には慣れていないクレイヴ達にとっては、どうにも落ち着いてられない様子であつたのだが。

「「「・・・・・・・・・・」」」

椅子に並んで座ったまま無言の三人。

場慣れしていないと言うのもあるが、クレイヴは少々不機嫌な様子で、シャーネルはそれを窺ってずっとモジモジしている。

そして、ネイラは普段から自分で話題を作らないような性格だ。

その結果この沈黙が生まれている、と言う訳だ。

ガチャ・・・・と、唐突にドアの音がこの沈黙を破る。
そして、その音に対して一斉にドアの方向を向く三人。

そこにいたのはこの城で働く兵士だった。

「・・・・・・・・ク、クレイヴ様。

しよ、少々よろしいでしょうか？」

そのあまりに揃った3人の行動にうろたえる兵士。

「何だ？」

一言で無愛想に返すクレイヴ。

「国王様がお呼びになっておりますので、ご案内に参りました」

その事を聞いたクレイヴは一瞬と惑った。

一人の若者が一国の長に名指して呼ばれるのだ、戸惑いが起きて当然である。

そのまま、10秒間程下を向いて考えた後、重い腰を上げてスタスタとドアに向う。

そして再びドアは閉ざされた。

クレイヴが案内されたのはいわゆる「国王の間」と言う所だ。絵に描いたような大きな椅子の上に白髪の老人が座っている。そしてその左右には兵士が一人ずつ、計二人いた。

クレイヴはその部屋に入り国王の前方に立つと、跪き頭を深々と下げた。

王子の前でこそ、冷静さが失われていた状態であった為あのような態度を取っていたが、

一応クレイヴは並みの礼儀位なら知っているのである。

「私に用があるとの事ですが、どのようなご用件で？」

「ふむ・・・お主がクレイヴ殿か・・・」

二人で話したい、下がってよいぞ」

国王はクレイヴを見た後、左右の兵士にそう言って、兵士を部屋から出るように言った。

「クレイヴ殿、楽にしても良いぞ」

それを聞いたクレイヴはスツと立ち上がり、国王をジッと見た。

「ふむ・・・良い目をしておるな。

お主、相当な実力者であろう?」

「・・・用件は何です?」

「はっはっは、若いだから、そう焦らんとも良からう。

私はただ今日の息子の無礼をお詫びしたいと思ったただけなのだかな」

豪快に笑う国王。

呼び出されたのはそれだけの為か、と少しクレイヴの気が緩んだ。

「いえ、それなら気にしておりません・・・」

「お主は良い若者だ。

私の前でも媚を売る訳でもなく、堂々としておる。

あやつもお主の様になって欲しい物だ」

「あやつとは・・・王子のことですか」

「そう。

私はあやつに大きく良い男になってもらいたい。

明日の戦いの話は聞いておるぞ。

一人の女性を争って行こうじゃない」

「・・・わざと負けるとでも?」

「いや、偉大な国王となってもらうが故。

必ず手加減無しで本気でやって貰いたい」

クレイヴにとっては予想外の願いだった。

「お主はこの国の国民ではないのだろうか？
調べはついておる」

「はい」

「なら、知らないのであろう、あやつの剣の腕は確かじゃ。
この国でも未だ負け知らず。

それが故に今のあやつは自信ばかりで他の物が備わっておらん。
負けから得る物を知って欲しいのだ。

それが国王となる男にとって必要不可欠なものなのだからな」

クレイヴは分かった。

王子が敵に塩を送るような事をした訳が。

それは王子の自信という「油断」から来るものだったのだろう。

「クレイヴ殿。

相手は一国の王子だからと言って手加減は必要いらん！
必ず勝って欲しいのだ！！」

「分かりました……。。
それでは、失礼します」

クレイヴは頭を少し下げて軽く礼をして、振り返り部屋の巨大なドアへ向おうとした時。

「クレイヴ殿！！」

「まだ何か？」

「……明日、もし勝ったならもう一度城へ着てくれぬか？」

「分かりました」

コクリと頷いてクレイヴは部屋を出たのであった。

クレイヴの意識が現実に戻る。

目の前には壮大な夜景が先程と代わらずに広がっている。

「……あれだけの事を言う為に俺を呼んだとは思えん……。
国王は何を隠している……。」「

不意に窓から風が入りこんで来た。

冷たく乾いた肌にヒリヒリと伝わるような風だ。

「どうも、嫌な予感がしてならないな……。」「

そう独り言を言って窓を閉め、クレイヴは冷えた体をさすりながら
ベッドへ向ったのであった。

都市でも嵐は止まらない（後書き）

果たして国王がクレイヴに伝えようとしている事とは！？次回から物語が動き出す予定です。

お楽しみに！！

自尊心故に

昨夜、月光が漏れていた窓からは、外の天気が快晴だという事が断定できる程の日光が差し込んでいる。

「クレイヴ……起きて!!」

その日光に負けず劣らずの明るさで叫んでいるのはシャーネルだ。

「……っ……はぁ……全然寝れん……」

「今までしつかり寝てたのは何処の誰だ？」

何時もどおりの皮肉が炸裂中のネイラ。

「いや……寝てたことには寝てたが、寝付くまでに時間が掛かったんだ」

「なるほど、流石のクレイヴも王子が相手だと緊張する訳か」

ネイラの言う事も一理あるが、真の理由は国王が何を隠しているかが気になっているのである。

それはクレイヴの想像上に過ぎないのであまり気にする必要性もないのだが

人間一度考えると気になるものである。

「……まあな」

クレイヴも自分自身の勝手な考えかも知れないという事は、承知しているので適当に返事をした。

「そういえば、ネイラ」

「何だ」

「時間は？」

「昼はとつくに過ぎだな」

ネイラは時計も確認せずに瞬時に返事を返した。

「・・・試合は夕方からだよね？」

「ああ」

「・・・急ぐか」

「私たちはとつくに準備できてるんだけどね」

クレイヴはシャーネルの言葉を背に部屋を飛び出した・・・様に見えた。

「クレイヴ様、試合の時間が迫っております。

着替えはまだでいらっしますね」

開けたドアの前には召使いが10人程横に並んで待っていた。
そして中央に立っている一番年配の者が、クレイヴへ顔色一つ変え

ずそういった。

「あ、ああ。

今から……」

「では、私どもがお手伝いしましょう。

今日の戦いの為に国王様が急遽作らせた服が御座います」

「ま、待て。

着替えさえくれれば一人でだいじよ——おいつ、話を聞けエエ
エ!!!!」

「大丈夫かな」

「なに、クレイヴは何時もと変わらない。

大丈夫だろう」

「そうだね」。

まっ、いっか頑張るのはクレイヴだし」

「シャーネル、一応言っておくが、お前は人事ではないだろう……
」

そんな調子で、召使いに囲まれ無理やり連れていかれるクレイヴを
見送る二人であった。

静かな薄暗い部屋。

部屋の中にはただ簡素な椅子と机が並べてあるだけで他に何も無い。普段なら、多くの決闘者達で賑わっているこの待合室も今は一人の青年しかない。

何をしている訳でもなく、ただ椅子に座って俯いているだけだ。

コンコン、とドアをノックする音が部屋に響き渡る。

「クレイヴ様、試合のお時間です」

クレイヴは黙ってその声に頷き、席を立ち歩き出す。

ドアを開けると、そこには奥から光が差す一本道。

暗くてよく分からないが、ジツと目を凝らせば汚れや血の跡が地面や壁に見え、時代を感じさせる。

『本日の決闘場はこの戦いの為だけにある!!』

一人の美しい女性をめぐって争う、勇ましく両者の戦士を紹介しよう!!』

まずは、東サイドからの入場うう!!』

先日、突如決闘に乱入し、華麗な剣捌きで大男を一瞬で降伏させたその実力は本物か!?

白と黒、二本の剣の意味とは!?! 謎多き金髪の美剣士、クレイヴ
『フォード!!』

(ワアアアーーーー!!!!!!)

歓声が巻き起こる中、クレイヴは一回深呼吸をして入場した。

クレイヴの目の前に広がるのは、先日ここに来たときとはまた一つ違う雰囲気の決闘場。

(一国の王子が戦うともなれば当たり前か・・・)

クレイヴはそのような軽い考えでいたが、実際の理由は少し違っていた。

それは、今日ここにいる人の殆どが先日のクレイヴの剣捌きの噂を嗅ぎ付けてきた人々であるからだ。

王子が剣術において長けているのは国民にとって周知の事実。

しかし、今日、その王子が敗れるかもしれない、そんな国民の期待が今日、この会場を包んでいた。

『対するは西サイド!!!』

未だ決闘場では負け無し!!!

その美しき顔立ちからは想像できない攻撃的でスピード感溢れる
剣術で敵をなぎ倒す!!!

我等がデイルモート国の王子!!!ファン!!デイルモート!!ワーズ
ナー王子!!!』

更に大きな歓声が巻き起こる中、王子は満面の笑みを浮かべ、手を
振りながら入場する。

そしてクレイヴの前に立つと手を差し出した。

「本気でお願いします」

「出来る限りのことはやらせてもらおう」

そう言つて二人は握手を交わし、持ち場に着いた。

『そしてえ!!!』

特別席には二人の男性により争われる、シャーネルさんもいるぞ
おおお!!!!!!』

クレイヴがハツとして、特別席方向を見るとシャーネルが大きく、
ネイラが小さく手を振った。

(ア、アイツ・・・ちゃっかり特別席なんかで見物かよ・・・!!!
!それにネイラまで・・・!!!!!!)

クレイヴはそれを無視してギュッと手を握り締めた、勿論奇立ちか

らである。

『さ、シャーネルさん、お二人へ何か一言』

そしてマイクから聞こえてきた音声は以下のとおりである。

『えっ・・・ちょ、ちょっとネイラ、何か言わなきゃいけないみた
いだよ？聞いてない・・・』

『いいから適当に激励の言葉でも送っておけ』

『え、え〜と・・・でも何話せばいいか・・・』

『頑張れとでも言っておけ』

『・・・二人とも頑張つてね〜』

（知らない会話までマイクにいれるなよ・・・ったく）

クレイヴは拳を緩め、はぁ、と溜息を吐いた。

「さああて！！！！お二方とも準備は良いか！？」

王子は腰にある剣を引き抜くと戦闘の態勢に入った。
先程の王子の穏やかな顔は何処にも見受けられない。

クレイヴも背中にある二本の剣の内、白色の剣を引き抜く。

「それでは、試合開始!!」

観客が一気に静まり返った。

まるで二人の闘気にかき消されるように。

二人は一気に間を詰め・・・

(キーン!!!)

静まり返った場内に剣の交わる音が響き渡った。

その後更に、二、三度、剣を交え、王子が一步引き下がり言う。

「なる程、剣を交えて改めて分かりましたよ、あなたはお強い。

しかし、どうやら剣の振り抜きの速さは私の方に分があるようですね」

「・・・・・・・・」

王子の言葉を聞きながらも全く動じないクレイヴ。

「スピードを上げましょう、そして更に力強く・・・本気でいかせ

てもらいます・・・!!」

王子がまた一步踏み出して、剣を横でなぎ払うようにしてクレイヴに襲い掛かる。

それを剣を縦に構え、ギリギリで受け止めるクレイヴ。

「ほう、止められましたか。。

これは参りました、初めてですよ、私の本気の振りぬきを止められたのは」

「・・・」

「・・・全く動じないですか、さすがです。

まあ、いいでしょう、私はあなたに勝つのが目的ですからね」

王子は先程とは逆の方向に切り込む、が、またしてもクレイヴはギリギリでそれを防ぐ。

「もう少しなんですがね。

仕方ありません・・・連撃でなら防ぎようが無いでしょう」

(キンッキン、キンッ!!!!)

目にも留まらぬ速さで剣技を繰り出す王子。
しかし、その全てを間一髪で受け止めるクレイヴ。

「守ってばかりでは勝てませんよ。
少しは攻撃をしてはどうですか？」

「・・・・・・・・」

その戦況のまま、数分が経過したそして次の一撃。

（キイイーンンン！！！！）

王子が全力で切りかかると同時に、絶妙のタイミングでクレイヴは
敵の剣を受け流す。

大きく姿勢を崩した王子は、そのまま地面に倒れた。

「ッ……!!」

「確かにアンタの剣は早い、力強い、防御できる奴がいなかったのも頷ける。

ましてや受け流された事なんて無かっただろう。

俺も苦勞したよ……」「わざとギリギリで受け流すタイミングを図る」のにな」

クレイヴは王子の首に剣を添える。

「何時も短期決戦、故に……連続の攻撃で疲れることも予測できた。

それに経験が無いから、受け流されたアンタが大きく姿勢を崩す事もだ。

全ては読みどおり、ジ・エンドだ」

「しょ、勝者……クレイヴ!! フォード!!!!!!」

(ワアアア~~~~~!!!!!!)

決闘場が観客の歓声によって賑やかさを取り戻す。

(勝つことには勝ったな……)

クレイヴは内心ホツとしていた。

先程、大口を叩いたのも王に徹底的にやるよう言われたからであつて、試合は決して余裕ある物ではなかった。

実際は成功したから良かったものの、一度失敗すれば命を落としてかない戦術だったのだ。

「クレイヴ殿……」

王子は肩をガツクリと落とし、方膝をつき、そしてクレイヴの方を見つめながら、呟いた。

「……お見事でした。」

私はどうやら自惚れていたようです。

剣術で負けることは無いと思い込み、油断が生まれこのような無様な結果を招いてしまった……」

「別に負けることは無様じゃない、負けから得るものは勝つことより多い。」

そこから先は、勝つよりもずっと明るい未来が待ってるはずだ……

・と、これはアンタの父親に言われた事だけだな……」

クレイヴはこの場に来て初めて穏やかな笑顔を見せた。

「父上が……そんな事を……」

「ただな、見返りが大きい物にはリスクが伴う。」

戦場での負けは死を伴う、だから油断は命取りだ」

「はい……」

「ま、こんな言葉王子には無縁かもしれないけどな」

「いえ、そんな事はありません!!!」

もし、この国が攻められたなら、私は前線で一兵士として国を導いて行くつもりです。

その時、このような失態を犯す様なことがあれば……ここでクレイヴ殿に出会えた事に、感謝するばかりです」

クレイヴは強くその言葉に頷く。

「ああ、間違いなくそれが、国をそして、国民を背負っていく者の言葉だ。

また機会があれば手合わせ頼む」

そう言つてクレイヴは剣を納め、王子に背を向け立ち去ろうとする……が。

「うおっ……………」

振り向いたクレイヴの目の前にいたのは、豪華なドレスや装飾品に彩られたシャーネルであった。

「その……クレイヴが勝っちゃった場合は？」

「あ……そうか。

婚約者争いみたいな設定だったけどな、今までどおりの付き合いでいいだろ」

「うんっ！！！」

『さあ、熱く見詰め合う二人！！！！』

実況の声が場内に響く。

『ここで誓いのキスを！！！！』

「！？・・・ま、待て俺達はそんなんじゃ——」

クレイヴの唇に一瞬柔らかいものが触れる。

「っ……な、何をしたシャーネル!!!」

クレイヴは唇を手で押さえ、頬を真っ赤に染めながら叫ぶ。

「だって仕方ないでしょ？」

この状況じゃさ。

それに……一回してみたかったんだ」

「してみたかったって……お前っ……!!」

「その程度で赤くなるとは……まだまだ、青いな……」

クレイヴの横でぼそとネイラが呟く。

「ネ、ネイラ!! お前何時の間に……」

「ずっと横に居たが？」

気配にも気がつかないとは……青いな」

「くっ……」

「……で、どうだった？ シャーネル。
人間のするキスという行動の感覚は」

「案外普通・・・というかよく分からなかった」

「・・・なんだ、そんな物か。」

よく分からんな、人間のする事は・・・さて、城に戻るか」

「うん！」

「・・・俺は実験台かよ・・・」

気を落としてつつ、二人の後を追うクレイヴであった。

試合後、闘技場の出口付近には大勢の人ばかり。

「よお、あんちゃん!!」

強かったなあ！！なあここにサインくれよ！！」

「お兄ちゃんなんでそんな強いの！？
教えて！！」

「無敗の王子様を倒すとはあっぱれじゃ！！！！」

勿論お目当ては本日のヒーローであるクレイヴ、老若男女問わず注目の的であった。

しかし本人は全く乗り気ではなく、逃げるようにそこを駆け抜けていく。

いや、正確に言えば何かを追うように。

「つく！！あの二人に先を行かれたらまたトラブルが増えるっ・・・
特にシャーネル、シャーネルだけはっ！！！！」

ああゝ！！そこっ！！！！どいてくれ！！！！」

心配事に苛立ちながらも、何とか人混みをかき分けてゆくクレイヴであった。

「あつ、おかえり〜クレイヴ」

「遅かったな」

「・・・ああ・・・まあ、色々とあつてな」

人混みを脱し、城に戻ったクレイヴは寛ぐ二人の姿を見てまずは安心したが、ゆつくりはしていられなかった。

国王に、勝利をした時は来るように言われていたからである。

クレイヴにはその内容が、昨晚からどうも気に掛かっており、急いでいたのはそれも理由の内なのだ。

「・・・ん？」

クレイヴは武具を置いて、国王の間へと向かおうとした所で気が付いた。

城内の兵、召使等、城内の人の数が昨日と比べ、明らかに少ないのだ。

「二人とも、城の中で何かあったのか？」

「知らない」

「私も知らんな、だが今城内でこれほど怠けているのは私達ぐらいという事は確かだ」

（やはり城内で問題でも起きたのか？）

クレイヴは悪い予感を感じ、国王の間へと急いだ。

自尊心故に（後書き）

前話投稿から一年以上経ってしまいました。。
申し訳ありませんでした。

話の構造はあるのですが、文に直すのに時間が掛かってしまい、
gdgdと。。
g

まあ、言い訳はここまでで、さて本編。

戦闘シーンは、毎回短く終わっちゃってますね。

まあ、長引かせるよりは見せ場作って

カッコよく出来たらなあ、思っております。

話は次回から急展開を迎える！！・・・予定。

乞うご期待！！・・・しないように（笑

侵入者

「・・・!!」

クレイヴの目に国王の間の扉が映るなり、クレイヴは己の目を疑った。

扉の前に数十名の兵士が倒れていたのだ。

出血をして苦しむ者、動く気配のない者、状態は個々によって異なるが重態である事は確かだった。

クレイヴが急いで駆け寄ると、足元から声が聞こえてきた。

「ク・・・クレイヴ殿・・・」

目を向けると、わき腹の辺りから大量に出血をしている兵士が、苦痛の表情でクレイヴを見ていた。

「どうした？何が起こったんだ？」

兵士はその言葉に対し首を横に振る。

「それが・・・分からないのです・・・くっ・・・。
ただ・・・場内に・・・何者かが侵入したとしか・・・。
それで情報を聞き駆けつけてみれば・・・この有様・・・。
私も何時の間にか・・・倒れて・・・。。。。っ。。。。」

その言葉を最後に、兵士は力尽きて再び床に伏してしまった。

(どうなってるんだ・・・)

「クレイヴ殿!!
いったいこれは何が!？」

クレイヴが背中から聞こえてくる声に反応し振り向くと、
走ってここに向かってきたのだろっか、少々額に汗が浮かんでいる
王子の姿がそこにあった。

「分からない。。。

ただ、城に何者かが侵入したのは確からしい」

「侵入者ですか!？」

「ああ。

とりあえず・・・俺は剣を部屋に置いてきたから、回復魔法を使
える奴を呼んでくる」

「しかし、この騒ぎでは城内に残っている者は・・・」

「大丈夫だ。

あんたはとりあえず国王の間へ入り、国王の安否を確かめてくれ。
俺も武器を持ってすぐに向かう」

「分かりました」

クレイヴは返事を聞くと、その場を後にした。

「さて……」

と言って、王子は深呼吸をすると、警戒心を持ちつつゆっくりと扉を開けた。

「シャーネル！ネイラ！

すぐに付いて来てくれ！怪我人がある！」

クレイヴは先ほど二人がいた部屋の扉を開けるなり、そう叫び二人を呼ぶが……。

部屋の中に人影が見当たらない。

それどころか人の気配すら感じられなかった。

それが彼女たちの意思によるものか、この事態に巻き込まれたものなのかは分からないが
少なからずクレイヴにとっては痛手である事は間違いない。

「……………つたく。」

さっきまでいたつてのに……………どうなってるんだ……………」

クレイヴはため息混じりにそう吐き捨てる。

（仕方ない……………）

しかし、クレイヴはすぐに冷静さを取り戻し、剣を手に取り王の間へと走り出す。

その間クレイヴはまた妙な事に気がついた。

（何故兵士は扉の前にしか倒れていない??

国王の間にたどり着くまでに発見されていてもおかしくは無いはずだが……………）

そう、兵士が倒れていたのは扉の前だけで、それまでのルートには人一人見当たらないのである。

（……………城内から工作をすれば兵を動かす事も出来るが、それじゃあ誰がやったかすぐにバレる。。。

なら、あの数の兵を倒した事からして……………侵入者が城の魔術師を欺けるほどの実力者って事か）

どの王国にも、規模は様々だが防衛隊が置かれているのは常識である。

そして城内防衛の要は魔術師であり、選びぬかれた者たちは屈指の実力者ばかり。

侵入者が入り次第すぐさまに連絡が城内へ知れ渡るようになってい
るのだ。

しかし今回は、国王の間の扉の前で先ほどの兵士が言っていたように、
『情報を聞いて駆けつけた』のだ。

つまり扉の前で見つかったという事になる。

「・・・まったく・・・また強敵か・・・。

戦闘は避けたい所だが・・・。」

クレイヴは今日すでに戦闘をしている、それも王国でも随一の腕を
持つ者とだ。

口からつい愚痴が漏れるのも頷ける。

しかし、クレイヴの『切望』とも言える思いは一瞬で消え去った。

『ドゴオオオーーン!!』

轟音が城内で響き渡る。

それはクレイヴが国王の間を目前にしての出来事だった。

「ちっ……!!
国王の間からか!？」

クレイヴは躊躇することなく、国王の間に駆け込む。

「おい!大丈夫か!!」

中は煙で視界はかなり悪い状況だったが、部屋の広さ故、クレイヴの声はよく響いた。

「コホッ……コホッ……ク、クレイヴ殿……」

それは間違いなく王子の声だったが、クレイヴは視界の狭さ故動くことが出来ない。

この部屋に敵が潜んでいるとしたら、無鉄砲な行動は即、死に繋がるからだ。

「くっ……仕方ない」

クレイヴは、奇襲に対応できるよう剣で防御の構えに移る。

王子が生きていると分かれば、煙が晴れてからでも遅くないと判断したのである。

しばらくして視界が晴れてくる。

国王の間の壁や床には所々焼け跡のような物があり、先日見た華やかな雰囲気とは正反対の殺風景となっていた。

クレイヴはすぐに部屋の中心に王子を見つけた。

服は所々破れ、そこからは生々しい傷が見える。

剣を床に立てて体を抑えるのがやっとと言った感じだった。

その姿に一瞬目を奪われるも、その視線はすぐ別の方向に移った。

王子のさらに向こう側、普段は国王が座っている王座の前に二つの影があつたのだ。

一人はクレイヴと同じ年程の鎧と黒のマントを身にまとった、赤い長い髪が特徴の青年だ。

冷たい瞳をしており、端正な顔立ちがそれをいつそう際立たせていた。

そして彼の手には妖気が漂っているいるかの様な不思議な剣が握られていた。

もう一人は青年よりやや年上に見える大柄の男だ。

剣や鎧などの武具は一切纏っておらず、ただ普通の布の衣服を着ているだけだった。

「ほう……そなたが、クレイヴ＝フォード……か」

大柄の男は、クレイヴが目を向けるやいなや、そう言った。

「だったら……どうした？」

「成る程。」

分からない事はない……」

クレイヴを見ながら青年が言う。

クレイヴはすでに落ち着きを取り戻していたが、二人が何について話しているのか、全く理解できなかった。

思い当たる節も無く、ただただ剣を構えているしかない。

「だが……あくまでこれは推測」

クレイヴ……そなたの力でこの男を救って見せよ！」

大柄の男は、両手を上に振り翳す。
するとそこに光が集まってくる。

（あれは……！！）

クレイヴには分かった。

あの大柄の男が今から王子に何をするのか。

「ちっ……止めろっ!!!!」

「ふんっ!!」

クレイヴが叫んだのも空しく、大柄の男は両手を一気に振り下ろした。

予想通り、光の線が一直線に王子へと向かう。

クレイヴは王子の下へ走り出すも、その距離は10m程。人間が一瞬で移動するには余りにも長すぎた。

(間に合わないっ……!!)

そうクレイヴが諦めかけた、その時だ。

黒い影が王子と光線の間に入り込み『バシイ!!』と、弾けた様な音を立てて光線は拡散し部屋の床や壁、天井に穴を開けた。

「ネイラ……」

クレイヴは、王子と光線の間に入り込んだ影の正体を確かめるなりそう言った。

「・・・・・・・・・・防御魔法は苦手なのだが――」

『ふう・・・・・・・・』と一息ついてネイラが王子の方向を見る。

――咄嗟に弾いてみたら、上手くいったな」

「あなたは――」「ネイラッ！・・・・お前どこ行ってた!？」

王子が口を開くもクレイヴの声にかき消される。

「シャーネルが城内を見学したいと言ったから、それに付き合っていた」

「シャーネルは・・・・？」

「まあ、落ち着け。」

たまたま通りかかった所に兵士が倒れていたから、シャーネルが治療に必死になってしまったな。

それで・・・・私は暇になってたまたま部屋を覗いたらこの状況だ」

「・・・・そうか・・・・ま、王子も助かったし、治療もやってくれてるんじゃ、文句も言えないか・・・・。

ありがとな、助かった」

クレイヴは若干笑みを浮かべながら、そう言って、ネイラに歩み寄る。

「ひ、暇だったから……ですか……暇じゃなかったら私は死んでた訳ですね……」

王子はぞっとする余り、表情が少し硬くなる。

しかし「助けなかった方が良かったか？」と、ネイラに聞かれると

「いいえ……恩にきります!!」

そう力強く答え、王子は表情を引き締め、立ち上がった。

「……運命……か。」

直接的な力ではないが、これもまたあの男……クレイヴ「フオード」が引き寄せたものなのだな」

独り言だろうか、青年はポツリとそう囁いた。

その言葉に同意を示すように、隣の大柄の男はコクリと頭だけで頷いた。

「・・・・・・・・あの二人は何者だ？」

ネイラがクレイヴに尋ねる。

「さあな・・・。」

俺にもわからないが・・・あの光線を撃つ直前・・・俺に言った。

『そなたの力でこの男を救って見せよ』と」

キツと鋭い目で二人を睨むクレイヴ。

「試されているのか・・・・・・・・??」

ポツリとネイラが呟く。

「どうした・・・・・・・・？」

かかって来ぬのか、闇の力を司りし神よ」

「……ッ！！！」

大柄の男の口から出た言葉に、ネイラが珍しく驚いたような表情をした。

「神……どういふ事です？」

王子は、内容が全く掴めないといったようにクレイヴを見る。

「……とりあえずその話は後だ。

タダもんじやないとは思ったが……こいつ等……本当にヤバイ奴らかもしれない」

クレイヴもネイラ同様、驚きを隠せないでいた。

神……ネイラがクレイヴ以外の人物にそう呼ばれたのは初めてなのである。

世界には精霊と人間を見分ける力を持つ者は僅かながらに存在する。現にそういう人物にクレイヴ達は街中で出会ったことがある。

だが、その力を持つ者でもネイラやシャーネルが、神という存在だと言ふ事には気がつかなかったのだ。

「……こちらから仕掛けるつもりは一切無い。

貴様らが何者かはわからないが――

低く小さく、だが迫力のある声でネイラは話し始めた。

——もし……もう一度私達に危害を加える事がある
うものなら。。。

……容赦はしない……！」

今のネイラの目には謎の二人の男しか映っていなかった。

これが闇を司る神の威圧とでも言うのだろうか。
その姿は普段のネイラを知っているクレイヴにとって、とても新鮮な光景だった。

何か何時もと違うネイラがそこにいるかのような錯覚すら覚える程に……。

「……まあ、いい。

私達は争いに来た訳ではないからな」

ネイラの姿を見たのが理由であるかは定かではないが、青年は剣を納めながらそう言った。

「どういう事だ」

ネイラはさっきと同じ調子で尋ねる。

「……………ポルト」で私達は待つ。

クレイヴ、お前は間もなく後一人の男と出会う。

契約神そして、その男と共にポルトを尋ね、私達と再び出会う時、
真実を話そう……………さらばだ」

青年が話し終わると同時に二人の間から眩い光が溢れ出す。

その光は徐々に光度を増していき、目を開けていられない程の明るさになると光は一気に収まった。

全員が再び目を開けた時には、先程の二人は消え去ってしまっていた。

「……………何だっただ……………一体……………？」

そうだ、国王は……………！」

クレイヴは剣を収めつつ言葉を漏らした後に、国王の姿が無い事に
気が付き辺りを見回した。

「……………私が部屋に入ったときにはもう姿はありませんでした。
彼らにも問い質してみましたが返事は得られず……………」

下を向きながら、小さな声で王子は言った。
そしてすぐさま顔を上げて話し出した。

「・・・お二人とも聞いてください。
兵士への攻撃、国王の失踪・・・これらは、ほぼ先程の彼らによ
って成されたものと言って間違いないでしょう。

・・・危険なのを承知でお願いしますが、このような事をお願い
できるのはあなた達だけです・・・。

彼らの元へ・・・ポルトへ向かつてはくれなんでしょうか・・・

」

暫くの沈黙。

「頼まなくても、俺たちは向かうつもりだったけど・・・」

クレイヴは王子の方向を向いてそう言った。

「王子の命令なら・・・なおさらだな。

「・・・本当ですか・・・!!」

感謝の言葉もありますん!!!!!!」

王子はクレイヴに深々と頭を下げた。

「おいおい・・・一国を背負って行くって男なんだから、もっと

堂々としろよ」

「はい……!!」

「つたく……ネイラも良いよな？」

王子の力強い返事を聞いた後、ネイラの方を向きポルトへ向かう事への同意を求める。

「……そのポルトとやらに向かわなければ真実は掴めないのならな。

暇つぶし程度にはなりそうだ」

ネイラは先程とは全く違う、普段の調子でクレイヴに続いた。

「暇つぶして……まあ、いいか。

あ、そうだ……シャーネルは……っと」

クレイヴはシャーネルが治療活動を行っている入り口の扉を見る。そこからは、何秒か毎に光が漏れており、回復活動が順調だと言う事が伺えた。

「……聞いたとしても速攻オーケーだろうけど、後で一応聞いくか」

「……先程のネイラさんの魔法に、シャーネルさんの回復能力……それに神と　　は……。」

お二人は一体何者なんです？」

クレイヴは聞かれなければ、そのまま部屋に戻りさつさと旅の支度をする気だった。

しかし、先ほど約束してしまった事を思い出し、クレイヴは話し出した。

「黙ってて悪かったけどな、二人は人間じゃない。

二人は真正正銘『神』と呼ばれる存在だ」

「『神』……ですか？

精霊ではなく？」

「ああ、そうだ。

因みにネイラが闇、シャールネルが光を司っている」

「何だか凄い事になってますね……。

！！！！……と言う事は……私は神様に求婚してしまったという事ですか！？

私とした事が、なんと無礼な事を……すぐにでも罪を――」

「おい！！ちよつと待て、その事に関しては全く本人は気にしてないから落ち着け」

部屋の外のシャールネルの所へ向かう王子の手を掴み、慌てて止めるクレイヴ。

「……バチとか当たりませんか？」

涙目でクレイヴを見てそう尋ねる王子。

その表情に思わずクレイヴとネイラは笑ってしまった。

「ははっ・・・アイツはそんな偉い身分じゃないさ。

それに、もし出来たとしてもアイツならすぐに許すだろうな、俺なら分かる」

「そうですか・・・」。

ならば、せめてお礼くらいは・・・」

「いや、いいよ。

それは、俺たちがポルトから戻ってきて、国王をもう一度この城に連れ帰った時に頼むよ」

「はい・・・！分かりました！

それでは旅の支度に必要な物は何なりと言って下さい、全てこちらで用意します」

「ああ、感謝する」

「それと・・・そうだ。

少々お待ちください・・・」

王子はそう言って部屋の奥へ走っていくと、何かを手に持って戻ってきた。

「こちらを……」

クレイヴが差し出された手を見ると、デイラモート王国の紋章が書かれた紙が握られていた。

「これは、デイラモート王国直属騎士団 団長の証です。

せめて表面上だけでも身分が無いと、旅の上で何かと不便かと思っていますので」

「……感謝する」

「いえいえ、お気になさらず。

頼みを聞いてもらったのは私の方です。

国王を……父上をよろしく願います」

「ああ、任せておけ」

そう言ってクレイヴとネイラは部屋を後にした。

侵入者（後書き）

いよいよ、ストーリーが動き始めました。

ネイラが珍しく感情的になっていましたが、その所にも後々触れていこうと思います。

さて、ここからどのような展開となるのか。
乞うご期待！！

未知の存在

シャーネルが兵を治療し終え、城を後にしたクレイヴ達は、旅の支度をするべく一旦ディラモート王国から出て家に戻ってきていた。ちなみに先程の騒動の後、クレイヴがシャーネルに旅の事を伝えた結果、あの大きい目をキラキラ輝かせて二つ返事で了承したので、予想通り何の問題も無く旅への同行が決定した。

さて、旅の支度というのも色々あるが、一つは今シャーネルが家に向かつてかけている、結界、がそうである。

普段から町で離れて暮らしている者にとってこれは必需とも言える魔法で、魔族から対象となる物体を保護する為に用いるものだ。世界で最もポピュラーな魔法と言え、魔法学校で初めて習う魔法もこれである。

「これでよしと、終わったよ」

家への結界を張り終えたシャーネルが、手を叩きながら言う。

「ああ、お疲れ。

それじゃ家で準備しつつ少し休むか。

日も傾いてきたし、今日休んで明日出発でも遅くは無い」

「え〜、だったら今日結界作らなかつたのに」

「どんな旅になるか分からないから、万全の状況で出発した方がいいだろ」

「うーん、確かに・・・ネイラはもう部屋に戻って寝ちゃったし、仕方ないかあ」

と言って残念そうにシャーネルは家へと入っていった。

「はっ・・・さつきから居ないと思ったら、ネイラ何時の間にか！」

クレイヴが咄嗟に寢室の窓を見ると、すでにカーテンが閉められていた。

「ったく・・・行動が早い奴だ・・・」

呆れながらクレイヴはシャーネルに続いて扉を潜った。

その晩。

依然寝ているネイラを無視して、夕食を食べ終えた二人は机に座って今日の出来事について話していた。

「で、一体何があったの？
詳しいことを聞かせて」

興味深そうにシャーネルは古びた木製の机の向かい側に座るクレイヴに尋ねた。

シャーネルは扉の前で兵士を治療していただけなので、謎の二人の男の姿は知らないのだ。

クレイヴは部屋での出来事、二人の風貌、使っていた魔術など全てを話した。

彼らがネイラの正体を見破った事も。

「……その人達は私達と同じか……近い存在かもしれない。
もしかしたら――」

何時に無く真剣な表情で話し出したシャーネルだったが、途中で考えるように話すのを止めた。

「もしかしたら……何だ？」

「神をも超越した存在かも」

「……まさか……な」

クレイヴは少々戸惑った。

これまでもシャーネルとネイラの力は十分と言う程見てきた。
どれも人では到達する事すら難しい領域のことを軽々に行ってきた

のだ。

それをも超越する。

クレイヴにはそれが想像出来なかったのだ。

「——なんてねっ」

「……ん？」

「あははっ、ちょっと真剣に話してみただけっ。
神を超える存在なんて聞いたこと無いもん、ただの推測っ！」

「ったく……人が真剣に話してやってんのに、どうしていつもい
つも……」

「そのような、存在が居ないとも限らんぞ」

唐突に話しに割り込んできたのは、階段から目を擦りながら眠そうに降りてくるネイラだ。

「あ・・・ネイラ、おっはよ・・・って今は夜か」

「ようやく起きたかよ・・・、で、居ないとも限らないってのはどういう意味だ？」

ネイラは空いている椅子に腰掛けると話し出した。

「そうだな・・・例えば魔族の王とか」

「ネイラ、お前もそんな調子かよ・・・」

思わず深く溜息をつくクレイヴ。

それもそうだ、魔族の王は魔族を統べる者。

その力量は目にした事が無くても想像がつく。

「ちょっとした冗談だ」

「・・・普段からそういうこと言わないお前が言つと、冗談に消えないだろ・・・」

で、いるのかそんな存在が他にも」

「・・・何時かは忘れたが遠い昔に天界で聞いた事がある。

神といえども無敵ではない、この肉体が朽ちればこの世からは消滅し再び天界へ戻ることになる」

「ああ、それは精霊も同じだ。

常識だろ、そんな事は」

「常識でないのはここからだ。

私達・・・つまり神だけが知っている『根本的に神、精霊を滅ぼ

す方法』がある。

つまり、肉体が滅びてしまえば最後、天界へ戻ることすら出来なくなる神々の禁術がある。

現に過去に滅んでいった神々は多くいたし、滅びることに新しい神が代わりに生まれる。

私達も存在する以前には別の闇と光の神がいた、私達はその生まれ変わりだ」

「シャーネル、そうなのか？」

クレイヴがシャーネルに問うと黙って小さく頷いた。

「だが、私が存在するよりも遙か昔・・・滅んだと思われた一人の神が蘇った。

その神は魂が滅び行く中で、魔族の王と契約を結んだ。

『魔神』としてこの世に君臨し全てを支配すると」

「そんな話、初めて聞いた・・・」

シャーネルは驚きのあまり呆気にと取られていた。

「・・・だが、これも私が直接見た訳ではない。

現に魔神に支配などされていないし、本当に存在すらしていたのか解らない。

しかし、これだけは言える。

神を超越しているかどうかは別として、可能性があるとするれば魔族の王か魔神だ」

「なるほどな」

「それより」

ネイラは改まった表情をしてクレイヴの方を向いた。
表情は真剣そのものである。

「・・・何だ？」

それを見てクレイヴは一層気を引き締めて答えた。

「お腹が空いたのだが、夕飯はまだか？」

「お前が寝てる間に全部食っちゃったよ、ついさっきな。
寝てたお前が悪い」

「・・・せつかく話を聞かせてやったというのに」

ネイラがわざとらしく呟く。

「っ・・・!？」

「まったく・・・こんな恩知らずだとは知らなかった。
今日、代わりに王子を助けたのは誰だったか・・・」

わざとらしく溜息をつく。

「あゝ！わかったよ！！作ればいいんだろ作ればっ！」

「分かればよろしい」

満足げに頷くネイラ。

「寝起きのネイラ、いつつも機嫌悪いのに変だと思った。。
さ、じゃ私は寝るから、お休み〜二人とも〜クレイヴ頑張っ
てねえ」

「お休み」

ヒラヒラ手を振りながら階段を上がっていくシャーネルに対し、手を振り返すネイラ。

「つたく・・・シャーネルが飯全部食ったんだから・・・他人事じや・・・ブツブツ・・・」

時は満月が美しい夜。

それを見ながら呆れ面で愚痴をこぼすクレイヴの表情は疲れきっていましたとさ。

未知の存在（後書き）

未知の存在『魔神』

これが今後、物語に大きく影響する・・・予定。

乞うご期待！

ウィークポイント

港町『ポルト』への出発日、当日の朝。

あの二人がクレイヴより早く起きる訳が無いのは当然の事で……。

「おいつ、二人とも目を覚ませっ!!」

ドンツ、と大きい音を立ててドアを開けたクレイヴは慣れた様子で散らかっている部屋を上手く歩き、部屋の奥のカーテンを開けた。そこからは眩しいほどの朝日が入り込む。

「う・う・うん、眩しい……」

「……………」

シャーネルは本当に光の神なのかと疑えるような台詞を吐きつつ、ネイラは沈黙を保ちつつ布団を頭から被った。

「今日は出発日だ。」

インティス行きの列車の出発時間に遅れるとマズイから早く起きろっ」

『列車』と言うのは、国を行き来する為の、魔力で動く車両『魔力列車』のことだ。

大陸内の各国の路線がこの大陸の中心とも言える大国インティスへと繋がっており、またインティスから世界へと広がっている。

そして、3人はまずディラモートからインティスへ向かい、目的地

ポルトへと向かう予定なのだ。

その為に二人を起こしに来たクレイヴであったが、部屋に侵入されようと寝ている二人には一向に動く気配が見られない。

「いいから起きろっ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

痺れを切らしたクレイヴは、そう言つと片腕ずつ思いっきり二人の布団を剥ぎ取つた。

横向きに丸くなっている両者が、冷たい目でクレイヴを見る。

「……クレイヴのスケベ……」

「……女性から剥ぎ取るとは……」

「黙れいっ！ったく……一国の王の命が掛かってるかもしれないつてのに……」

とりあえず、着替えたら直ぐに降りて来てくれ、分かったな。くれぐれも二度寝はしないように」

クレイヴはそう言つと、部屋から呆れた様子で行つた。

時は進み正午。

3人は再びデイラモートに来ていた。
無論列車に乗る為である。

デイラモート王国の最南端にデイラモート駅はある。

世界中の人々がここを玄関として国に入るので、観光業のお店が多く存在しており、宿には困らない程だ。
そして町の外へと続く一本の道らしき物が突き出ている一際大きい鉄製の建物が、そのデイラモート駅である。

「うつわ〜〜、これが駅かあ〜〜」

シャーネルが目を輝かせて、視線をあちらこちらに送っている。

「そつえば初めてだったな、ここに来るのは。
車両にも乗ったことも無いのか？」

「・・・契約した時に言っただろう。
クレイヴが私たちの最初の契約者だ」

ネイラは駅を見ながらそう言った。
二人は神として存在している時間は人間からしてみれば長いが、こうして人間界に来るのは初めてなのである。

「あ、そうだったな。
悪い悪い」

自分でも少し間抜けな発言をしたことに気がついたのか、苦笑しながらクレイヴは返した。

「それは構わないが、一つ質問がある」

「ん？ネイラが質問なんて珍しいな。
どうした？」

「列車が線路上を走る事は知っているが、線路上に異物、例えば魔族がいる事も考えられると思うのだが
その場合脱線することは？」

「いや線路を囲むように結界が張られているから大丈夫。
でもどうした？少し考えればコレ位分かるだろ、らしくない」

「結界までは予想できたが、人間の力で世界中の結界が維持出来るのか疑問に思ったただけだ」

「おいおい、幾らなんでも人間をナメすぎだ。
確かに結界の維持は難しいが、コレは世界規模で協力されて成っているんだ。

各国有数の魔術師によってな。
それに今日乗る列車にだって最近見つかった最新の魔術が応用されてるみたいだし、あまり人間を侮ってもらっちゃ困る」

「なるほどな・・・単体では小さいかもしれないが、集まれば大をも兼ねる。

人間とは面白い生き物だ」

クレイヴの言葉を聞いて感心のか2・3度頷くネイラ。
色々な物に無関心であったネイラも人間については少し興味があるのであるうか。

「あっ！！お土産さんだっ！」

「待てっ！！」

（ガジッ・・・）

「うつ・・・」

シャーネルが走り出す前にシャーネルの服の襟を咄嗟に掴むクレイヴ。

結果シャーネルの首が一瞬絞まり、首から下だけが前へ出る形となつて苦しそうな声が漏れる。

ネイラとの会話の最中でもシャーネルの保護を忘れない所は流石クレイヴである。

「もうすぐ列車が出発するから、あんまり動き回るな。
第一地元で土産を買う必要があるのか？」

「だって・・・」

「土産なら行く先々で買つてやるから」

少し不満げな表情をしたシャーネルも、次のクレイヴの言葉を聴き

終えた時には笑顔になっていた。

「あ、でもクレイヴ『行く先々』って。。
寄るのって2つだけじゃないの？」

緩んだ顔のままそう尋ねるシャーネル。

「確かに寄らなきゃいけないのは2つだけど、大きい都市から大きい都市の間にも幾つか駅が有って、
それを中継してようやく目的地へ到着するんだ。
ずっと列車に乗ってるだけじゃ暇だと思うから、気が向いたら見て回ろうと思ってる」

ここからインティス、インティスからポルトに向かう間にしろ、中継となる駅は幾つも存在するのでその度列車は停車する事になる。

「さて・・・そろそろ列車が到着する頃だ。
いくぞ二人とも」

「はい」

「・・・」

元気なシャーネルに対して、先程から顎に手を当て何か考え事をしているネイラ。

眉間に皺を寄せ真剣な表情をしており、クレイヴの声もどうやら耳に入っていないようである。

思えば前のネイラとの会話の終了時からずっとこの姿勢である。

「おい。」

ネイラッ」

「……」

どうかしたか？」

少し驚いたように目を開き、顔を上げるネイラ。

「俺が聞きたいよ。

どうしたボーっとして」

「いや、何でもない……」

「なら良いけど。

何かあったら言ってくれよ？長い旅路を共にする訳だからな。
さ、列車が到着する、行くぞ」

コクリと小さく頷いてネイラはクレイヴとシャーネルの後に付いて
いった。

駅のホームには多くの人々が列車の到着を待っていた。
皆、出身国が違うが服装は様々だが、荷物が多いのは共通である。
人の多さに加え、それもホーム上での動き難さを助長している。

しばらくして、黒塗りの箱型の連結車両が、数多く連なってホームへと入ってくる。

「わああ~~~~~」

シャーネルはもう心のワクワクを止める事が出来ないのか、先程より一層目を輝かせて食いつくように列車を目で追っている。その様子を他所に、ネイラはまた先程と同じポーズで一人考え事をしているようだ。

「……やっぱり、何かあるのか？」

思わずクレイヴは問いかけた。

何でもない、と言われても明らかにそうでは無い様子なのだ。

「……大した事ではないのだが」

クレイヴの心配さが伝わったのか、俯いていた顔を上げ、クレイヴの方を見ながら話し出した。

「昨日の城を襲撃した男達が最後に残した言葉……」

「言葉……？」

あ、間もなく一人の男と出会って奴か。。
そう言えばまだ……現れてないな」

クレイヴは言葉を思い出すと周りをキョロキョロと確認した。

「デタラメではないと言い切れないし、そのような事を言う輩に

も見えなかったものでな。

それについて考えていただけで、心配には及ばない。

それよりシャーネルを見ておかないと、トラブルが増えてしまうぞ？」

ネイラは無表情のまま指示するようにクイツと頭を動かしクレイヴに言う。

その指示した先には10m先の人込みの中でもみくちやにされているシャーネルの姿。

「まったく、人が降りてからゆっくり乗ればいいだろうが・・・」

と愚痴を吐きつつ、クレイヴは人込みの中へと踏み出すのであった。

列車は20両ほどで編成されており、その中に食堂やトイレ、娯楽施設までもが揃っている。

なにせ、ここデイルモートからインティスまでの距離は高速の列車でも一日以上かかるほどの長さなのだ。
席も睡眠しやすいよう設計されており、座り心地は申し分ない。

「20番つと……ここか」

クレイヴは自分の席を確認すると、そのまま座った。
大きな荷物は列車に入る際に預ける事が出来るため、荷物が多い3人は迷わず荷物を預けた。
よって三人はほぼ手ぶらである。

「……さて、寝るか」

ネイラとシャーネルも続いて席に座るが、ネイラは瞬時に寝る姿勢に入る。

「ネイラ……お前はそれしか無いのか？」

昨日の二人を追い払った雄姿は一体何処に行っただか……」

確かにクレイヴの言うとおり、昨日の謎の二人を追い払った物と同じとはとても思えない。

むしろ、席で丸まる姿は美しい風貌を除けばまるで何処かの酔っ払いのようである。

「ならば、何かするべき事でも？」

あるのなら言ってみろ、10文字以上30文字以内で」

不機嫌そうな返事が返ってきた。

「むっ……そう言われると困るんだけど……」

例えば・・・景色を眺めるとか」

「却下だ。」

私はシャーネルと違って好奇心等は皆無だ。
おやすみ」

「人に言わせるとして瞬時に却下かい・・・」

「・・・なんなら、シャーネルと一緒に車内を見て回ったらどうだ？
そちらの方が五月蠅くないし助かる」

そう言われクレイヴはシャーネルを見る。

キラキラ目が輝いていた。

「・・・そ、そうだな。」

腹も減ったし、何か食べてくるか」

「うん!!」

「ネイラは腹減ってないのか？
後から食べたいって言っても――

「すゝ・・・すゝ・・・」

「——は、早いな……」

「思っただけど、最近クレイヴってネイラの尻に敷かれてない？」

「……俺も気にしてる事をさらっと言うな。。」

「そう思わない為にも何とか動かそうと思った俺がバカみたいだから……」

「う、うめん」

何とも言えない気分になりながらもこの場を後にしたクレイヴ達であった。

車内食堂。

車両の中と言えど、メニューは豊富で味の評判も良く、客にストレスの欠片も感じさせない広いスペースは

現代魔術の賜物であり、魔力により空間を歪ませ細く狭いスペースを広くするという一般的には使用されて無い最新の魔術が応用されている。

最近では旅の中でもこの車両での食事が最も楽しみだという客が現れる程、評価が高いようである。

「わ〜〜〜……まるでレストランみたい……」

列車の中とは思えない……」

「俺もガキの頃何度か来たくらいだから結構新鮮だな。

あの頃はもつと狭かったんだけど、最近の魔術の進歩は凄いな」

二人もただただ広さに驚くばかりである。

「席も結構空いてるみたいだし・・・よし、頑張つて食べよう」

「そんな無理して頑張る必要ないだろ・・・。
ちよつとは金の事も考えてくれよ」

神とその契約主の会話とは思えないほど現実的な会話をしながら、窓際の席を選んで座る。

列車はまだ出発しておらず、窓の外の景色はまだ止まったままの町の風景だ。

「注文をお伺いしても？」

「じゃあコレとコレと——コレっ」

「・・・本当にそんなに食えるのか？
結構小食だろ？」

ウェイトレスが尋ねると同時にシャーネルは直感的とも言える速さでメニュー表を指差して言った。

以前からシャーネルは小食だと知っているクレイヴは、その無謀とも思える量に思わず確認を取った。

「ダメだったら、ダメだった時でしょ」

先程の金の心配はもう何処かへ行ってしまったようだ。

「注文は以上で？」

「ああ、以上だ。

ありがとう」

ウェイトレスの確認にクレイヴが答えると、彼は一礼して奥の厨房へと消えていった。

「クレイヴは頼まないの？」

「どうせ、残すだろ。。。」

「むっ……。絶対全部食べてやるんだからっ！」

シャーネルが手をグーにして気合を入れるポーズをする。と、同時に車内にアナウンスの音声が入った。

『列車、間もなく発車致します。

席をお立ちのお客様はお気を付けください』

しばらくして、ガタンと音を立てて列車が発車する。加速に合わせてゆっくりと外の景色も流れていく。

「うわ……。なんか変な感じ」

初めて体感する、車内の重力の感覚に複雑な表情をするシャーネル。

「初めてなら仕方ないな。」

俺もガキの頃はこの妙な感じに驚いたからなあ。

「……お、町から出るぞ」

クレイヴが窓の外を指差す。

窓の外には何時も見er荒野とはまた違った風景が広がっていた。

「うわぁ~~~~景色が流れてく……」

魔法で空は移動できるけど……なんか変な気分」

「なんか、いよいよって感じだな……」

「だね」

広大な風景を目にして、自分たちの此れからの旅の大きさを再び思い知らされる二人。

「ところで」

暫く広大な景色を眺めていた二人だが、唐突にクレイヴが話を切り出した。

「何？」

「・・・ネイラに弱点とか無いのか？」

・・・・・・沈黙。

「や、やっぱり・・・まだ気にしてるんだ」

気まずそうに沈黙を破るシャーネル。

「今のままだと契約主としての威厳が危ないと思うんだから仕方ないだろ・・・」

「でも、弱点を握るのと従わせるのは少し違うような・・・」

「確かにそうだけだな・・・」

「それに私、弱点なんて知らないよ」

「この世界に降り立つ前にも見た事無いのか？」

「うん、クレイヴが生まれるよりもずっと前からあんな感じ。暇があつたら寝てたし・・・」

「寝てるのはお前もだろっ」

唐突にビシツとシャーネルの頭を叩くクレイヴ。

「痛〜〜い・・・と、兎に角！」

弱点は分からないから自分で何とかするしか無いって事！」

「・・・ったく・・・何か無いのか」

「それにそんな悩む事でもないと思うよ」

「何でだ？」

「だって、ネイラ、クレイヴと契約する前から、自分より位の高い神様の指示を無視して寝てたし。

『何故何の関係も無い事を私がやらねばならない？』とか言ってる

その時クレイヴは悟った。

ネイラを扱える者は少なくともこの人間界には居ないのだと。

いや、神の世界でも居ないのだろうと。

「あ、ご飯来たみたいだよ〜〜」

「あ、ああ・・・」

今まで悩んでいた事がどうでも良くなったのか、それともどうしようもない事を知り途方に暮れているのか。

呆然とするクレイヴを無視して、シャーネルは一層気合を込めて食事を食べたのであった。

そして10分後。。

「も、もう限界・・・・・・・・」

「まだ半分以上残ってるだろ、明らかに」

ようやくクレイヴの意識が戻って来たという時にこれである。
また一段と気分が重くなるのも無理は無い。

「・・・クレイヴ食べて・・・」

「頑張つてはみるがな、、この2、30分間で急激に減少した食欲で食べきれるとは思えない」

「うゝん・・・・そうだネイラ呼んできたら？」

寝てると思うけど、可能性は無い事も無いと思うよ」

「自分で頼んだものを食いきれないからって俺に食べさせ、尚且つ助けまで俺が呼んでくるのか!？」

「お腹一杯で動けないんだもん」

「・・・・・・・・仕方ない」

つくづく甘い男である。

寝起きのネイラがどれほど機嫌が悪いかわっているのにも関わらず、あえてそれを呼び起こしに行こうと言うのだから。

「……ったく……食ったんだから動くって言う発想は無いのかよ……ブツブツ……」

席を立ったクレイヴは、早々と店を後にして客席の車両へと揺れる足場を物ともせず移動していく。

そして愚痴をこぼしつつも席に到着したクレイヴは、ネイラに向かって申し訳無さそうに言った。

「……ネ、ネイラ……、良かったらで良いんだけど……昼飯が食いきれそうに無いから——って、どうした!？」

驚くクレイヴの目線の先にあつた光景とは。

「う……気持ち……悪い……」

シートに腰掛けたまま、腕を額の腕に置きながら悶えるネイラの姿であつた。

そつ、ものの見事に『乗り物酔い』をしていた。

「・・・闇の神様の弱点・・・・・・・・『乗り物酔い』・・・・・・・・」

どうしたら良いのか分からず、ただそこに立っている事しか出来ないクレイヴであった。

「・・・クレイヴ遅いなあ・・・・・・・・」

もしネイラ断られても、帰ってくるだけだから時間はそんなに掛からない筈なのに」

シャーネルは一人心配そうに呟いた。

帰ってきてても良い時間はもうとくに過ぎている。

明らかにここに来るまでの倍以上の時間が経過していた。

「ネイラの逆鱗に触れて大変な事になってるのかな？」

「……だとしたら列車ごと脱線し兼ねないから、脱出の用意くらいしておいた方が――」

「悪い、遅くなった」

「あ、おかえり」。

遅すぎだよ、クレイヴ。

ネイラの逆鱗に触れて列車ごと破壊されるんじゃないかって思った」

自分の妄想が杞憂に終わり安堵の表情を浮かべるシャーネル。

「んな訳あるかつ」

「で、どしたの？」

ここまで待たされては理由を聞かない方が可笑しい。

当然ながらシャーネルはクレイヴに遅れた理由を尋ねる。

「いや、それがさ。。」

「……その……」

何故か困ったように口籠るクレイヴ。

「その？」

「乗り物酔いで……」

「クレイヴが？」

「いや、ネイラが」

短い言葉のキャッチボールの後、最後のクレイヴの言葉を聞いたシヤールネルは一言呟く。

「・・・面白いこと聞いちゃった・・・」

「あゝコレだから話したくなかったんだ！
頼むから家を揺らすとかするなよっ！
絶対壊れ・・・いや、潰れるから！」

先程のクレイヴの困った表情はこの為であった。
そして不運にも予想は的中。

「だゝいじょうぶ！」

「大丈夫じゃないから言っただけ！！！」

旅は始まったばかりだが、もうすでに帰った後の家の心配をするクレイヴ。

幸先不安である。

「それで、ネイラは大丈夫なの？」

「今は実体化を解いてる」

以前にも述べたが、精霊や神とはいえども人間と契約している以上は、実体化しているか、その契約者の精神の中でしか生活することしか出来ない。

つまり、今ネイラの肉体は一時的に消滅しており、クレイヴの精神の中にいるという事になる。

もちろん他人から見れば、そこにいた人が突然消えるように見えるだろうが、この世の中精霊と契約を交わす者も少なくは無い。

それどころか今では戦う者のみが契約を交わしている訳ではなく、一般に生活する者と契約を交わしている事もある。

よって、すでに一般化しているとも言えるその行為自体は何も珍しいと言う事は無いし、神と精霊の区別も付かないので驚かれる事は無いのだ。

「あ、なるほど、アツタマ良い」

シャーネルはポンツと相槌を打った。

「さて・・・食べるとするか」

少しばかりネイラの弱みを見たからか、クレイヴも少し安心して目の前にある大量の残り物に手をつけ始めるのであった。

ウィークポイント（後書き）

今回は本編には殆ど関係が無い・・・茶番劇（？）のつもりです。
自分の中では、かなりストーリーは煮詰まってきたのでここから
先列車の行く先々で起こる出来事に乞うご期待。

死の住む館

時は静かな昼時。

聞こえるのはリズムの良い電車の線路を走る音。

何とか昼食を平らげた二人（食べたのは主にクレイヴだが）は席に戻り、ボーっと外を眺めていた。

流れる景色。

出発したときのディラモート周辺の荒野の風景はいつの間にか姿を消し、窓の外には緑色の草原が広がっていた。

所々に草食系の生物が見られ、シャーネルは新しいそれを見つけてはクレイヴに尋ねる。

人が良いクレイヴはそれに面倒臭いと言いつつも、一つ一つ受け答えをするが、次の瞬間にはもう次の質問。

暇を持て余す時間など二人には無く、列車はいつの間にか減速をして停車する態勢に入る。

「あれ？もう着いたの？予定より大分早いみたいだけど・・・」

「ちゃんと大きい都市から大きい都市の間にも幾つか駅が有って、それを中継してようやく目的地へ到着するんだ。」

つまりここは中継地点の一つ」

クレイヴの言うとおり、まだ第一の乗り換え地点であるインティスではない。

ここもそうだが、インティスからポルトに向かう間にしろ、中継となる駅は幾つも存在するのでその度列車は停車する事になる。

『間もなくシュヴァイナーに到着いたします。』

発車は3時間後となります、お乗り遅れの無いようお気を付けください』

車内のアナウンスによればシュヴァイナーという所に停車するようだ。

「ふん。。」

だから空席が所々にあるんだね、途中で人が乗ってくるから」

「そういうことだな」

「あつ!!!」

ってことは――」

シャーネルが何かに気がついたように声を上げ、クレイヴの顔を見る。

その嬉しさを隠せない程の笑顔を見たクレイヴはやれやれといった様に首を横に振って言う。

「・・・だな、座ってばかりじゃ息も詰まるから、一旦降りて見物といくか。」

とは言っても・・・見る物があるかは保障できないからな」

クレイヴはくいつと首を窓の方へ振った。

それにつられて、シャーネルは窓の外を見る。

景色が流れる速度はすでに遅く、列車がもつじき止まろうとしている事が伺えるが

クレイヴが言いたいのはそこではなく、風景そのものである。

その風景はまさに『田舎町』

小さなレンガ造りの家がポツポツと建っており、村の周りは森だらけで、村は山に囲まれた形になっている。

上から見れば恐らく、山が器でその中身が建物、そして今乗っている列車の線路が蓋をしている形に見えるであろう。

「うわあゝ・・・こんなに緑が豊かな所初めて・・・」

シャーネルの口から驚きの声が漏れる。

クレイヴは彼女が落ち込むものかと思っていたが、どうやらそれは杞憂に終わったらしい。

「ホント、何にでも喰らいつくよな・・・」

クレイヴが隣で呟いたのにも気が付かないほど、彼女は速度が徐々に遅くなってゆく自然の景色に見入っていた。

「あ・・・」

「・・・どうした？」

シャーネルの声に少し間をおいて反応するクレイヴ。

彼はこの場合彼女が『何かを見つけた』のだと言う事は予測が付いていた、だから何を見つけたかが問題である。

勿論、発見された物のよっては面倒が起こる事になりえない。

「・・・今は森に隠れちゃったけど、一瞬森の奥の木の間から屋根

みたいなのが見えたような・・・」

「ん？」

シャーネルが窓の外を指すが、その先の森にあるのは木々だけで、建物は手前の村の小屋だけである。

しかし、もし彼女の言う事が本当ならばその建物はかなり大きいという事になる。

列車から見る分にも、ここいらの木は結構な高さがある。

その木に囲まれた所で、一瞬とはいえ屋根が見えたのならば、少なくとも建物に高さは有ると言うことだ。

そのような事をクレイヴは何気なく考えていた。

しかし、彼はあることに気が付いた。

餌に釣られた動物のように興味ある物にはすっ飛んで行く奴が隣にいる。

停車時間はそうは長く無い。

村や森なんかで迷ってもらっては困る事この上ないのだ。

彼は隣のシャーネルを見る。

刹那、止める事を諦める。

「うーん、ワクワクしてきたっ！」

眩しいばかりの笑顔を見ると、お人よしなクレイヴは諦めざるを得

なかった。

「・・・仕方ないな。」

出発時刻には遅れないように時間にはキッチリと戻るからな。
時間がきたら何があっても諦める事、いいな」

「はい」

（返事ばかりは何時も上出来なんだよな・・・）

クレイヴは溜息をついて、会話の内に止まってしまった外の風景に
気が付き、席を立った。

『シュヴァイナ駅に到着いたしました。

発車は3時間後に――』

二人はアナウンスに耳を傾けつつ列車を降りる。

そこは視界を遮るものが何も無い開放的な駅のホームだった。

もちろん他の客も新鮮な空気を吸おうと後から足早に列車から降り
てくるので、少々混雑気味ではあるが。

「ふう・・・とりあえずネイラを呼び戻すか。」

「空気も綺麗だし、乗り物酔いのリフレッシュには最適だろう」

そう言つてクレイヴは目を閉じる。

3秒間ほど経つと、クレイヴの右手に黒色のエネルギーが集まる。

「闇を司りし神ネイラよ、今再び我が元へ戻られよ」

そのままそう呟くと、右手の黒色のエネルギーが離れ、地面に降り立つと見る見る人型へと変化してゆく。

変化が起こってからものの数秒で、クレイヴのすぐ隣にネイラが姿を現した。

黒色のエネルギーの正体はネイラの体を形成するエネルギーである。ネイラの精神はクレイヴの精神内へと向かうのだが、肉体はどうしようもないので、一時的にエネルギーとして主の体へ保存される。勿論、精霊や神の特殊な体の生成方法を利用した方法なので、人間には応用不可である。

だが、クレイヴの精神内に存在していても体の状態は保存されたまま、つまり今もネイラの状態は――

「……気持ち悪い……グラグラする……」

――乗り物酔い真っ最中である。

「乗り物酔いなんてした事ないから分からないけど、ここの綺麗な空気吸えばすぐ良くなると思つてな。ま、今は我慢だ」

「……仕方ないな……」

それにしても、クレイヴの精神内で話は聞いていたが……本

「当に何も無いな」

ネイラは少しふらつきながらも駅のホームから村を見渡しながろう言った。

幅はそれほど無いが、ちょうど駅のホームの高さは村を見渡しやすい程の高さである。

いやむしろ、村に何も無さ過ぎるからこの程度の足場があれば見渡せるといった方が良いのか。

要はそれほどまでに全てが簡素であるという事である。

「その『不確かな建物』はこっからじゃ見えないな」

「本当に見えたんだけどな〜」。

「いつその事、魔法で空から探しちゃおうつか」

クレイヴとシャーネルがネイラの両隣に立って言う。

「そう焦るな……」。

「直接行っても、その建物が何の為にあるのか分からん。

「お土産を買うついでにでも話を聞けば良い」

尤もな事を言っているネイラだが、

今飛んだら色々な意味でマズイという念も込められているように見える。

「あ……そだね。」

「入ってみて誰かの家だったら物凄く気まずいし……」

「それもあるけど、もっと問題点あるだろ……」。

それよりネイラ本当に大丈夫か？」

いつの間にか、ヘタヘタとその場に座り込んでしまっているネイラを目にしたクレイヴが、心配そうに声を掛ける。

あの無口で素っ気無いネイラが、珍しく女の子座りをしてうな垂れているあたり、相当マズイ状況のようだ。

「・・・ここで待つと言っても、どうせ聞く耳を持たないだろうから、付いていく」

「そんな無理しなくても・・・ほらっ、私が我慢すれば済む話だし・・・」

ネイラらしくない姿をみたシャーネルも少し困惑気味で、終にはシャーネルまでも自分の願望を抑制しようとした。

だが、二人同時にらしくない姿を目の当たりにしているクレイヴは更に困惑しているのは間違いない。

「・・・なに気晴らし程度だ、別に無理はしない・・・。
ただし、クレイヴ・・・条件がある・・・」

「ん、何だ？」

急に座っているネイラの眼差しが向けられたのでクレイヴは驚きながらも答えた。

「このままじゃフラフラで歩き難いから・・・気分が治るまで背中で寝させてくれ」

「・・・は？」

それってまさか……俺がネイラを背負いながら行動する
って事か!？」

無言でコクリと頷くネイラ。

「……そうしないとネイラが歩けないし、ネイラが歩けないと一
人に出来ないからシャーネルが村へ行けないし。。」

あ……わかったよ」

あゝだ、こゝだと混乱しつつも、やはり渋々ながらも了解してしま
うクレイヴ。

確かにネイラと同じような身長 of シャーネルに負ぶわせるのも無理
があるし、

それ以前に男がいるのに女性に力仕事を任せるといふ図は何処から
見ても格好が悪いし、プライドが許さない。

そついう訳でクレイヴの体勢は既に負ぶう格好になっている。

「……すまん」

申し訳無さそうにクレイヴの背中にぐつたりと体重を預けるネイラ。
ネイラの細く色白の腕がクレイヴの首周りを覆う。

クレイヴとネイラの身長差は十数センチ程で、ネイラも魔族との戦
闘では驚異的な力を発揮するが、

見た目は人間の女性と比べても華奢なくらい細いので、前から見た
らネイラの姿はスッポリと隠れてしまつて

見えるのは細い腕と黒く長い髪くらいである。

「……あ、意外と——」

クレイヴが負ぶった瞬間にもらした言葉は。

「重いと言ったら・・・解っているな？」

気分が悪いとは思えない程の重い言葉によって遮られた。

長閑な田舎の風景が一瞬にして凍りついたような気がした。

人間ではないが、一人の女性としてはやはり美に対して関心はあるようだ。

特に神や精霊は神秘的な美しさが備わっている者が殆どなので、その思いは一人であると思われる。

「・・・勘違いするなつて。

意外と軽いつて言おうとしただけさ」

どうも嘘くさく聞こえるがこれがクレイヴの本音である。

普段の機敏な動きと力強さを見ているので、余計にその軽さが信じられなかったのだ。

「それは普段は重そうだが、それ程でも無かったと言っているのか」

「もう下ろすぞ」

「・・・・・・・・・・」

クレイヴの少し脅し気味の言葉に、流石に悪いと思ったのか即座に謝る。

変な所では妙に素直なネイラに何処か可笑しさを感じてクレイヴの顔には若干の笑みが浮かんでいた。

「変わったものばっかだね」

村の中心部、と言ってもちらほらと木造の建物があるだけで、本当に何も無いのだが、シャーネルがまるで別世界を見ているかのよう
に、キヨロキヨロと村を見回す。

ネイラは依然として元気が無さそうだが、それでも多少なり見慣れないものがあると、時折首だけ動かしてそちらを見ていた。

都会しか見た事のない彼女たちにとっては畑や、鳥の群れ等、ありとあらゆる自然が目新しいのだ。

勿論、依頼で自然が豊かな場所に向かうことはあるが、大抵はそこは戦場になる。

故に目を向けている暇が無いのである。

「ここの人にとってはコレが普通であって、都会の迷路みたいな町並みは逆に見慣れていない。

まあ人にはそれぞれの環境があつて、それによつて目線も変わつてくるつてことだな」

「・・・たまには真面目な事をいうのだな」

説明口調で話すクレイヴが気に入らなかつたのか、ネイラが背中から耳元でわざとトゲトゲしく言つた。

「俺は何時も真面目だろ」

「クレイヴはこういう所には着たことあるの？」

首を傾げながら聞くシャーネル。

「ほんの数回だけな、それもガキの頃に」

「ふうん・・・あつ、あそこ何か売つてゐるかな？」

自分から聞いた質問であるにも関わらず、適当に聞き流したシャーネルは何やら小さな売店らしき木製の建物を見つけると一目散に駆け出した。

「お・・・おい・・・」

ネイラを背負っているクレイヴは、後を追うのがやつとである。

「わぁ・・・・・・・・」

建物の中に入ると、シャーネルは思わず声を漏らした。

三人の目前にあるのは、木彫りの人形が所狭しと並んでいる棚。姿形は様々だが、鳥や犬等野生の動物を見て彫っている物が多いようだ。

中には相当昔に彫ったであろうと思われるものもあり、建物の中も所々塵や埃が被っている。

「おや、旅の人ですか？」

店の奥の方からしゃがれた声が聞こえてきた。

三人は同時にその方向を見ると、一人の小柄な老人が椅子に座っていた。

どうやらここの家主のようだ。

「そうだが、爺さんはここで何を？」

「普段は表の畑で農作物を作りながら、趣味で木彫りを少しな。

少し・・・・と言っても気が付いたらここの棚が埋まっておったがの、ほほほ・・・・」

「でも趣味でコレだけの物が作れるんなら凄いやね」

シャーネルが一つの人形を見ながら言う。

「ふむ、それで、旅の方はどのようなご用件で？」

見たところお連れの方の具合が宜しくないようじゃが・・・」

「いや、少し乗り物酔いを起こしただけで、問題は無いそうだ。

それよりもこの先にある山に大きな屋敷は無いか？」

「ふむ、恐らくシュヴァイナー家の屋敷の事じゃの」

「シュヴァイナー家？」

「ここら一帯を開墾した莫大な財産を持つ名家じゃよ。

この村『シュヴァイナー』という名前もそこから来ておる。

じゃが数年前に家主が病死してしまつてな、今は誰もいない屋敷じゃよ。

少なくとも若いもん三人で尋ねるようなところではないじゃろう」

顎に生えている白い髭を触りながら語る老人。

シャーネルの話は見間違いでは無かつたようである。

「なるほどな。。。」

だつてよ、シャーネル残念だつたな。

ただの廃墟じゃ、行つても無意味だろ」

クレイヴは厄介ことが無くなってホツとしたのか少し微笑みながら言つた。

「えゝゝ・・・でも明かりが点いてたしゝ・・・。
誰もいない訳ないよ」

「明かり？」

真昼間から明かりなんか点けるか？

つけてたとしても周りが明るくちゃ見えないだろ、作り話しよう
つたって信じないからな」

「うつん、木が高いから影になつてよく見えたもん。
絶対明かりは点いてたっ！」

頬を膨らましながら言うシャーネル。
徐々にエスカレートするシャーネルに対しクレイヴは困ったように
頭を掻いた。

「……そうじゃ、確か数年前に妙な噂があつたの……」

「噂？」

「うむ、その屋敷の執事から主が亡くなつたと報告があつた後。

この村の人にとって、シュヴァイナー家の存在は大きな存在じゃ
つたから、そのまま屋敷は残す事になつたのじゃ。

村人も屋敷で働いていた人も、誰一人異議は無くそのとおりにな
つた。

じゃがな、ある日、村人の一人が屋敷の近くを通る時に、人影を
屋敷の奥で見たという報告があつたのじゃ」

「それって……」

「村の中では家の金品が盗まれないように出た主の亡霊だという噂
もあるが……」

「……おもしろそうっ！……！！」

「おい、シャーネル・・・まさか」

「ねえ、お爺さん！」

私たちがその噂の謎解いてきてあげる！」

「本当か！」

いやあゝ恐れ入った、旅の者でも不気味で近寄ろうとせんかったのに・・・」

「待った、爺さんも勝手に話を進めてもらっちゃ——」「諦める、こうなったら止められん」「・・・つく」

何とか話に割って入ろうとするが、最後は何故か背後のネイラに言われて、抗議を諦める。

ネイラも何気に興味があるのではないかという疑いまで持ったが、口に出すとまた何か言い返されると思い、そこも踏みとどまる。

何時も以上に我慢が多い日だと大きく溜息をつくクレイヴなのであった。

「・・・さつさと歩け。」

3時間しか無いのだろう」

「へいへい・・・。」

シャーネル行くぞ」

何に対しても反抗する気力が無くなったクレイヴは、気の抜けた声を発しながら歩を進めるのであった。

さて、村を離れ、早めに歩き20分程。

背の高い木々が立つ森のど真ん中。

所々には葉の間から入る木漏れ日の光もあるが、木々の高さのためか陰の割合のほうが多いように見え、

木漏れ日が無ければ朝なのか夜なのか分からなくなりそうな程である。

そのような場所に建つ立派な門を構えた屋敷には何か幻想的なものささえも感じ取れる。

「……シュ……ヴァ……イナー……ここか？」

門の奥に見える屋敷の玄関の上に大きく彫られた『SCHWEINER』という文字を見ながらクレイヴが言った。

「そのようだな」

「わゝ、何か素敵。。」

「ここだけ何か別の空間みたいな……そんな感じだね」

「・・・話を聞く限り誰もいないのが普通だし、誰かいる気配も無い。」

さて・・・どうするか——っておい!!」

屋敷を睨みながら、ここからの行動について尋ねようとしたクレイヴだったが、シャーネルはすでに門を開けて玄関の前まで進んでいた。

「どうするも何も、ここまできたら行くしかないでしょ、皆で!」

そう言って屋敷の扉を両手で勢い良くあけるシャーネル。

「ったく、自分は来なくなかったみたいにな・・・まあでも、ここまで来たらだよな・・・」

「早くしろ、一人進まれてはこちらが敵わん。
独り言なら後でゆっくり一人だな」

「うおっと・・・それもそうだ」

ネイラの指示を聞いてあわててシャーネルの元へ歩く。

「ん、どうした?」

クレイヴはシャーネルに聞いた、
二人を待つて玄関で立っていたシャーネルが、
玄関の床をじつと見つめていたのだ。

「・・・埃が積もってない」

「それは扉を開けた勢いで——」「ううん、明らかに全体的に汚れていないの、まるで誰か住んでるみたいに」

「おいおい・・・勘弁してくれ」

厄介ことがまた起きる予感が、どうしても止まない。
いや、起きる予感しかないのだろう、天を仰ぐクレイヴ。

「・・・なかなか面白そうではないか。
たまにはこういうミステリー的なものも悪くない」

後ろで微笑を浮かべて呟くネイラ。

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

「・・・そういうテンションでいる状況じゃないような気がする
のは俺だけか??？」

そう言いながら、クレイヴはゆっくりと扉を閉めると、只でさえ薄暗かった辺りは暗闇になった。

それもそのはず、玄関には窓も無く、あつたとしても日当たりの悪さから満足いく視界は確保出来ないだろう。

「・・・・・・シャーネル、灯りを頼む」

クレイヴの落ち着いた声が、まるで屋敷中に響くような感じだった。
それ程静かで音も無く、誰かが住んでいるような気配すら感じられない。

「おい、シャーネ——」

「・・・わっ!」

余りに魔法を使うのが遅いので、クレイヴはもう一度名前を呼ぼうとしたが、

それはクレイヴの目の前10cm程の所に突如現れた顔に遮られた。

だがクレイヴとネイラは動じる事も無く、その目の前に現れた『顔』を白けた表情で見ていた。

「そんな子供騙しで驚く訳無いだろっ」

そう言いながらシャーネルの額にペシッとデコピンをかますクレイヴ。

「いったゝゝい・・・。」

絶対驚くと思ったのに・・・。」

「遊んでないでさっさと行くぞ!」

そう言つとクレイヴはさつさと額を押さえ痛がつているシャーネルの横を追い越し先へ進む。

するとその拍子にクレイヴの背中から囁くような声が聞こえてきた。

「私は普通に見えてたぞ。

必死にクレイヴの場所を探している姿が」

考えてみればそうだ、ネイラは闇を司る神で闇の中でも光を必要としないのだ。

つまり、クレイヴを脅かそうと暗中模索していたシャーネルの姿が、ネイラにとっては丸分かりだった訳であつて。

「……道理で目が合つたと思つた……う…………なん
で気が付かなかつたんだろ…………」

その時すぐにシャーネルは自分が犯したミスに気が着き、
しゃがみ込んで顔を抑え赤面するのであつた。

「シャーネル！ 恥ずかしいのは分かるけども、早く来てくれ。
全く見えないから！」

「うううう……………」

「つたく……しかしまあ本当に立派な屋敷だな。

何でこんな所に建てたのか理解できなかったけど、この雰囲気を見る限り分らないでも無くなつたな」

感心とも言える様な感じでぼんやりと光に照らされた廊下の所々を見ながら歩くクレイヴ。

「このような屋敷に住んでみたいものだな。

あんな魔法を少し撃つただけで壊れるような家じゃなくな」

「確かにね」

間髪いれずに嫌味をいうネイラに何の悪気も無いように返事をするシャーネル。

「・・・お前らの魔法に耐えられる家なんか建ててたら、予算が幾らあっても足りないだろ」

「あ、それもそうか」

むしろそのような技術を持った建築士がいるのかさえ定かではない。

「まったく・・・呑気なもんだ。。。

ん？・・・お・・・あの部屋は・・・・・・・・」

クレイヴが苦笑いしながらふと目に入った扉。

それは一際大きい扉で、通ってきた廊下にあった他の扉とは、また違った雰囲気醸し出していた。

「・・・無難に怪しいところから行ってみるか？
時間もないからな」

「うーん・・・お楽しみは最後についてというのがセオリーなんだけど・

・・・。

そこは妥協しと」

「へいへい、ありがたい限りの事だな」

シャーネルの言葉を聞き流しつつ、クレイヴ扉をゆっくりと開けた。口では軽そうな事を言っているが、目は至って真剣で、何が起きても構わないよう細心の注意を払っている様子である。

「・・・大広間・・・みたいだな」

扉の向こう、シャーネルの手から溢れる光にぼんやりと照らされたのは、何も無い大広間だった。

天井にはシャンデリア、床は赤色のカーペットが敷かれていて、ここでパーティを開いたならばさぞかし素晴らしい物になるであろう。

しかし、屋敷の中心にあるようで外と接する箇所は無く、勿論窓なども一切無く、薄暗いその風景は今はまだ不気味なだけだ。

更にかなり広い空間のようで左右の壁は何とか見えるが、部屋の奥は一切見えないのでより一層不気味である。

「奥に何かある」

暗闇でも目が見えるネイラがクレイヴの肩越しに顔を覗かせながらボソリと言った。

「誰かいるじゃなくて、何かある・・・か？」

「ああ、無機物である事は間違いない。」

生気が感じられない。

ただ……」

「ただ？」

不意にネイラの言葉が詰まったので、思わず聞き返すシャーネル。

「こちらへ向かってきている」

「は？……何を言って――」

クレイヴはネイラの言葉を冗談だと思い、言い返そうとした瞬間、『それが視界に入った。

「……マリオネット……？？？」

そう、それは明らかに生物ではない。

生気が感じられない人型の物の至る所に糸が繋がられており、道化師のような格好をしていた。

すぐ上で人が操っているかの様に、少々不安定な歩き方で3人の方へ向かってきていた。

「どういう事だよ……」

「この主が生前に残したボディーガードといった所か」

「……手に物騒なモン持つてる所からしてそうとも取れない事もないな」

クレイヴの言うマリオネットの手には刀身10センチ程のナイフが

握られていた。

「道化師にナイフかぁ・・・ここの主趣味悪う・・・」

「例えばの話だから、主の趣味とは言い切れないって。

考えてみれば、わざわざこんな奇妙な人形残すよりか村人に頼むかなんかすれば良い話だ。

そう考えればあれがボディガードっていう線は薄れるだろ」

クレイヴの言うとおり、ここの主は村人から尊敬の扱いを受けていたので、

村人に頼めば快く了承してくれる事は間違いない。

このような人形を残す必要性は見つけ難い。

が、クレイヴの後ろでネイラが即座に違う意見を出す。

「いやしかし、先程の老人は何処の馬の骨とも分らん旅人に、

館の調査を依頼するほど警戒信は皆無だった。

この館の金品を盗み、荒らしてゆくという可能性があるにも拘らずだ。

この家を守るのが村人達でも、あの人形でも無いのだとしたら、ここの主はそれほどこの館に思い入れが無かったのではないか？」

「あのおじいさんがそこまで頭回らなかった・・・とか。

お願いはされてたけど、そんなお願いは忘れちゃってたとか！

ほらっ、お年寄りだしっ！」

思いついたように、頭の横に人差し指を立てながらシャーネルが言う。

「シャーネル・・・人をナメすぎだつての。

あの爺さんは村人で残すよう決めたって言ってただろ。それに、まだしっかりしてたよ、あのじいさんは、、ギリで」

「何気にクレイヴも失礼な発言だ」

ボソツとすかさず呟くネイラ。

「・・・まあいい！

ほらもうそこまで歩いて着てるぞ、人形さんがよ」

クレイヴは自分の失言を振りほどくように首を振り、すぐそばまで歩み寄ってきているマリオネットを指差した。

すると、ピタリとマリオネットの足が止まった。3人のおよそ3mほど前の位置である。

「・・・ん、どうした？

タイミングよく魔力が切れたのか？

そんなことが——ッ！！؟؟」

止まったマリオネットにクレイヴが近づこうとした瞬間、マリオネットが瞬時に一步踏み出しナイフを振り下ろした。

今までのゆったりした動きはダミーだったのか、戦い慣れたクレイヴですらも間一髪であった。

「つとつと・・・と、危ないっ・・・！！」

バランスを崩しながらもネイラを背負いながら体制を立て直したクレイヴに、すぐさま追い討ちをかけるマリオネット。

背中にいるネイラによるバランスの取り難さ、マリオネットの動きの不安定さゆえの独特のリズムの取り難さや動きの早さ等のマイナス要素がクレイヴにとっては多すぎた。

2発目の首を狙った攻撃に対し、状態を反らし避けたクレイヴは、唯でさえ後ろに重心がある状態故大きくバランスを崩した。

倒れはしなかったものの、クレイヴが前を向いた時にはすでにクレイヴの腹部めがけてナイフが突き刺さろうとしていた。

「ちっ……」

なんとか避けようとするも明らかに間に合わない。思わず舌打ちしたクレイヴ、痛みを、いや死を覚悟した。

が、次の瞬間。

クレイヴめがけて突進していたマリオネットはそれより速い速度で横方向へ吹っ飛んだ。

マリオネットの頭があった場所には一つの握り拳。

「ふっ……危機一髪だったね」

マリオネットがピクリとも動かなくなっただ事を確認してシャーネルが手を払いながら言った。

「っ……はあ……悪いっ、助かった」

息を止めていたクレイヴの口から大きく息が漏れる。

「クレイヴのマヌケ」

「って、おいつー！」

お前が後ろにいなきゃ全部避けるどころか返り討ちにしてたよ！
「！」

ネイラからの思わぬ野次に本気で対応するクレイヴ。

「まあまあ・・・何はともあれこれで――」 「シャーネルッ
「！！！！！！」 「！！！！」

ドンッ・・・と静かな部屋に物と物がぶつかる音。

クレイヴとシャーネルは向かい合っていた。

しかし、シャーネルの背後、先程のマリオネットが倒れていた場所にその物体は無かった。

マリオネットはシャーネルの背中にナイフを突き刺していた。

「・・・おい・・・嘘だろ・・・」

「まさか・・・」

クレイヴとネイラが目の中の光景を見て信じられないといった様子で呟く。

「・・・う・・・う・・・痛・・・くない？」

一瞬、苦しそうな顔を浮かべたシャーネルだったが、表情はすぐに変わり、不思議そうに自分の腹部をみた。

貫通している様子は全く見られない、地面に流血もない。

シャーネルはすぐに後ろを振り向くと、道化師のマリオネットがナイフの刃の先を指差していた。

3人はその刃に注目すると、マリオネットは『ケケケ・・・』と気味が悪い笑い声を出しながら、刃の先を指で押してゆく。すると刃が見る見る縮んでゆくではないか。

「・・・玩具」

「騙されたのか俺達・・・」

「う~~~~・・・くっ~~~~！」

捕まえてバラバラにしてやる~~~~！」

クレイヴとネイラが哀愁感を漂わせる中、シャーネルは一人マリオネットを追いかけた。

マリオネットは3人の方を向きながら、足を蟹股に開きながらバツクでピョーンピョーンと警戒にジャンプし部屋の入り口に向かう。そして『ケケケ・・・』と笑ったかと思うと、ゆっくりとドアを開けた。

そこには黒いロングコートを着た痩せ型の若い女が立っていた。髪も同じく黒で長さは腰ほどまであり、色白の肌に整った顔つきで

笑みを浮かべている。

「……アイツは……」

ネイラが不機嫌そうな声をだした。

クレイヴはこれまでの付き合いでネイラの声の出し方で機嫌が分かっていた。

「どうした？ 誰か知らないけど……何か問題でも？」

「いや、単に苦手なだけだ」

クレイヴの問いに対し、顔が見えなくてもムスツとした表情でいる事が分かる口調で答えるネイラ。

周りに対して余り関心がないと思われたネイラがここまで嫌う奴とはどんな奴なのか、クレイヴはゴクリと喉を鳴らした。

扉から現れた女は大きく両手を広げると部屋中に響く声でいった。

「よゝこそつ、俺様の館へ。」

二人ともお久しぶりっ！」

軽い口調、クレイヴは拍子抜けしたのか少し表情が柔らくなる。第一印象『軽い奴』、ネイラが嫌うと言うのも何となく分かったのである。

と、考えると何故シャーネルとネイラが一緒にいるのかも理解できないが、他に理由でもあるのだろうか。

「あつ、よく見たらタナちゃんだー!!」

「た、たなちゃん!？」

シャーネルの呼んだ名前の違和感にすぐさま反応するクレイヴ。
口調こそ軽いものの、切れ長の目等からなるキツメの顔つきのこの
女が、そのように呼ばれているのもまた拍子抜けであった。

「おっは、シャーネルちゃん元気イ？」

「いや、ちよつと変な人形に襲われてね、ビックリしちゃっ――
――あ~~~~!!!!

もしかしてこの人形、タナちゃんの……」

「当ったり、ゴメンツ驚かしちゃって、ほら未だに噂を嗅ぎ付け
て空き巣に入ろうつて言う輩が多いからさあ、追いつ返すのにアイツ
を置いて操ってるワケ。

こっちも、怖がって逃げてくのを見てるの面白いしい、ちよつと
したサプライズって事で」

「もお、ビックリしたんだから」

「うんうん、さあ、片一方は相変わらず元気みたいだけでもあ・
・あれ？ネイラちゃん、ご機嫌ナナメ……ってか大丈夫？」

シャーネルの返事に満面の笑みを浮かべながら、クレイヴの元に歩
いてきて不思議そうに背中にいるネイラに話しかけた。

ネイラの知り合いでも、やはりこのような姿のネイラは見た事が無
いらしい。

「……少し気分が悪いだだけだ、気にするな」

「なら良いんだけどね、まあ疲れたらベッドもあるしさあ、休んでったらどうよ？」

女は二階を指差しているのだろう、天井に向かって頭の横の位置で人差し指を指した。

「お、おいおい、ちょっと待てよ。」

誰だか分からないが、まるでここが自分の家みたいに言ってるけどこの主は・・・」

「知ってるよ、死んでるんでしょ」

クレイヴの声に割ってはいる女の言葉で、場の空気が変わった気がした。

「いやさあ、ココってさあ便利なんだよねえ、山奥で静かだし、大きい都市も結構近いしさ。」

だ〜か〜らあ、ここが空いたから借りちゃってんの」

「えっ・・・タナちゃんそれって・・・」

「シャーネル、この際『それじゃあ、お前が文字通り空き巢だろ』とか無駄に突っ込まない事にするから、何か知ってたら教えてくれ」

「死神」

クレイヴの背中から低い声でネイラが呟いた。

「・・・なんだって？」

「こいつは死を司る神、即ち死神だ」

「そつそ、ネイラちゃん紹介どうもっ。

俺は死神なワケで、んで都合の良い所で都合の良い時期に・・・
ここの主がコロツと逝っちゃったワケ」

軽い口調で身振り手振り添えながら話す女。

「死神ってね、人の死を操ることが出来るって聞いているけど……」

先程までにこやかだったシャーネルまでもが真剣な表情で話し出す。

「まさかコイツがココの主を……」

まさに場の空気が凍りついた瞬間であった。

「はあい、はあい……」

止め、やめっ、んなワケないっしょ？」

一気に空気の塊が砕けるような軽い声。

「死神が人の死を操れるってのは単なるう・わ・さっ！
んな事出来たら、もうとっくにもっと大きい屋敷を自分で建てて
るっしょ？」

「つか、あの人形にも持たせてあったっしょ、玩具のナイフ。
追い払う悪党すら殺せない奴がどうして、何もやってない人を簡

単に殺せるワケよ?」

「・・・シャーネル・・・コイツいつもこんな感じか?」

大きく溜息を吐きながらクレイヴが言う。

「うん、疲れるけど、楽しいよね」

「疲れるだけの間違いだ」

このシャーネルとネイラのやり取りを聞いて、クレイヴは確信した。
ネイラにとって、シャーネルとこの死神の違い。

それは『疲れる』か『疲れないか』だ。

「どうしてそう悪く言えるワケよお?
それにさあ俺の名前はコイツじゃなくて『タナトス』っていうん
だけだ」

「ああ、それでタナちゃんか」

「そそっ」

大きく頷くタナトスと言った女。

「ああ、そうだ。

神って事は人間と契約してるはずだよな？
契約主はどこだ？」

「死神は特別なんだよ」

シャーネルがクレイヴの問いに答える。

「死神はね、契約しなくても肉体を人間界に持てるの。
ただし、死神は独自に執行する任務があるらしくて、その内容は
本人しか知らないの」

「説明ご苦労っ、シャーネルちゃん！
って〜ワケで、こういう風に過ごせる拠点があると楽なワケ
よ。」

別に任務こなしてもお金もらえる訳じゃないし〜、ホント都合が
良すぎるねえここは」

「ま、確かに分からんでもないな」

「あ、あとね。」

すっごい面白いんだけど、こう見えてもねタナちゃんは人間界でいう男なんだよ?」

「ああそれで一人称が俺なのか……は!？」

神にとって性別とは有って無いようなもので、人間界に降りる際にもうらう肉体が男か女であるかの違いでしか無い。

それにしても男には見えない容姿で、白く綺麗な肌や目や鼻の形、それに声まで、まるで女性そのものである。

「シャーネルちゃん、それ言ったら面白く無いしよ?」

誘惑しておいてやっぱり男でした、とかやりたかったのにさあ」

「あつ、ごめん」

「……俺もネイラの意見に大賛同だ」

「うむ」

「疲れの根源でしかないな、コイツは」

一同、現在森の中。

実は電車の出発時間まで時間が無い事に気が付くのは、もうすぐの事であった。

死の住む館（後書き）

新キャラがついに登場。

もう、軽すぎてついていけない人は頑張ってください。

何があっても彼女、いや彼の性格は変えるつもりは御座いませんので、悪しからず。

彼の今後の活躍に乞うご期待。

誘いの波動

いつの間にやら辺りはすっかり夕暮れ色に染まり、長閑な山村も夕焼けの色の顔を覗かせる。

窓の外の風景がゆっくり動き出し、徐々に離れてゆく。

列車は次の駅へと進んでゆく。

さて、夕暮れ時のオレンジ色の自然はこちらを見るとばかりに色鮮やかであるが、そのような風景などには目もくれず、車内では騒がしい男女が2人。。。

「あのな、本当にあと30秒だ、30秒遅れてたら完全に乗り遅れてたぞ！」

「いいじゃん、間に合ったんだから」

クレイヴとシャーネルは向かい合う席で、静かな車内では大きすぎる程に大声で口論をしていた。

「間に合ったのも、俺があ館で時計を必死に探したからだ。他に誰一人時計なんか気にかけてもいなかっただろ？」

俺が一人で必死に探しだして、もうまずいって言うてるのにも拘らず、紅茶を啜ってただろっ！」

「だって、美味しかったんだもん、タナちゃんの家の紅茶」

「でしょでしょ？あれさあ、元からあの家にあっただけどさあ、美味しくつてえ——」

「つてか、なんでお前が俺の横に座ってんだよ！！！」

クレイヴは、横に座りながらごく自然に会話に入り込んできたタナトスに対し怒号を散らす。

「だつてさあ、ネイラちゃんの席が空いてるワケでしょ？」

「・・・乗らなきゃソンって感じ？」

「別に損でも何でも無いだろ」

「あ！そうそう、それにこの列車に乗ってけば終点はインティスじやん？」

俺さあ、インティスでちょうど良い任務があんだよねえ。

あと一週間で締め切りだから、まあこの際にさつさと終わらしたら楽つしょ？」

「明らかに今思い出したろ、その任務」

「細かい事は気にしなあい、気にしなあい。

みんなはそつからポルトに向かうワケつしょ。

そしたら、俺はみんなの帰りを待ちながら任務を遂行しちゃって、もっかいインティスにて合流。

したら、みんな仲良く我が家へお帰りなさあいって寸法かねえ」

「・・・なんか上手くまとめられた気がするな」

口調の軽さの割りに、意外と真つ当な計画を即座に作るもんだと、感心するクレイヴ。

「これでもねえ、タナちゃんはずつごく賢いんだよ？
天界でもトップクラスのキレ者なんだよ」

「ふゝん・・・人は見かけに寄らないもんだな」

そう言つてクレイヴはタナトスを見る。

「——つて昔、タナちゃん自身が言つてた」

「自画自賛かよ」

タナトス、まだまだ未知の能力が秘められた存在である。

「・・・そういやさ、話は変わるけど・・・」

クレイヴは一息つくと、席に座りなおし、話し出した。

「城で会つた、二人組いたろ。
正確には侵入者だけど」

「二人組い？」

「だれよ、それ？」

体を前に倒し、右隣のクレイヴの顔を見てタナトスがいった。

「ああ、俺達の旅の1番の原因だ。」

「さっきは急いでて話は途中で終わったが……」

「あゝさっきチラつと聞いた、ポルトに人質がいるって話の事ね」

クレイヴが時計を探している時に、旅の目的等は大まかにシャーネルが説明していたので、すんなりとタナトスも理解したようである。

「うん、それがどうかしたの？」

「あの二人が言ってただろ。」

間もなく一人の男と出会い、そいつとポルトを訪れたとき真実をどうとかって……ああ、あの時シャーネルは兵士の治療で忙しかったか」

当時を思い出すように、少し上を見ながら話すクレイヴ。

「うん、でも大体分かるから、続けて」

「でさ、その男ってのは……」

クレイヴとシャーネルは二人揃って横にいる、明らかに女にしか見えない死神に焦点を定める。

「……はいはい、パスパス。」

そういうのは信じないってゆうかあ、ポルトに用事は全然ないんだよねえ。

ってなワケで、俺という線はプッチン！切れちゃいましたとさっ手でチヨキを作って切る動作をしてみせるタナトス。

「・・・はあ、確かに、こんな軽い奴があんな硬派な奴らに予知できないよな・・・。」

明らかに見た目は女だし」

「ってかさあ、何で信じてんのさ、そいつ等をさあ。

現時点ではそいつ等ワルモンっしょ、大悪党っしょ、極悪人達っで見解っしょ？」

「それもそうだけど、何か・・・無視できない何かがありそうなんだよな」

そう言うのと、クレイヴは何か遠くを見つめるような目で、暗闇に染まりつつある窓の外の風景を見る。

「私も話し聞いたら少し気になってきたなあ。

次の町かどこかで、片っ端から男の人に話しかけてさ、自然について来たらビンゴッ！とかは？」

「さっすがシャーネルちゃん、名案っ！

俺もやってみよっかな、一応付いて来てるワケだし、何かしら協力しないと批判の嵐っしょ」

「変な事やるのは止めておいた方がいい。

大体お前らに誘われたら大概の男は自然に付いて来るだろうし。

何よりシャーネルツ！お前を放って置くと忙しさが2倍・・・いや5倍程になるから大人しくしてる事」

手の平に顎を乗せ外の流れる景色を見ながら、かったるそうに答えるクレイヴ。

「えゝ、つまんないゝ」

「俺もシャーネルちゃんがいなかったら、暇になっちゃったりしちゃうんですけどゝ」

「お前らがコンビで町を歩くのが一番ダメだ！タナトスはどうせ付いてきただけだから、いなくなったら置いてけば良いが、シャーネルは置いていけないからな」

「ひつどい言い方ゝ」

そんな事言つてると地獄送りにされても文句言えないかねゝ」

タナトスは冗談らしくそう言うと、両手を頭の後ろに回し、シートにもたれ掛かった。

「はいはい、地獄へでも何処へでも送ってくれ。」

少なくとも生きてるうちは安全だろ」

クレイヴ、二人の相手に疲れたのか、窓の外に目を向けたまま、大きく溜め息を吐く。

「・・・ねえねえ、タナちゃん。」

クレイヴもちょっと疲れてるみたいだから、晩ご飯でも食べに行こっか」

シャーネルはタナトスにそう言くと、「・・・クレイヴね、怒ると結構怖いんだよ」、とタナトスの耳元でコソコソ付け加えた。

「あつ、賛成」。

ちようどお腹すいちゃったんだよねえ。

クレイヴのリアクションも悪いし」

「クレイヴ、良いよね？」

「・・・」

クレイヴは先程自分が言った、二人を野放しにするとマズイ、という事も車内なら問題無いと思ったのであろう。

聞いてないのをアピールするように同時に自分の腕を枕にして、座席の上で横になった。

「・・・ま、返事が無いならいいっしょ。

お金は俺が全部払っちゃうから、五月蠅いのが二人消えてるうちに休憩しちゃってねえ」

そう言つて、タナトスは手をヒラヒラ振ると、シャーネルを引っ張つて列車の奥の方へと消えていった。

「・・・自分達が五月蠅いのが分かつてるなら、静かにしてくれ・・・」

クレイヴはそう一人で呟くと、溜息をついて静かに目を閉じたのであった。

一定のリズムのまま、列車は日が沈み、月明かりにのみ照らされている草原に敷かれたレールの上を走る。

月に照らされている草や木の葉は、風向きに合わせて皆同じ方向を向いているが、列車付近の草は列車を避けるように広がっている。

「……ん……………結構長く寝ちまったみたいだな……」

クレイヴにとって、列車の人間の鼓動に似たリズムが心地よかったのか、すっかり深い眠りに入ってしまったようだ。

隣を見るとタナトスが、正面ではシャネルが、寝る前の五月蠅さなど微塵も感じられないほどスヤスヤと熟睡しているようだ。

「……静かっても慣れないもんだな……」

『話し相手になろうか？』

クレイヴに話しかけてきたのは、乗り物酔いにより実体化を解除せざるを得なくなったネイラだ。

現在はクレイヴの精神内に居るので、周りには聞こえないがクレイヴと精神内で会話を交わす事が出来る。

『なんだ、起きてたのか？』

てつきり俺の精神の中でも居眠りしていると思ってたよ』

『私でも飽きる程寝てしまった、という事だ。』

というより、ここでは寝ていても何も身体的実感が沸かないから、寝ても意味が無い』

『・・・でも、天界でも寝ていたってシャネルが言ってたぞ？』

天界からこちらに降りる際に肉体を貰い受けるって言ってただろう？』

『天界では天界用の肉体がある。』

クレイヴの言う事が正しかったら、私とシャネルが天からクレイヴの前に現れた時、お互いに何かしら反応があるだろう。

でもお互いにこの姿だったから、何も反応しなかった、そうだろう？』

『確かに、シャネルだったら直ぐにでも喰らいつきそうだな』

『理解できた所で、私も一つ質問があるのだが』

『何だ？』

『いつインテイスに着くのかだ』

『あ、まだ言っていなかったか？』

まあいい、何も無ければ明日の夜だよ。
日が昇って、もう一回日が沈む頃には着く予定だな」

「案外早いのだな」

「それでもかなりの距離さ。
この列車だつて結構な速度出てるからな」

そう言つて目線を車外に移すと、流れるような景色の中先程の草木は姿を消し、月明かりに照らされ藍色に染まつた水辺が現れた。車内にいるので外からの音は聞こえてこないが、その風景から静寂が広がっている事は安易に想像できる。

「お、もうシレーナに着いたのか」

その湖を見ながらクレイヴは一人呟いた。

「何だ？ここは？海か？」

クレイヴの視線を通して景色をみたネイラがクレイヴに聞く。

「いや、向こう岸が見えないから無理も無いけど、これは湖だ。

人間界じゃ誰でも知ってる昔話で、ウン千年も前の話らしいが、ここは単なる大きな穴だったらしい。

勿論水も無ければ、人が集まる訳が無い、単なる荒地だ。

そこである水の精霊とその主が何を思ったかここに大雨を降らした、どれ程続いたか分からない程にな。

その後大陸一の湖がここにできて、緑も増えた。

勿論そうなると人も集まる、水源を中心にこの大陸が誇る大国『水の都シレーナ』に発展したんだ。

多分もう直ぐ大きな都市が見えてくるはずだ』

『成る程な、それ以来干乾びていないのもその精霊の力なのだろうな』

『ま、昔話だから、本当の話かどうか分からないけど』

「……もうシレーナ……か」

クレイヴは突然隣から聞こえてきた声に驚き身をビクつかせた。

「起きてたのか」

「ん……正確にはたった今起きたんだけど、んなこた気にしない気にしない」

大きく両腕を上方へ伸ばしながらタナトスは言った。

「で？」

「は？」

どうやらクレイヴの『で？』の意味が伝わらなかったようで、タナトスはキョトンとした表情を見せる。

「シレーナに何かあるのか？」

「独り言のつもりだったんだけど、結構聞こえちゃってたワケか・

。。

そんな大きな事じゃ・・・いや、俺にとつちや結構重大かもしれないけど。。

ま、ちよつとした知り合いがいる訳よ。

人間界に長くいると人間の知り合いもそつこら中にいるってワケ」

「そうなのか？

ああ・・・でも確かこの列車はここには止まらない予定だから、残念だったな。

また今度個人で尋ねてくれ」

どうも様子が変だと感じつつも、列車は止まり様が無いので深くは聞かないことにしたようだ。

「・・・止まらないなら、しゃくないかあ。

んじゃまだ眠いし、もう一眠りしよつと・・・」

タナトスは少し残念そうな顔をしたが、すぐに横になったのでクレイヴは気が付かなかった。

クレイヴはそのまま何の気無しに、もう一度外へ目を向けようとしたその時だ。

それはもう列車が怒号を發したかのようだった。

突如列車が大きく揺れたのだ。

まるで何かが大地に衝突した様に。

「つち・・・何だ？

地震つてやつか？」

クレイヴは子供の頃、遠方から来た旅人から聞いた、地面が大きく揺れる自然現象の名を口にする。

「違うつしょ、コレは。」

地震はこんな風に物が衝突する様な揺れじゃあ無いからさあ」

タナトスは地震を経験した事があるのだろう、何時もと変わらない口調でそう言った。

「じゃあ何なんだよ……」

車内は騒然としていた。

突然の原因不明の大きな揺れ、それだけで乗客がパニックになるのには十分だった。

この列車に乗っているのは巨大大陸の内陸部に住んでいる人々が殆ど、即ち地震等で地面が揺れる事など耳にした事すらない人が多いのである。

無論地震を知っている者も、この場合はパニックであることは間違いない、タナトス曰くこれは地震ではない為だ。

この車内のパニック状態を打ち消す為か、唐突に車内にアナウンスが響いた。

「お客様にご連絡を申し上げます。」

ただ今の原因不明の揺れの際、列車に故障が生じた恐れがありま

す。

従って最寄のシレーナ駅に車両点検の為、緊急停車いたします。
出発の目処は立っておりませんが、点検時間に最低でも4時間は
掛かるものと思われます。

申し訳ありませんが、お客様のご理解とご協力をお願いいたしま
す」

車内のアナウンスを聞いたクレイヴは、徐に立ち上がってシャーネ
ルの頬を弱めに叩いて起こそうとした。

「……ん……むにや……むにや……違うよ」。

それはね、カボチャじゃなくて大きいピーマンだよ……むに
や……」

「おいっ、シャーネル。

どんな夢見てるか知らないが、早く起きろっ」

クレイヴは、列車の揺れに全く反応無しのまま寝言を言うシャーネ
ルを叩き起こした。

「……何？何か用？」

「用じゃなくて、列車が揺れたんだよ、それもかなり大きくな」

「……90度位の急カーブでも曲がったんじゃない？」

（ポカーン！）とクレイヴは黙ってシャーネルの頭をグーで叩いた。

「イテテ……もう揺れてないから良いんじゃないの？」

「……そうじゃなくて、それで列車が緊急停車するから、町に行くかどうか聞いておこうと思っただけだ。

後で話を聞いて何で起こさなかったか、問い詰められるのも嫌だしな」

「どんな所なの？」

「水の都」

その一言で眠気で死に掛けのような目に輝きが宿った。

「行く！！」

「へいへい、やっぱりそうだな」

2、3度相槌を打つクレイヴ。

どうやらシャーネルにとっては、寝るよりもまだ見ぬ地への冒険の方が勝るようである。

「お前もその知り合いの所へ行くんだろ？」

「……どおして、止まっちゃうのかねえ……」

眠る姿勢のまま、元気の無い様子でそう言った。

「ん？どうした？」

別に強要してる訳じゃないから、降りたくないなら別にいいんだ

が・・・」

「・・・・・・・・・・」

本当に寝ているかのように一言も言葉を発さないタナトス。考え事でもしているのか、体を動かす事もしない。

「おい、調子でも悪いのか？」

と、クレイヴが隣からタナトスの顔を覗き込む。

「・・・なんでも無いっ。

降りるに決まってるっしょ、こんな楽しそうな事滅多に起こらないからねえ」

クレイヴの目の前には、先程の声のトーンから予測した表情とは違う笑みを浮かべた顔が有った。

また例のドツキリの一種か、と思うと同時に自分の席に倒れるように勢いよく戻り、何故か大きく息を吐いた。

この手のハプニングには色々と厄介事が絡んでくる、そのような考えが染み付いてしまっているクレイヴにとっては、どうも嫌な予感がしたのだ。

それが杞憂に終わったという安堵の溜息であろう。

「一応言っておくけど、騒ぎだけは起こすなよ。

飽くまでも時間つぶしでしかないんだから、問題起こして出発に間に合いませんでした、じゃ笑えないからな。

それと――」

嫌な予感が完全に消えたわけではないが、取り合えず何時ものよう

に注意を促す調子くらいは出てきたのか、円滑に注意事項が問題児の耳へと突進する。

「分かったよ、心配し過ぎだつて」

その注意事項の内容に心当たりがあるのか、嫌がつて顔を歪めるシヤネル。

「と・に・か・く！

勝手な行動は慎むように」

「はい」

「あつはつは、引率の教師とその生徒みたいなんだけどお」

「タナトスッ！！

お前も例外じゃない！！」

「ごめんなさい」

二人の会話を他人行儀で聞きながら爆笑するタナトスにも勿論刃は向けられるようである。

もちろんそんな事は計算ずくで、タナトスはわざとふざけた様子でよそ見しながら謝ってみせた。

「・・・つたく」

『クレイヴ、落ち着いた所で一つ質問があるのだが』

会話がひと段落した所を見計らって、ネイラが心の中でクレイヴに

言ってきた。

勿論会話は外へは聞こえていない。

『なんだ？』

『・・・列車と言うのは90度の急カーブを曲がれるのか？
構造的に不可能の様な気がするのだが』

『結構前の話掘り出したな、オイ・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・先程から少々気になってな』

『一応答えると無理だな』

「あつ、見えてきたよ」

揺れが起こってから1分程で、夜景に浮かぶ巨大な都市が4人の視界に入ってきた。

その都市は真夜中だというのに、まるで地平線上に月が在るかのよ

うな光を発している。

月に形容される所以は、巨大都市での電気の普及率もさることながら、水の都ならではの外見のシステムにある。

水の都である事を強調する為、都市を守る半球状の結界の内側から巨大な噴水で水を噴射しており、

結界にぶつかった水は結界を伝って半球状に都市を包み込む。

それが内側の都市の光を反射し、外側から見るとまるで半月が地上に在るかのように見えるのだ。

シレーナはこの幻想的な風景の為に、各地から人が集まり、リゾート地的な一面も持っており、都市の経済の一角を支えている。

「・・・きれいだね」

「だな」

シャーネルもその幻想的な雰囲気魅せられてしまっているようで、ややうつとりした表情でその風景を眺めていた。

「シャーネルちゃん、驚くのはまだ早いんだよねえ、これがさあ」

「ん？」

「ほらほら、あれ」

タナトスが指差した先には、すでに水を纏った巨大な結界が迫ってきていた。

そして、列車はそのままの速度で水の壁を突き抜け、あたり一面に

光に照らされた水飛沫が舞い散った。

まるで星に囲まれている様である。

「わぁ・・・・・・・・」

その水の星々に負けないほどシャネルの大きい瞳は星だらけの様に見えるが。

さて、列車についた水滴が疎^{まは}らになる頃には、一行をのせた列車はシレーナの中心地にある駅に到着した。

列車の中は未だに先程の揺れからか騒然としており、ほぼ全ての乗客は荷物を持って列車から外に出て行く。

一方クレイヴ達は慌てる様子も見せず、混雑が解消されるのを待つために暫く座っていることにした。

「なんか、本当に水の都って感じだね」

駅のホームはこれまでに停車した駅のどれよりも豪華で、所々に噴水がありそれを彩るように青色の装飾品が駅の至る所に飾つてある。その優雅な雰囲気も今は、慌しさ故、微塵も感じられないが。

車内の様子が一段落した様に、見えてきたので3人は列車から降りる事にした。

クレイヴは列車から降りるなり、直ぐにネイラを召還し、これからの動向を話し合う事にした。

「俺達はやる事は特に無いが、タナトスはその知り合いの所に行くんだよね？」

「ま、そうさせて、もらっちゃおうか。
皆と行動すんのも楽しそうっちゃ楽しそうなんだけどねえ。
残念だけどこっち優先って事で」

「へいへい、勝手にどうぞ。
重荷が減って悲しむ奴はいないからな」

「それはどうも。
いつてきまゝす」

タナトスはそう言って手をヒラヒラ振り、歩き出すと駅の人混みの中へ消えていった。

「さてと、俺達はどうする？」

「どうするって言われても・・・私達ここ初めてだし。
とりあえず、適当に歩いてみようか、いいよね、ネイラ？」

「私は一向にかまわん」

「それじゃ、しゅっぱーっ」

この町シレーナは『水の都』と呼ばれるだけあって、あらゆる建物が水を連想させる涼しげなデザインとなっている。

駅の構内も例外ではなく、至る所がガラス張りになっており、そこを水が伝っている。

しかし、今はどうも様子が違ったようで、シャーネルは一步踏み出した所でその異変に気が付いた。

硬いものを踏んだのか足元でバリツと碎けるような音が鳴ったのだ。

「あ、何これ・・・ガラス？」

駅の床に転がっていたのはガラスだった。

「成る程な、どうも騒がしいと思ったら、ここの一部ガラス張りになってる壁が全部割れてるんだ。

多分さっきの揺れが原因だろう、どうやら列車だけが揺れた訳じゃないさそうだ」

確かに駅構内の壁からは、先程までガラスを伝っていた水が入り床にはちよつとした水溜りが至る所に見受けられた。

「揺れてさっき言ってた？」

シャーネルは寝ていたときの事を思い出して、クレイヴを見る。

「ああ、でもタナトスは地震じゃないと言っていた。

・・・何かあるかもな、これは」

「じゃ、それ探しに行こうよっ！

その原因を見つけたら、これ以上問題は起きないから列車も早く

出発するかもしれないよ？

ネイラも良いよね？」

「私是一向にかまわん」

「・・・シャーネルの言う事には一理あるけど、地震が滅多に起きない地域で謎の揺れ。

多分そこら辺はこの国の軍がやるだろうし・・・民間人なら兎も角、俺達はこの国の人間でも無いんだぞ？」

他国での行き過ぎた行動は時に国の間の問題になり兼ねない。
最悪、戦争が始まることだって考えられる。

「そんな目立つ事しないよ？」

ちよつとした野次馬みたいな事で、飽くまでも探すだけっ」

「なら、いいが。。

ネイラも良いか？

面倒くさい事になっても」

「私是一向にかまわん」

「・・・ネイラ、さつきからそれしか言っていないけど、どうかしたの？」

先程から「私是一向にかまわん」と言つて、頷くだけのネイラに違和感を覚えてシャーネルが心配そくに顔を見る。

ネイラはゆっくりと手をお腹に当てた後にこう言った。

「・・・お腹空いた・・・」

「「あ・・・」」

ここに来て、朝からネイラが食事を一回も取っていない事に気が付く一行。

3人は情報集めも兼ねて、食事が出来る場所へと歩を進めるのであった。

「ふあゝ・・・眠い・・・」

そつえば眠ってもいい。

誘いの波動（後書き）

さて、謎の揺れ、タナトスの行動、クレイヴ達の行動。そしてネイラの食事はどうなるのか。

タナトスの意味深な言葉の数々は後に繋がってゆきますので、よく覚えておいて下さいね。

あとついでに、ネイラは身体を保存したのに何故お腹が空いたのかを記しておきましょう。

酔い等の身体的な状態は保存されます、だから怪我などは保存されたままです。

身体を維持するためのエネルギーは人間界での体自体を維持する為に随時使われております。

故にお腹が空いているし、眠気も自動的に溜まってゆきます。

後付みたいですが、コレが真実です（ビシッ）。

ですが質問は受け付けます。あと、面白くてもつまらなくても感想は受け付けてます。

そう言えば、最近感想に返事？が出来る事を知って、ちょっと困惑です。感想を下さった方ありがとうございます。拙い文ですが、これからも私の小説をよろしく願います。

守る者と破壊する者・・・

3人はシレーナの駅近くにある酒場に来ていた。

薄明るい青色のライトに照らされる店内は、男臭さ溢れる一般的な酒場と違い、神秘的な雰囲気が漂っている。

「・・・・・・・・ん？」

情報収集の為に立ち寄った3人であるが、店内は客が全くいない。店自体は中々の大きさで、ここまで大きければ深夜でも多くの客で賑わっていると踏んでいたクレイヴは、

店内へ一歩踏み込んだ所で思わず立ち止まり、店を間違えたのかと店内を見渡した。

しかし、カウンター越しに置かれる大量の酒樽を見ると、やはりここは酒場なのだ。

店内は酒特有のアルコールの香りが漂っている。

さて、そうは言っても3人の目的は酒ではない。食事ついでに、揺れの事で何か知っていないか、情報を手に入れる為だ。

酔ってしまったては行動に出る所ではなくなる。

「ま、まあ、客がないのは拍子抜けだけど、とりあえず何か食べよう。」

ネイラの元気が見る見る内に無くなってるからさっ！」

「そうだな、話はマスターにでも聞いてみるか」

クレイヴがそう言うと、3人は木製のカウンターの席に腰を掛ける。カウンターにはややガッチリ体系で立派な顎髭を生やした男性が一人。

何処から見てもこここの店主なので座る場所に迷う事はなく、座ったのは彼の目の前である。

「マスター取りあえず・・・そうだな。

今後の事も考えて酒はやめておこう・・・何か美味しいもん3つ、オススメを頼む」

「随分大雑把な注文だな。

あんたらさっきの列車の乗客か？

大きなアナウンスが聞こえたが」

「ああ、そうだ」

「じゃこの国の新鮮な魚介類を使った冷静パスタなんかどうだい？
内陸部から来たんだろ、だったら魚介類なんかあんまり食えねえ
だろ」

マスターは、白い歯をこぼしてニツカリと、店の料理を自慢するかの様に言った。

「魚介類か、あまり口にした事は無いな。

それにしよう、頼む」

どうやら味には自信があるようでクレイヴもそれを察し迷わず、マスターオススメのそれに決めた。

と、言うよりさつさと料理を出してもらいたideだけのようにも見えるが、兎に角プロのオススメに従って悪い事は無いだろうと判断したのである。

「・・・・・・ほらよ」

店のマスターは注文を受けると、ささっとカウンター越しに手を動かし3つの料理を出した。
ものの10秒程度である。
いうまでも無く早すぎる。

「随分早いな、新鮮と言う割には作り置きか？」

料理を指差して、クレイヴがいう。

「いや違うんだ、ついさっき、ほんの1分前までコレを注文してた客が大勢いたんだがよ。」

作っている途中でみんな出て行っちゃったんだ」

「出て行った？」

「ああ、一人の常連客がよ、急に入ってきたんだ。」

んで『おいっ、湖が大変な事になってるみたいだぞ』って言ったら皆、酒の勢いで見に行っちゃった。

ビンも揺れの影響で落ちて割れちまうし・・・・・・まったく良い迷惑だぜ。

そうそう、多分あんたらの列車が止まったのも、その異変が原因かもな」

「・・・・湖か。」

何が起きているのか分からないけど、見に行く価値はあるだろうな。

「コレを食ったら行ってみるか」

「うん、そだね」

「……（ぱくっ）」

返事をするのも面倒くさいのか、ネイラはさっさと食事に手をつけ始めていた。

「よほどお腹空いてたんだね」

「……あ」

「ん、どうした？」

シャネルがネイラを微笑ましく見ていると、ネイラはパクリと料理を口に入れた瞬間何かに気が付いたのか、目を鋭くして一言漏らした。

「……美味しい、これ」

「おお！そうか。」

これはもともとあんた等に出すもんじゃなかったし、何より二人ともベツピンさんだからなあ。

よし！この料理は特別料金でサービスするよ」

「……悪いね」

クレイヴは頭で軽めに礼をすると、自らも料理に手をつけるのであった。

「ここから湖への最短距離は西方向だ。
つまりあっちだな」

食事を終えたクレイヴ達に、マスターはわざわざ店先に出て湖の方向を指し示す。
食事中のやりとりでクレイヴ達には分かっているが、とても良心的な人物である。

「マスターは見にいかないの？
一緒に見に行こうよ」

シャネルは首を傾げながら言った。

「んゝまたあんたらみたいな客もいるかも知れないしな。

美人の誘いを断るのは惜しいけどよ、客を前にして居なくなったら商売屋失格つてもんよ。

「ははっ、それもそうだな。

さて・・・と、本当に感謝するよ。

タダ同然で食わせてもらって、道まで教えてくれるなんてな」

「気にすんな、こっちはこっちで楽しかったぜ。

またシレーナに来る事があつたら、顔出してくれ。

旅先で怪我の無いようにな」

「ああ、仕事柄怪我無しは無理かもしれないが、
できる限り気をつけるさ」

「そんだけ言えりゃ安心だな、じゃあな」

「ああ」

マスターが店内に消えていくのを見送ると、3人は先程指の指されていた方向へと歩き出す。

とは言っても、湖という大雑把な話しか聞けてないので、あまり急ぐ気配は見られない。

大問題が湖のこの場所で起きていると言う確信があるのならば急ぐ気はするのだが、問題であるかどうかすら怪しいのだ。

さて列車の外からも見えたとおり、シレーナで湖が見られる場所は多い。

むしろ、陸よりも湖に接している場所の方が多い位で、列車から降りてどの方向へ進んでも湖に突き当たる程である。

「やっぱり、多少の被害は在るみたいだな」

クレイヴは歩きながら町の状況確かめる様に、夜道にキヨロキヨロと目配せしながら言った。

駅同様にガラスが割れている家もあれば、街の噴水の一部が壊れていたり、謎の揺れの傷跡が見受けられる。

無論そこには、応急の措置を施そうとする人々も多く存在し、夜中とは思えない程に騒がしかった。

「クレイヴの精神内に居たから、飽くまで視覚的な感想に過ぎないが。」

あの揺れにしては、正直被害が小さいと思うのは私だけか？」

何の気なしなのか、それとも本当に不思議に思っているのか分からない程にネイラは感情を込めずに言った。

確かに、被害があるのはほんの一部の建造物のみである。

クレイヴもそこでふと思った。

列車内での揺れは、この程度の被害で済むようなものではなかったのだ。

頑丈な列車のパーツが破壊される程の衝撃。

クレイヴはこの国の木造またはレンガ造りの建造物を見る。

「確かにあの揺れだと、地上で全ての建物が被害を受けて無いと可笑しいな。」

ここは恐らく頑丈な建物ばかりじゃない、地震が滅多に起こらないこの国の建造物で耐えられるのは・・・」

「ってことは・・・揺れは列車の付近で起こっていたかもしれないって事？」

「となると、やはり湖の問題が揺れの元である線が濃厚か」

「少し急ぐか・・・」

三人は推測を確信へと仕向けるべく、歩を進める速度を上げる。
先程の酒場のマスターの話に寄れば、あともう僅かで到着である。

「わあ・・・何あれ。」

まるで大きい噴水みたい」

家々が立ち並ぶ通りを走り抜け、景色の良い広場に到着した3人。湖を見たシャーネルは最初に一言そう漏らした。

この広場は湖に沿ってレンガ造りの床が町の端、湖の端まで伸びており、広場と言うよりは『町と湖の間の大通り』と形容した方が分かりやすい。

そこにはもうすでに噂を聞きつけてきた人々が大勢おり、上空からみたら人々がびっしりと湖に張り付いているようにすら見えるであろう程だ。

その人々の多くが驚きの表情を浮かべており、尋常では無い現象が目の前で起こっている事を物語っている。

あまりに広大で向こう岸が見えない、広大な湖。その中心・・・と目視でそう断定は出来ないが、3人のいる場所から見た限りシャーネルの言う『噴水』はあった。

湖から一本の水柱が上空に上がっていたのだ。

闇夜の湖に不気味な噴水が天に向かわんとばかりに。

「何だ、あれは・・・」

クレイヴも思わず目を疑った。

これ程の人が集まれば、人為的で無い事は確か、では自然現象かと問われればそうともいえない。

説明が不可能なのだ。

「見てっ、水柱の下の辺りが、だんだん膨らんで、丸くなってきてるっ！」

水柱の下部、シャネルの指差す所が徐々に膨らみ丸みを帯びてきた。

そこからはつつすらと光が溢れている。

丸みが増す程に、内側の光度も増しており、とうとう水柱との連結部分以外は完全な球体となった。

すると、水柱が短く収束していく。

ただしそれが進むほど、今度は球体の大きさも増してゆく。

そして、水柱が完全に収束したとき、水の球は宙に静止した。

「光が更に強く……」

球体内側の光が目で直視出来ないほどに強まった時。

『パシャアアアアーーーーーン!!!!!!!!!!』

水が弾ける音がした、ただそれは人間が水面を叩いた時のそれとは似ても似つかない音だ。

水が破裂、いや爆発した音とでもいえよう。

その衝撃は町全体が音で揺れているのではないかと言うほどの轟音であった。

音を聞くだけで、人々が逃げるには十分な危険信号となった様だが、一部の人は光が収まるのを待っていた。

3人も然りである。

ただし、他の人々はその好奇心すらも凌駕するような、光景が湖にはあった。

先程の球体の場所に皆が一斉に注目した。

「何だあれは！！！」

「バ、バケモンだっ！」

「結界にひびが入っているぞ！！
皆逃げろッ！殺されちまうぞっ！！！」

人々は先程の球体のあった場所に居る『者』を見ると一目散に逃げ出した。

前線に残ったのは、3人を含めたごく少数の人々のみである。

「あいつが、あの揺れの原因か？」

「断定は出来ないが、そう考えるのが妥当だ」

「・・・女の人みたいだね。

あの球体から出てきた所を見ると、普通の人じゃないね。
でも、精霊とも少し違うような・・・」

先程の水の球体から出てきたのは一人の女性であつた。

髪の色は水色で長く美しい髪が特徴的である。

今は目を瞑っており動く気配はないが、それは闇夜でもハッキリと分かる位に神々しい光に包まれており、間違いなく生きていた。

そして次の瞬間。

どのような原理かは解らないが、町に女性の声が響き渡る。

「我が名はセイレーン。

此の湖の主にして、水の精霊也。

此の地を守る主として、此の町に眠る強大な力を我が手にて葬り去る為、ここに蘇る。

今一度、町を葬り去り無に帰す事で救済を与えん」

その声は、何処か悲しげな声であつたが、内容を聞く限り穏やかな状況でない事は確かである。

「セイレーン・・・か。

この町の名の『シレーナ』の由来となつた精霊だな・・・」

クレイヴは何かまた面倒な事になってきたと思ひながら大きく溜息をつく。

「先程、列車の中でクレイヴが私に話した伝説の話か」

ネイラは先程精神内で聞いた話を思い出す。
豪雨を降らせ巨大湖を作り出し、このシレーナの発展に大きく関わった精霊の話である。

「何を言ってるのか分からないが・・・兎に角町を破壊すると言ってるのは確かだな。

まだ多くの人が家で寝ている時間帯だから、避難も出来ていない。タナトスも何処にいるのか分からないし、どうしたら・・・」

「クレイヴ！」

どうしようか迷ってる場合じゃないよ！

ここは私たちで何とかしなきゃ！」

「ちっ・・・そうだな。

だが、あいつは湖の真ん中から攻撃しようとしている。

あいつに俺達の存在を気が付かせる手段がないと、この国は攻撃される一方だ」

クレイヴの言うとおり、ここは国である。

湖の大きさも去ることながら、湖に面している国の土地も広大で、湖に沿って歩くだけでもどれだけ時間が掛かるか分からない。

幸い、此処から敵が見えると言っても、大きさは豆粒ほどにしか見えないので、正面に立てるかどうかわからないのだ。

まずは近寄らないと、どうしようもないのだ。

「君たち！何をしている！」

民間人は早く避難しなさい、戦いに巻き込まれるぞ！」

唐突に3人の後ろから男性の怒鳴るような大きな声が聞こえた。

3人は一斉にその声の聞こえた方向へ振り向いた。

胸元に『シレーナ軍』と書かれた青色の軍服を着た男が立っていた。険しい目つきに大きな体、どうやらこの国の軍隊の兵士のようなのだ。

「あんたは、この国の兵士か？」

「私はシレーナ水軍第一戦艦隊長、フォルシオ・ディ・アクアだ。軍用の船に向かう途中に避難勧告をしている。早く避難しなさい！」

これを聞いたクレイヴは他の二人に小声で言う。

「水軍か……それなら俺達の出る幕は——」

「……彼らには申し訳ないが、恐らく人間の兵器で適う相手では無い。

普通の精霊相手ならどうにかなるが、あのセイレーンと言う精霊は、どうもそれとは違う何かを感じる。

軍隊が向かって行こうが、死に行くようなものだ」

「でも、いきなり船に乗せてくれる訳が……あ」

と、クレイヴが言いかけたとき、ある物を旅の前に渡された事を思い出した。

（たしか、旅の前、王子に渡されたあれがあつたはずだ）

「君たち、何をこそこそ言っている！

何でも良いが、早く避難しなさい、いいね！！」

そう言つて、走り出そうとするフォルシオ。

「待ってくれっ！

俺はディラモート王国直属騎士団 団長クレイヴ・フォードだ。

あの、精霊はただの精霊じゃない、是非船に乗せて手伝わして欲しい」

「……君があの大国の騎士団長？

だが……ディラモート王国に水軍は無い、君が乗った所で足手まといになる可能性がある」

「いや、俺の後ろに居る二人は俺の契約神……じゃなくて、契約した精霊達だ。

目には目を、精霊には精霊をだ。

頼む、船に乗せてくれ」

クレイヴはフォルシオの目を真っ直ぐ見て言った。

「君の精霊か・・・よし、分かった。

私の乗る第一戦艦のみ搭乗を許可しよう。

さあ、着いてきてくれ」

クレイヴの目を見たフォルシオは、クレイヴを信用するに値する人物と認めたのか

同じ目つきで力強く頷いて、走り出した。

「よかったね、クレイヴ。

あんな台詞あんまり言えないからね。

かつこよかったよ」『俺はデイラモート王国直属騎士団長だ』つて・・・痛いっ！」

走りながらシャーネルがクレイヴの声を真似しだした、余りに似てないのでネイラはそっぽを向きつつ小さく笑ったが

言われた本人は相当恥ずかしかったらしく、クレイヴは顔を赤らめながらシャーネルの頭を強く叩いた。

「真似するなっ。

今は黙って走れっ！」

軍の船は先程の距離からそれ程遠かった訳では無いようで、黙々と走り続ける事30秒。

着いた先は、湖に面した大きな倉庫のような建物だったが、中に入ると4人の目の前には、3つの大きな金属製の船が並んで船舶していた。

「わぁ・・・これが船かぁ・・・」

思ってたより大きいねえ」

シャーネルが両手を広げて、驚いたように船全体を見回す。

「船には乗った事はあるが、ここまで立派なのに乗ったことは無いな。」

以前、親父に連れられて乗ったのは、木製でもっと小さかったからな」

「さて、感心している暇はないぞ。」

直ぐに出航だ、町の結界が破られて町が破壊されてからでは遅いからな。

さぁ、俺達が乗る第一船はこれだ、さぁ、そこから船に乗るんだ」

すでに船に乗っているフォルシオは、船と地面を繋いでいる木製の板を指差した。

3人は指示に従って、駆け足で船に乗り込む。

「隊長、何ですか？
こちらの方々は」

一人の兵隊がフォルシオに話しかける。
気になるのも仕方が無い、日頃の訓練と全く違うプランで事が進もうとしているのだ。

「いや、それはこれから話そう」

フォルシオは甲板の中央へ歩くと、船に居る兵隊全員に聞こえるように大声で話し出した。

「皆聞いてくれ！第二戦艦、第三船艦の者もだ！！
過去に湖に魔物が現れる度に、我々はそれを倒し、町を守ってきた。

しかし今、前代未聞の強大な敵を前にしている！
だが臆する事は無い、我々はこれまでの戦いを自らの誇りとし、戦いに打ち勝とうではないか！！

いいか！臆する事だけはするな！運命か否か、あの大国ディラモートの騎士団長と精霊も加勢してくれている。
勝利のみを見つめて戦おうではないか！！！」

『オオオ！！！！』

フォルシオの声に、倉庫内の船の全てから、建物全体が震えるかのような雄叫びが上がる。

兵士の士気が最高潮となると同時に三つの船が同時に動き出した。

「流石だね」

「ああ、そうだな、見事に3つの船を纏めて士気を上げてる。確かに負ける気がしてこないな」

船は魔力を利用した動力でゆっくりと速度を上げ、倉庫を抜ける。船の並び順は左に第二、右に第三、真ん中にクレイヴ達に乗っている第一戦艦という布陣。

町を背にした風景は湖しかなく、昼であれば美しい青が広がっているとされるが

今は夜中、あたり一面闇が広がっている。

しかし、やはり敵は見えている。

闇夜に一人が浮かんでいる。

船は魔力を動力源に、みるみる速度を上げ、いよいよ目標を100m以内に捕らえた。

「目標、大砲の射程距離内に捕らえました！
隊長、命令を！」

甲板に装着された大砲を構える兵隊が、声を大にして言う。

その姿は未知なる生物を前にしたからか、早く撃たせて下さいと言わんばかりの必死な表情を浮かべていた。

「ここから、人間程の大きさの目標に当たる可能性は無いに等しいが、威嚇にはなるだろう・・・」

大砲番号1から4まで発射！！」

『ゴヴーン！！！！・・・ゴヴーン！！！！・・・ゴヴーン！！！！・・・』

ゴヴーン！！！！」

と轟音を発しながら、闇夜の湖へと発車される4つの砲弾。
残念ながらセイレーンの周りの水が飛沫を上げただけであったが、
またセイレーンに新たな動きがあった。

「人間達よ。」

無謀な戦いに挑むとは、命を捨てるようなものだ。

例え、我を倒した所でこの町はいづれ滅び行く・・・それどころ
か世界の全てが破滅へと向かうのだ」

セイレーンの体はピクリとも動かず、宙に浮いているだけだであったが、3つの戦艦全てにこの声が響いた。

「町が滅びるだって！？」

セイレーンの言葉を聞いて、兵隊達の顔に動揺の表情が浮かぶ。

「待て、うるたえるな！！」

奴の言葉を鵜呑みにするな、動揺を誘う作戦だ！！

一旦動力を停止し・・・俺が話しかけてみよう」

そう言つて、フォルシオは兵士たちの感情を抑制しようとするも、フォルシオも少なからず動揺せざるを得なかった。

自らの命を懸けての戦いが、無意味以下であると告げられたのと同じなのだ。

動力が停止し船の速度が徐々に落ちてゆく。

そして船が完全に止まると、辺りは静まり返り、水面の波の音だけが一定のリズムで耳に入ってくる。

フォルシオは一呼吸おいて、船の先端へ歩き出した。

セイレーンへの距離はおよそ、30m程。

声を張れば相手に聞こえる距離である。

「私はシレーナ水軍第戦艦隊長、フォルシオ「ディ」アクアだ！
何故このような行為をするのか、詳しくお教え頂きたい！！」

「・・・正確な事は解らぬが、強大な力がこの町から目覚めようとしているのだ。

それを阻止するのがこの湖を作り町を発展させた我の成すべき事。
だが、時間は余り残されていないのだ、全てを破壊する、それ以外に方法は無い」

「そのような、不正確な情報で殺される我々は、その家族はどうなるのだ!!」

セイレーンの言葉を聞いたフォルシオは、より一層強い口調で返答をする。

「大きな世界を守る為に、多少の犠牲は必要。
それが我が栄えさせた町なら尚更の事」

「くっ・・・ならば、何故その存在を我々に伝えたのだ？
逃げられると言う可能性もあるだろう」

「破壊される理由も伝えられず、殺される人々が不憫だと思っただけの事だ。

・・・言う事はそれだけでよいのか」

「・・・仕方ない。

先程の残りの大砲第5から8まで全て発射っ!!
距離は近い、必ず当てる!!」

『ゴヴーン!!!!!!!!!!ゴヴーン!ゴヴーン!!!!!!!!!!』

「大砲、全弾命中です!」

船内の兵隊から歓喜の声が上がる。

しかし、フォルシオとクレイヴ、ネイラ、シャーネルの4人は大砲が爆発し、煙が上がる場所をじっと険しい目で見つめていた。

「……！！！！
来るっ！！！」

シャーネルが叫び、先程フォルシオがいた船の先まで走り出す。
一瞬で兵士たちの歓喜の声が止んだと思うと、次の瞬間、絶叫が響き渡った。

前方の煙の中から、サーベルの刃の様な形をした水が船に向かってきた。

『水の刃』とでも言えるそれは、3つ出現しており、それぞれが各船へと向かっていたのだ。

「っ！！……ダメッ、左右は間に合わない！
ネイラお願いっ！」

シャーネルは船の正面に立つと正面に大型の結界を張る。
しかし、焦りが混じった言葉通り、左右の船までは守りきれない。

「防御は苦手だと、この前言ったはずだが……」

そう言いつつも、ネイラは高くジャンプすると、左右の手から闇の魔力を放出し左右の刃の根元に数分狂わず打ち込んだ。
すると、左右の船に当たる直前に水の刃は水飛沫となり、姿を消し

た。

正面の刃もシャーネルの結界により消滅。

一難は逃れたと思い、ホツとする兵隊たちだったが、次の瞬間。

「うわああ!!」

聞こえて来たのは、絶叫ともいえる大勢の悲鳴。

右の戦艦が、縦に真っ二つに切れていた。

先程発射した刃の後ろにもう一つ、刃を飛ばしていたのだ。

「!!」

驚きの表情を浮かべる船の乗員達。

だが、驚いていても相手は待つてはくれない。

間髪居れず、左に戦艦も真っ二つに切れた。

金属製で剛性に優れた戦艦が、いとも容易く切れてしまう。

その威力に船に乗る兵士は皆身震いし、次は我が身であると言う恐怖にさらに体を震わした。

「・・・真ん中の船員の力量が高い事は一目瞭然。
ならば左右の船を一気に叩けばよい」

冷めた声でセイレーンが言う。

「・・・油断したか」

ネイラが珍しく、唇をかみ締めて顔を歪める。

最初の攻撃からの波状攻撃を予測できなかった自分への後悔からであろう。

しかし、後悔しても後の祭りである。

左右に浮かんでいた船はその乗員の悲鳴と共に無残にも闇夜の湖に沈んでゆく。

「ちつ・・・至急救命用の船を浮かべろ！！」

左右共に、全てだ！」

命令された兵達はすぐさま、船の左右に2つずつ付けられた小型の船を繋いでいる縄を取り外し、水面へ落とした。

「残るは一隻のみ。

時間が無いのだ、一気にゆくぞ」

力量を瞬時に測ったセイレーンの狙いはそこだった。

左右の船の救助による、第一戦艦への追い討ちだ。

見る見るうちに、セイレーンを中心に水の刃が無数に現れ、船に向かってきた。

その数、無数。

「神々しき光の要塞よ。」

万物より我を守りたまえっ！！上級防御魔法　シャイニングフ
ォートレス！！」

シャーネルはそう大きく唱えると、シャーネルを中心に光が広がり、
自身乗っている船のみならず沈みゆく2隻の船ごと包み込んだ。

そうでもない救助がままならない所か、被害者が増えてしまう、
瞬時にそう判断したのだ。

しかし、兵士にとってその光は別の意味での救済をもたらしていた。
光は、湖に放り出された兵士でさえもその窮地を忘れる程に輝かし
く美しかった。

いや、窮地であつたからこそ、『希望の光』に見えているのかもしれない。

「っ・・・はあ・・・はあ・・・」

だが、自体はよい事ばかりでは無かつた。

あまりに急な判断ゆえに己の体力を考慮してなかつたらしく、
シャーネルは魔法を唱えた後、息切れをしながら床に座り込んでし
まった。

「シャーネル！大丈夫か！！」

「シャーネル！」

とつさに駆け寄り、しゃがみ込んでシャーネルの体を支えるクレイヴとネイラ。

「・・・あはは・・・ちよつとだけ・・・無理しちゃったかな」

「このような広範囲に強大な防御魔法を使えばそうなるに決まっている。

だが・・・良い判断だった。

そうでもしなければこの船は左右の船よりも酷い状態になっていただろう」

先程の魔法は一度使えば効力が切れるまで残り続ける。

よって未だ輝きを失わず、先程から魔法によって作られた巨大な壁に向かつて、

水の刃が無数に衝突しており、それが弾かれた際の水飛沫が、船の甲板へ雨のように降り注いでいる。

シャーネルの判断が無ければ、船は原型を留めていなかったであろう。

シャーネルはネイラから滅多にない賞賛の言葉を貰うと、

彼女は苦しい表情の中でも『エヘヘ』と少しだけ誇らしげに舌を出して笑った。

「さて・・・と」

ネイラがそう言って、立ち上がった。

雨のように水が降る中、鋭くも涼しい目つきで湖の上に浮かぶ敵を見つめた。

その表情は、城が襲撃されたときのそれに似ていた。

「クレイヴ」

いつもと違うトーンで名前を呼ばれ、ネイラの表情の変化に気が付いたクレイヴも立ち上がった。

「シャーネルも全力だったのだ。

次は・・・わかるな？」

「言われなくても解るさ。

今度は俺達が本気を出す番・・・だろ？」

「流石我が主だ。

シャーネルの努力を無駄にしない為に、全力でセイレーンを倒す」

「ああ、俺もそう思ったよ」

闇夜の湖に浮かぶ光に包まれた一隻の船とそれに対面する一人の女性。

町を守る者と、破壊する者。

その目的もまた様々である。

しかし、どちらが答えなど誰も解ってはいない。

戦いで答えが出る事すら解らない。

湖での戦闘が激しさを増してきた一方。

「カロナリア・・・ごめんね・・・」

町の駅から近い位置にある一軒のレンガ造りの家の二階では、

タナトスがベッドで眠るカロナリアと呼ばれた少女の手を握り、その頬を涙で濡らしていた。。。。

守る者と破壊する者と・・・（後書き）

頭の中に出来ている全体のストーリーの一部分によろやく触れる事が出来ました。

セイレーンの言う強大な力は今後大きく関わってきます。

そして、タナトスもこの戦いに大きく関わっている事は確かです。最後に出てきたカロナリアと言う少女も大きく関わっています。

てか、大体関わってます（爆

それでは。

誓いの大都市

漆黒の闇夜の湖に浮かぶ一隻の戦艦。

それを覆う様に輝く光の結界。

破壊しようと激しく衝突する水の刃。

「何か手はあるか、ネイラ」

クレイヴは湖の上に浮かぶ敵から目を反らさず言う。

その表情は険しく、自分達は明らかに劣勢だと言っ事を自覚しているようだが

臆している様子は無い様だ。

今のところ船は無傷であるが、無数の攻撃により、いずれ結界も消える。

となれば、シャーネルが力を使い果たした今、

クレイヴ達の乗る船も他の二隻と同じく海のもずくである。

「一応考えはある」

自信があるのか、それともいつも通りの調子なのか、ネイラもまた無表情で敵を見つめながら言った。

「なら、それに賭けてみよう」

二人の後ろから、声が聞こえた。
フォルシオである。

「………良いのか？」

クレイヴは少々、驚いた表情で言った。

クレイヴにとってフォルシオは第一印象で『少し頭が固い人物だ』
と言う印象だった。

だから、まだ案すら聞いていないネイラの策を、すんなりと聞き入れてくれた事に対して驚いたのである。

「良いも悪いも、、シャーネル……と言ったか？」

あんたが居なければ、今頃この船は乗員もろとも沈没していた。
だから、俺達はお前達にこの船を託そうと思った、それだけだ。

フォルシオは座り込んでいるシャーネルを見てそう言った後、他の

兵に聞こえるように叫ぶ。

「いいか！」

今から我らは彼らを前面サポートする様に動く！

戦術も彼らに任せる事になる！

この案に異議のある者は！！」

フォルシオの叫びに答える様に他の兵も吠え出した。

「異議なんてありませんっ！」

「その姉ちゃんが頑張ってくれたんだ！

借りは返さないと、水軍の恥だ！」

「全力で答えます！」

シャーネルの頑張りが、この船の乗員の気持ちを。
クレイヴ達もまとめて一つにした瞬間だった。

「よし、ならネイラ聞かせてくれ、その案を」

「分かった、この作戦は少々リスクが伴うが――」

ネイラは小さく頷き、話し出した。

「他の二隻の乗員救出完了しました!!」

兵が船の側面についている梯子を上り終え叫ぶ。

「よし、こちらは準備ができた。
後はそっちだ」

フォルシオがクレイヴ達3人に向けて言った。

「シャーネル、結界が消えるまで後どれくらいだ？」

クレイヴはフォルシオの言葉に頷いた後、シャーネルに目を移し言った。

「後・・・3分って所かな」

シャーネルは何時もの様子で言った。

調子は少し楽になった様だが、まだ表情には疲れが見え戦えるような状況ではない。

「3分か・・・そろそろ、行くか」

クレイヴはそう言うと、先ほど兵士が昇ってきた緊急用の梯子を降りていく。

勿論、真下は湖である。

「うむ、では剣を水面へ投げろ」

ネイラが船から顔を覗かせ、クレイヴが下に降り切った所で言う。すると、ネイラの指示通りクレイヴは背中に背負っている死と黒の2本の剣の内、黒い方を自分の真下に落とす。

この剣は前にも述べたが、素材が特殊なのであるが当然質量は水より圧倒的に重い。

よって浮力でも補えない分の重さで剣は湖へ沈んでいく。

「よし、では魔力を送るぞ」

沈みかけている剣に対し、手から闇の魔力を放つネイラ。すると剣とネイラの手が魔力で繋がれている形となり、剣が水面へ

浮かび上がってきた。

これは以前ヴァンパイアを倒した時に、剣から魔力を放出させた事を思い出して欲しい。

あれの応用であり、剣には一定量の魔力しか蓄えられないが、ネイラの手から送り続ける事により剣から魔力が放出し続ける。それにより、剣と水を魔力で反発させ水に浮かべたのだ。

「よつと……おつ……つとつと」

クレイヴはゆつくりと、剣に乗った。

そう、ネイラが剣を浮かべたのは、それをサーフボードの代わりにする為である。

「乗り心地はどうだ？」

「……良くも無く悪くも無く、だな」

剣の上で苦勞している様子のクレイヴを見ながら、船の上から意地悪そうな笑みを浮かべて話しかけるネイラ。

「そろそろ……3分……か」

しかし余り冗談を言っている暇は無い。

先ほど、シャーネルが時間を宣告してから、間もなく3分が経とうとしていた。

「船を動かしてくれ。」

敵を中心に旋回するように、全速で」

ネイラは横に居るフォルシオに告げた。

「分かった！

奴を中心にして、旋回しつつ全速前進！！」

「結界が消えるよ！
気をつけて！」

船が動くと同時に、シャーネルの声が船に響いた。

眩い光を放っていた結界が、徐々に消えてゆく。

「よし、剣を発進させる。
気をつける」

そして完全に消えると同時に、ネイラは剣と繋がっている右手を思いつきり前方へ突き出した。
すると、クレイヴの乗る剣は敵の方向へと急発進する。

「うおっ！！」

ネイラッ！！

加減をしろっ……って、もう船から離れてるか……」

クレイヴがネイラの雑さ加減に文句を言おうとするも、すでに船も剣も別方向へ動き出しているので、それを諦め前方を見る。

一方船は動き出して、水の刃を幾つか回避するも、なおいくつかの刃が船を襲うとしていた。

「今度は先ほどのようにいかん」

ネイラは先ほどの失態を思い返し、真剣な表情で剣を操る右手とは別に、左手を水の刃へと向ける。

すると、左手から闇の魔力を発射し刃を打ち消した。
船が止まっている状態では、左手一本での対処は不可能だが、

旋回している限り、向かってくる刃は少なくなる。

それを狙つての船の動きであるが、その分右手のコントロールは難しくなる。

だが、それを難なくコントロールしているネイラの器用さには、剣に乗っているクレイヴ自身も感じていた。

「うおっと・・・バランスは悪いけど、一応俺に向かってくる攻撃は全部回避出来てるな。。」

「たく・・・仲間ながら、呆れた器用さだ・・・」

独り言を言う余裕すら見られるクレイヴ。

すでに飛び散る水飛沫で、服だけでなく前進がびしょぬれであるが、傷はひとつも見られない。

敵までの距離はすでに10 m程の所まで来ていた。

「よしっ・・・」

クレイヴは右手に白い方の剣を取った。

「シャーネルが攻撃できない分、この剣で思いっきり攻撃してやると思いますか」

クレイヴがそう呟いている頃には、敵との距離はもう5 m程。

「よっ……」

クレイヴが右手を上げると、船の上のネイラも右手を挙げる。すると、剣は水面から掘り出されるようにしてクレイヴごと宙に上がる。

これで、セイレーンとクレイヴの視線が並んだ。

「まずは一撃」

クレイヴは高速の中、タイミングよく剣を叩きつける
すると、セイレーンの周りに円形の結界が現れた。

『愚かな、その様な攻撃では結界を崩す事は出来ぬぞ』

「だが、さっきの大砲とこの打撃で限界のはずだ」

クレイヴはセイレーンの言葉に、湖に落ちながら笑って答える。

「はっ！」

ネイラが空いた右腕でセイレーンへ魔法を放つ。

船から黒色の魔力が一直線でセイレーンに向かう、そして。。

『パライイーン!!!!』

いよいよ結界が割れた。

しかし、結界が割れたのみでセイレーンには傷一つ無い。

ならばまた攻撃をすれば良いのだが、ネイラはその場に座り込んでしまった。

剣に魔力を送り続けながらの、敵の攻撃の相殺。

さらに最後の一撃。

それにより、ネイラもまた魔力を使い果たしてしまったのである。

「ほう・・・結界を消した事は認めよう、だがもう攻撃はできまい」

笑みを浮かべながら、手に魔力を溜め、残った船に狙いを定める。

「いや、まだ終わってない」

クレイヴが湖に浮かびながら、小さく言った。

「砲撃用意っ！！！！！！
全弾発射！！！！」

船から砲弾が発射される。

「なっ・・・・・・・・」

セイレーンの表情が驚愕へと変わった直後。

『ドゴオオオン……!』

発射された砲弾は轟音と共に爆発した。

着弾数は8発中、3発だがセイレーンは結界を張っていない無防備な状態。

爆発した煙の中からセイレーンが光を失いつつ落ちてゆく。
そして力無いまま湖へ着水し水飛沫を上げた。

クレイヴは船の上からの歓喜の声を背に受けつつ、すぐさま湖に仰向けで浮かぶセイレーンの元へと泳ぐ。

セイレーンの傍に寄ると、クレイヴは少し安心した様な表情を見せた。

所々服が破れており、体にも生々しい焼け跡が残っているが、まだ意識が有るのだ。

事の真相が分からなくなってしまったのは、これからの動き方も分からない

くなる。

それを心配する必要が無くなったからである。

セイレーンは、クレイヴに気が付くと無防備に仰向けで浮かんだまま「ふふっ」と小さく微笑んだ。

それに答える様に、クレイヴも微笑を浮かべつつ話し出す。

「流石に精霊と言えども、生身で砲弾は堪えるみたいだな」

「まさか人間に敗れようとは、考えてもいなかった・・・。

さて・・・私の命は残り長くは無い様だ・・・何か聞きたい事があるのだろうか?」

セイレーンは首を少し曲げて、クレイヴの方を見た。

「ああ、ごく単純な話さ。

さっきあんた言ったよな、この国を破壊しなければ世界は滅びると」

「先程言った事に偽りは無い。

今、此处を破壊せねば世界は破滅へと向かう」

「その理由だよ。

さっき言ってた強大な力とは何なのかって事だ」

「それも先程言ったがその存在を知ったのは、つい先程の事だ」

クレイヴの表情が強張る。

「聞いた？誰にだ？」

「魔族。」

奴は名をネクロマンサーと言っていた」

「またネクロマンサーか……一体何を……」

クレイヴは小さく呟いた。

『また』と言うのはネクロマンサーの名を聞くのは今ので二回目。

一回目は旅へ出る前のケルベロスに姿を変えた男の口から、同じ魔族の名を聞いたからである。

とすれば、彼女もまたネクロマンサーの手によって、魔族に姿を変えた者の一人という事になる。

クレイヴは自らに悔しさの感情が込み上げて来るのが分かった。

魔族の犠牲者をまた一人自分の手で葬らざるを得なくなってしまう

た事に対してだ。

無論、彼ではどうしようもなかった事は事実であるが、それを理解してもなお悔しさは収まらなかった。

「強大な力自体は我も数年ほど前から感じてはいたのだ。

だが我は契約主と共にこの地に眠りついた身、故にどうする事も出来ぬまま今日を迎えたのだ」

セイレーンは淡々と語りだした。

夜空を見上げながら、淡々と。

「だが、先程の事だ。

突然奴の声が我の中で響いてきた。

『我が名はネクロマンサー。』

セイレーンよ、今この国で強大な力が目覚めようとしている。

これを止めなければ、全世界が破滅へと向かうであろう。

破滅には破滅を。

魔族の力より生を得て、自ら救済を与えるのだ』と。

我はそれに従うしか無かったのだ、強大な力の存在、それも確信へと変わっていき。。。

魔族として、自らこの国を破壊すると奴と契約を交わした」

つまり、セイレーンは町を破壊し、強大な力を破壊すべく魔族から生を貰い受けたのである。

シャーネルが初めてセイレーンを見た時に言った『精霊とは少し違う』とはこの事だったのだ。

そして揺れの原因も、湖の深くで眠っていたセイレーンが復活した際の

衝撃だと言っ事も理解できた。

「・・・・・・・・」

クレイヴは無言でセイレーンの話を聞いていた。

その表情はセイレーンの悲劇を哀れんでいる様にも見えるが、セイレーンはそれを見てまた少し笑った。

「・・・・・・・・その様な表情をするな。」

魔族に力を与えられた結果、この有様では格好も付かないが・・・・
・妙に清々しいのだ。

お主達に負けた事で別の方法が在るのではないかと、

俄かにだがそう感じ、人間たちの力の結束に委ねようと思えた。

さらに魔族の手に踊らされ・・・・我が契約主『ラーゴ』との思い出の地を滅ばさずに済んだのだ」

しかし、その様に微笑を浮かべながら力強く言うセイレーンの目にも。

うつすらと目に涙が浮かんできていた。

「ただ――」

セイレーンが夜空の星を見つめながら、いや、遠い日の思い出を見つめているかの様に呟いた。

遠い日の。

『セイレーン、今から俺とお前でこの大穴に湖を作って町を作ろう
と思う！』

『何故急にその様な事を？』

『さあな、何となく、気まぐれってやつか』

『ラーゴらしいと言えばらしいが、雨を降らすのは我の仕事である
うっ..』

湖に仰向けで浮かぶセイレーンの体が、黒色の光を帯びてゆく。

クレイヴはこの光景を何度も目にした事がある。

魔族が果てる時の光と同じなのだ。

故にクレイヴもこれからセイレーンの身に何が起こるかも、理解する事は容易である。

「——ただ、一つだけ——」

遠い日の思い出。

『・・・凄い雨だな・・・流石セイレーン、俺の相棒だ！

美人で強くて賢いだけじゃなくて、こんな量の雨を降らせる事が出来るなんて！

これならきっと、どデカイ湖が出来るっ！』

『・・・・・・・・・・・』

『ん・・・どうした・・・セイレーン？

って、おいっ！！フラフラじゃないか！？

無理だけはするなって、言っただろっ！！！！』

「ただ、一つだけ後悔するなら」

涙がセイレーンの頬を伝い、頬に付く水滴を含みつつ湖へ落ちた。

遠い日の思い出を思い返しながら。。。

『見ろ、セイレーン！

じゃじゃ〜ん。

これが町の家の第一号だっ！！』

『・・・ぼろぼろだな』

『うるさいっ、文句言っなっ！！』

『これでも大雨の中、頑張ったんだ！』

『ラーゴよ、我は今の今まで雨を降らし続け、疲れきっている。

それなのに、このような木製のボロ屋敷しか用意出来ないとは・

』

『見ろっ！！セイレーンッ！！』

『・・・今度は何だ？』

『小さいけど植物が生えてるっ！！』

この間までここは荒地だったのに！！』

これはきつと数千年後辺り、この町は俺達の作った湖を中心に、
凄い発展をしているに違いないっ！！』

『湖を作ったのは我の力。』

それにその様な自信が何処から出てくるのだ・・・。

こんなちっぽけなボロ小屋から大都市になどなる訳が――』

『なら、賭けだっ！！』

俺は人間だから長くは生きれないけどな、死んでも此処でこの場
所を見守り続ける！

どっちが正しいか、見続けるのさ！

だからセイレーン！お前もこの場所を絶対に離れるなよ、約束だ
！』

『分かった』

『あと、町の名前考えなきゃな・・・そうだな。

セイレーンがこの湖を作ったんだから・・・『シレーナ』ってのはどうだ？』

『シレーナ・・・悪くない名だ』

「——ラーゴと共に・・・この地で・・・

再び眠りに付く事が・・・出来ない・・・と・・・言う事・・・か・・・。

すまない・・・ラーゴ・・・約束を・・・守れず・・・に・・・

「

セイレーンは煌くシレーナの大都市を見つめながら、黒い光に包まれ消えていった。。。。

それを見送ると同時に、クレイヴは齒を食いしぼりながら、水面を強く叩く。

魔族が消えた先に向かう場所は、未だ知るものはいない。

誓いの大都市（後書き）

久しぶりかどうか分かりませんが、鬱回です。

セイレーンの『町が破壊されるなら自らの手で』と言つ気持ちだが彼女を魔族の力に染めさせました。

しかし生を受けた事により、

契約主の言つた大都市を肉眼で見る事も出来ました。

それも、生を貰い受けた理由の一つでしょう。

ただ、それを伝えたい相手と同じ場所にいる事は出来ません。それが魔族の力を得た唯一の代償でした。

さて、次から少しずつコメディ要素も挟みつつやっていきたいのでぜひともご覧になってください。
では。

虚飾の死神

「成る程・・・ではセイレーンはネクロマンサーと言う魔族に、国の脅威の存在を仄めかされあの様な行動に出たと」

唯一沈まなかった第一戦艦の一室で、クレイヴとフォルシオが壁にもたれ掛かって話している。

戦闘の後、湖から引き上げられたクレイヴがセイレーンの話を伝えようとした所、フォルシオは途中で話を切って誰もいないこの部屋へクレイヴを招いた。

一般の兵はセイレーンの言葉は戯言であると信じている為、セイレーンの話を耳に入れば混乱するに違いないとの判断だ。

魔力を消耗したネイラとシャーネルは別室で休んでいる。
岸へ付くまでの数分の間だけとなってしまうが、休まないよりはマシである。

「ああ、そう言っていた。

彼女自身もまた、強大な力をこの国の中に感じると」

「しかし・・・その話を信じるにしても、問題が多すぎる。
まずは、市民がこの国を襲った者の言う事を信じるかどうか。
例えば市民が理解したとしても、探し出す当てが無い。

精霊のお二方にも感じ取れないような力を、この大都市から我々人間が探し当てるのは不可能だ」

首を横に振って、俯くフォルシオ。
こればかりはどうし様も無いと言った表情を浮かべる。

「その存在の登場を待つしかない・・・か」

「悔しいが、その様になってしまふな。。」

民間人を避難させようにも、大きな国で無いと受け入れられないし、

その中に脅威の可能性があるのだとしたら、それを受け入れる国も無い。

どの国も自分たちが最優先だからな。

結界の外は魔族の存在が脅威、本末転倒。

理由を話さなければ問題外。

万事休すだ」

フォルシオは大きく溜息をついた。

「だが・・・果たして本当に脅威の存在なのか・・・」

クレイヴはフォルシオのその姿を見て言った。

「どういう事だ？」

「それが町を破壊する存在なのだとしたら、わざわざネクロマンサーがそれを阻止するはずは無い。

こう言っちゃ悪いが、むしろ人間達が発展させた大都市なんてのは破壊された方が良く、そう考えるはずだ」

「確かに」

クレイヴの言葉に考え深そうに頷くフォルシオ。

「だからと言って、人間に害が無いとは言いつても切れないが、それは魔族にとっても大きな脅威。

そう考えるのが妥当だろうな」

「・・・人間にも魔族にも脅威の存在か。

私たちには想像もつかないが、その様な存在がこの国に現れたのなら全力で我々がこの国を守る。
今はそれしか無い様だな」

「ああ」

「隊長、船が到着しました」

2、3回ドアがノックされた後、ドアが開き一人の兵士がそう言った。

船が元あった倉庫内へ到着したのだ。

「ああ、分かった。

皆に伝えてくれ、今日は解散だ。

各自、家族に自らの無事を伝えるように」

その声を聞いたフォルシオは難しい表情を解き、柔らかな表情でそう言った。

その言葉を聞いた兵士は強く返事をする、ゆっくりとドアを閉め去っていった。

「さあ、分からね事に時間を費やしては先へ進めない。

クレイヴとその精霊たちには借りが出来た、列車が発車するまで私の家でゆっくりすると良い。

出来る限りのおもてなしをしよう」

「ああ、すまない。

それじゃ、お言葉に甘えとするか」

二人は小さく笑うと、その部屋を後にした。

クレイヴ達三人は駅から降りて、東へ歩いて最初の酒場に着いたが、フォルシオの家は駅から西側に位置している。

歩いての距離は船の船舶している所から遠くは無く、行きと同じくらいの距離だ。

他の家とはなんら変わらないレンガ造りの2階建ての家であるが、揺れが少なかった駅の近くであるせいか、被害は最小限度に留まっている。

「はぁ・・・はぁ・・・少しは自分の力で歩いてくれよ！」

家の前に着いたクレイヴは額に少量の汗を浮かべつつ言った。

その様な状態になるのも無理は無い、船に降りてからここまでネイラとシャーネル双方に肩を貸して歩いてきたのだ。

左にネイラ、右にシャーネルという格好だが、両手に花と言う格好の良い状態で無い事は確かだ。

「しょうがないでしょ、疲れてるからフラフラなのっ」

「我々の頑張りを見てよくその様な事が言えるものだ。
我が主ながら呆れる」

シャーネル、ネイラの順に涼しい顔で答える。

対照的にクレイヴはヒートアップするのは当然の事であり、二人を支えている肩をブルブルと震わせた。

「そんだけ言える元気があれば歩けるだろっ！
表情も余裕たっぷりじゃないか！？」

少し肩を貸す程度なら構わないとは言ったけどな、全体重乗せても大丈夫なんて言っていないだろ!？」

「まだ私たちが足を着けているだけでも良いと思え。てつきり二人同時におんぶをしてくれるかと思っていたぞ」

「そうだ、そうだ」

「お前らにとつての俺はどんな超人なんだよ!？」

「超人などではない。

たしか、ここに着く一つ前の駅で私の事を『意外と軽い』と言っていたな。

その言葉に嘘偽りが無ければ・・・」

「うつ・・・」

自分自身が言った事をそのまま言われては返しようが無い。クレイヴは顔を引きつらせ言葉を詰まらせた。

「はは・・・はははは・・・今日の所は俺の負けにしておく事にするか。

どちらにせよ目的地には着いたんだ、気にしない事にしよう」

「調子の良い奴」

分が悪くなり開き直ったクレイヴを横目で見つ、シャーネルとネイラは呟いた。

「・・・オホン・・・喧嘩は終わったか？」

わざとらしく咳払いをして、3人に尋ねるフォルシオ。
会話を夢中になっていた三人は、扉に手を掛けたまま固まっている
彼に気が付かなかったのだ。

「あ・・・ああ。」

悪い」

「いや、気にしていない。

喧嘩する程何とやら、と言うからなその絆あつての先ほどの勝利だ。

さあ、入ってくれ」

3人を招く扉を開けるフォルシオ。

「・・・気にしてないなら、あんなわざとらしい咳払いなんてしない――」

「さあ入ってくれ」

「は、はいっ」

ボソツとクレイヴの耳元で呟くシャーネルの言葉を遮るように、先程よりも強い口調で言い放つフォルシオ。
シャーネルは告げ口が聞こえているかも分からないのに、すっときような声を上げる。

「お邪魔します」

「・・・」

「お邪魔します」

家に入ると木製の机とイスが4つ、他にはダンス等のみが置いてある簡素な部屋。

奥にも部屋があるようで扉が一つ。

この家は2階建てであつたので、きっと奥の部屋に階段があるのだろう。

そして部屋のランプはついたままだ。

船の上でのフォルシオが家族の話をしていたので、恐らく奥と2階に家族の誰かがいるのだろう。

「おゝい、今帰ったぞ」

フォルシオが扉を閉めると奥の部屋に向かって叫んだ。
すると、すぐに奥の扉が開きそこから一人の女性が出てきた。
その表情は安堵そのもので目には涙を浮かべていた。

「あなた！・・・よかった。。」

湖の方から大きな音がしてたから・・・心配で」

「はは・・・確かに今回の戦いは厳しかったが・・・流石に妻と娘を残して先には逝けないさ」

そう言つてフォルシオは女性の肩を優しく抱き寄せる。

「そうは言つても・・・心配だったんだから・・・」

女性は涙を拭いて、フォルシオから離れると後ろの3人に気が付いたようので、顔を少し赤らめた。

「あら・・・お客様？」

すみません気が付かない上に、お恥ずかしい所を・・・」

「いや、お構いなく」

「彼はデイルモートから来たクレイヴ。

そして、両隣にいる女性が彼と契約している精霊の二人だ。
黒い髪の女性がネイラ、銀髪の女性がシャーネル。

3人ともこの国民の命の恩人だ。

彼らがいなければ、俺達は戦いに負けていたしこの国は壊滅していた」

「まあ・・・何とお礼を言ったら良いか」

おっとりした口調で話す女性。

見た目も優しそうでゆったりとした印象だ。

「紹介しよう妻のタリスだ」

そう言つて3人に目を向けるフォルシオ。

「よろしくお願いしますね」

ゆつくりとお辞儀をするタリスに対し、頭を少し下げて対応するクレイヴ。

「それじゃクレイヴ。」

二人を奥の寝室へ運ぼう」

フォルシオは本来の目的を思い出したかのように、奥の部屋へとクレイヴを案内する。

列車が治るまで彼女達を休ませる場所を提供する、それが家に招いた理由なのだ。

尤も彼女らにそれが必要かどうかは分からないが。

「はい、どおぞ」

「どうも」

二人を寢室のベッドに寝かしたクレイヴは、
ようやく一息つけるとばかりにどかっとイスに座り、タリスが机に
置いた暖かい紅茶が入ったティーカップを手取る。

「それにしても精霊さんなんて始めてみましたよ。」

本当にお綺麗なんですね」

タリスはクレイヴの正面のイスに座ると、ニコニコしながら話し出
した。

「……そうかもしれないが、性格には少し難が……」

「クシュン！」

隣の部屋からくしゃみが聞こえてきた。
恐らくネイラだ。

「そおなんですか？」

「はは・・・」

このおとりした雰囲気はどうも苦手なのか、クレイヴは苦笑いしつつ横に座っているフォルシオをチラリと見る。

「オホン・・・それでタリス。

いつも俺が帰ってくる時は、ここに座って待ってるのに今日はどうしたんだ？」

戦場に出たフォルシオが無事に帰ってくるかどうか心配で、タリスはいつも家に入ったらすぐに夫が確認できるようにここで待っているのだろう。

しかし、今日は違った。

奥の部屋から彼女は出てきたのだ。

「あゝ、そう言えば、半年ぶりにタナトスさんが家に来たのよ。確か列車が止まってしまったとかで、たまたま。。。」

それで、彼女の様子を二階へ見に行ってた時にちょうど・・・」

「タナトスッ!？」

聞き覚えのある名前がタリスの口から出たことに対し、口の中の紅茶を飲み込むためにワンテンが遅れて反応するクレイヴ。

「何だ？タナトスさんと知り合いか？」

フォルシオが不思議そうに尋ねる。

「知り合いって言うか、付いてきてるだけなんだが。」

まあでも、タナトスと一緒に列車に乗っていたのは確かだ」

「まあ、なんて巡り合わせでしょう！

私たちの命の恩人がタナトスさんと知り合いだなんて・・・呼んで来ますね」

「あっ・・・ちよつと・・・」

クレイヴはどうでも良いのだが、勝手に舞い上がってしまったタリスを止める事もできず、言葉半ばで黙り込む。

「悪いな、タリスはいつもあんな感じなんだ。

結構耳に障ることがあるかもしれんが、我慢してくれ。

あれでも大事な家族だ」

「いや、それは気にしてない。」

五月蠅いのならいつも近くにいるしな」

「ヘックション！」

隣の部屋からくしゃみが聞こえてきた。
恐らくシャーネルだろう。

「だけどタナトスは何でこの家に？」

「ああ、まあこれもたまたまなのだが・・・」

3年前のある日の事だ。

私とタリス、そして娘のカロナリアは町の中心部へ出かけていた。
カロナリアは生まれつき体が弱く、病院へ通うのが日課であった。
その帰りに町の市場に寄った時の話だ。

普段は体が弱いカロナリアの身を思っ、て、人通りの多い所へは出
けないのだが、
この日はカロナリアがどうしても言うから帰りに少しだけ市場に
寄る事にしたのだ。

「見て、果物が沢山あるよっ」

普段は家から出て遊ぶ事が出来ないカロナリアは大はしゃぎだった。
思えば娘を大事にするあまりに、外の世界をあまり見せていなかった
様な気がする。

「んっ・・・見た事も無い食べ物があるな」

娘の笑顔を見ると、外に連れてくるのもいい事だと思った。
良い勉強になるし、楽しい事を見つけてくれれば彼女にとって良い
事だろう。

「あっ！あつちにも何かあるよっ！」

娘は妻の元から離れ走り出す。

「こらこら、そんな急ぐと危ないわよ」

「大丈夫っ・・・あっ！！」

妻の注意に答えようと振り向こうとしたその時。

カロナリアは石畳の凹凸に足を取られ、後ろから倒れていった。

「危ないっ!!!」

俺は叫んだが、止まるはずは無い。

カロナリアの体は重力に従って、石畳へ倒れこんでゆく。

数人が叫んだ俺の方を見たが、そんな事はどうでも良い。
誰かカロナリアの体を支えてくれ、そう思っただけだった。

「・・・あつ・・・」

思いが通じたのか、次の瞬間聞こえてきたのは、娘の泣き叫ぶ声ではなかった。

呆気にとられた様な声。

「大丈夫？」

私の祈りが通じたのか、優しい笑みを浮かべた一人の女性が娘の体を後ろから支えていた。

「それがタナトスさんだった訳だ。

お礼に家に招待した所、娘の体を心配して定期的にここに通って
くれている。

お淑やかで優しい良い女性だ。

娘もすっかり彼女に懐いてしまって、唯一の友達だとも言うてい
る」

「成る程・・・」

納得したような口ぶりだが、クレイヴの内心には疑問点が浮かん
だ。タナトスはその外見故に、女性と思われるいても仕方ない。

しかし、もう3年も通っているのに自分が男性であると明かしてい
ない点。

もう一つは彼女の性格だ。

クレイヴ自身、タナトスと会って間もないがシャーネルの話を聞く
限り、

決してお淑やかな女性とは思えないからだ。

昔からの知り合い以外はその様に振舞っているのだろうか。

だとすれば何故その様に振舞う必要があるのか。

もしかしたら人違いではなからうか、そんな事さえ思ってしまう。

「クレイヴさん。

連れてきましたよ」

タリスの言葉に思考を中断し、声の方向を見る。

「「あ．．．やっぱり」」

彼女の後ろには確かに、あのタナトスがいた。

タナトスも人違いではないかと思っていたのか、同じ台詞が同時に口からでた。

「ちょっと失礼しますね」

タナトスはそう言って一礼すると、クレイヴの手を掴んで玄関から外に出た。

「タナトスさん、何か様子がおかしくなかったか？」

「そうねえ。。」

まあ若い男女だし色々あるんじゃないかしら」

その行動を見て、勝手に妄想を膨らます夫婦であった。

「おいおい、何だよ急に・・・」

外に出てクレイヴを近くの人気の無い路肩に引っ張っていった所で、タナトスは振り向いて溜息をついた。

「あのさぁ・・・来るなら来るって言ってくれないと、困っちゃうつしょ・・・」

タナトスは艶のある長い髪を触りながら言った。

「そう言われても、こつちも急だったんだよ。」

「フォルシオが軍人だって事は？」

「知ってるけど」

「なら話が早い。」

「ちよつと湖で一騒動あつてな。」

「精霊が魔族の力を借りてこの国を滅ぼす所だったんだ」

「まゝた急におつかない話に首突っ込んでんじゃってんね」

「くすくす笑いながらタナトスは言った。」

「ああ、それで俺達の力を貸そうとして、その船の部隊の隊長が彼だったわけだ。」

「んでその戦闘で疲れた二人を休ませてくれるって言っから、お言葉に甘えたただけだ」

「あの二人が疲れるって事は結構な戦闘だったっぽいねえ。」

音も聞こえてたから何事かと思ったけどさあ、そういうワケねえ」

「ああ、お前も居てくれれば助かったんだけどな」

「いや、俺はパスパス。」

戦うのって嫌いなんだよねえ」

片手を振りながら笑うタナトス。

どうやら神と言っても戦闘が出来ないものが居る様である。

「ん？そうなのか？」

「そそ、で俺は一つ言いたい事があるんだけど、いいっすかあ」
てかその為に連れてきたんだけどさ」

タナトスは小さく拳手をしてクレイヴに聞く。

「相変わらず軽いな……どぞ」

タナトスの調子にまだ慣れていないのか、頭をかく。

「あの家ではさ、俺が男だって事をバラさないで欲しいんだよね。
あと勿論、人間じゃないって事もさ」

「ああそれは俺も疑問に思ってたよ。
まるでお前の事を凄く良く出来た女性みたいに語ってたからな」

「あのねえ……普段そんなだらしく見えるワケ？」

まるで今までそう見られていなかった様に肩を落とすタナトス。

「どこから見たってそうだろ……」

「まあ確かに作ってる部分もあるから、良いとするけどさあ、……理由は長くなっちゃうから列車に戻ってからって事で。

兎に角、今はさっきの約束守ってよ。

あと普段の話し方もコレじゃないから、気をつけて」

「やっぱり、自覚あるんじゃないか……分かったよ」

「オツケーイ、コレで心配は無くなったあ。

さっき家の中であの二人には、頭の中で言っておいたからねえ。

さっさと戻んよ、遅れると心配されるからさあ」

色々理解できない点は多く残るが、今聞いても答えてくれる気配は無いので、

気を取り直して、クレイヴはタナトスと一緒に家に帰ることにした。

タナトスがあ家族に素性を話せない理由とは何なのだろうか。

時刻は夜明け。

薄暗い町を朝日がゆつくりと照らすうとしていた。

虚飾の死神（後書き）

タナトスが再登場。

タナトスはどうかやら多くの事をあの家族に隠している様です。
その意味はまた今後明らかにされます。

そして以前少しありましたが、

タナトスが眠るカロナリアの横で泣いているシーン。

その時の少女も初登場。

病弱な娘なのですが、これも結構重要だったり。。

次回もお楽しみに！！

少女と旅人達

シレーナの大都市を朝日が照らす。

壮絶な戦いから一夜明け、国中が壊れた部分の修復作業に取り掛かるうとしている。

一方タナトスに様々な念を押され、フォルシオの家に戻ったクレイヴは、自らのタナトスとの関係について話している所だ。

帰った時間が時間だったので、どうせなら列車の出発まで話をしようという事になったのだ。

もちろんタナトスもフォルシオの妻タリスも話の輪に加わっているが、神様2人は以前隣の部屋で熟睡中である。

「なるほど、それでクレイヴはタナトスさんに旅の途中で知り合った訳か」

「そんな物だな。」

どちらかと言えば、シャーネルと相性が良いみたいだが」

だがタナトスに念を押された以上、全てをフォルシオに話す訳にはいかない。

シャーネルとネイラとタナトスは神様で、天界にいた頃からの知り合いだと言っではいけないのだ。

尤もその事に関しては一般人には毛頭話す気はないクレイヴだが。

「目的地も一緒ですからね。
楽しい旅になって良かったです。
ね？」

クレイヴがここまでで見た事の無い笑顔を首を傾げて放つタナトス。
本性を知っているクレイヴにとって、この笑顔を向けられて呆れ顔を抑制するのが難儀な程だ。
よってクレイヴも無理やりぎこちない笑顔を混ぜ、相槌なんかを打っている。

「ははは・・・俺こそ楽しませてもらってるよ。」

こ、こんな美人と・・・た、旅がデキテ、アアコウエイダナ・・・」

言葉の後半部分が気持ちの乗らなさ故にカタコトになる。

『ガシッ』

「ッ!？」

隣に座っているタナトスに思いっきり足を踏まれるクレイヴ。

「ん? どうかしたのか？」

急に表情を歪ませたクレイヴを見て、フォルシオが怪訝そうに言う。

「い、いや。」

戦った時に何処か打ったんだろ。
ちよつと、足が痛くなっただけだ」

「あらあゝそれは大変・・・。
近くに良いお医者様がいますから、紹介しましょうか？」

必死に誤魔化そうとするクレイヴに対して、心配そうに言うタリス。

「いや、お構いなく。」

本当に少しだけ痛む位だから・・・ははは」

「そお・・・ですか？」

「つたく・・・こつちは必死に付き合ってやってるのに・・・。
本気で踏むなつての・・・この性格詐欺が・・・」

『ガシッ！！』

「っ！？」

ボソツと誰にも聞こえないくらいの小声で言った愚痴にも関わらず、
間髪いれず足を踏みつけるタナトス。
死神の地獄耳、恐ろしや。

それに反応するクレイヴを見て、夫婦2人はまた不思議そうに彼を
見るが、そこはまた愛想笑いでやり過ごしたクレイヴであった。

そんな風にぎこちないやり取りを続ける事一時間。

朝日もすっかり昇った時間帯に、シレーナ中に音声が響き渡った。

『昨夜破損した列車の修復作業が終了いたしました。
発射時刻は今から2時間後とさせていただきます。
ご乗車になさっていたお客様は遅れないよう、よろしくお願いいたします』

「お、案外早かったな。

良かったじゃないか、2人とも」

フォルシオが放送を聴いて、クレイヴとタナトスに笑顔で話しかける。

「ああ、そうだな。

これでようやく出発できるよ」

本来の目的の為にいち早くシレーナから発ちたかったクレイヴにと
って朗報だ。

思わずクレイヴも笑みがこぼれる。

しかし、タナトスは違った。

「・・・私、もう一回カロナリアに会って来ます。
カロナリアも起きたかもしれませんから・・・」

タナトスは悲しげな表情で、席を立つと再び寝室を通り二階へと上
がって行った。

（カロナリア・・・フォルシオの娘の名だ）

クレイヴが不思議に思いその姿を見つめていると、フォルシオがク
レイヴを見て話し出した。

「・・・きつと心配なんだ」

「心配？」

年に何回も会いに着てるんだろ。

帰りはここには止まらないから無理かもしれないが、また会いに来れば良いだろう？」

確かに幾ら体が弱いといっても、そこまで気遣うのはオーバーでは無いか。

人によつてはそうでは無いかもしれないが、
タナトスの本性を知っているクレイヴにとっては、俄かには信じがたい行為なのだ。

「先程話したが、娘は体が生まれつき弱くてな。。。

実の所すでに医者には余命すら宣告されてるんだ・・・それで今年がその年なんだよ」

フォルシオは俯きながら、弱弱しく語りだした。

「・・・って事はタナトスもその事を・・・」

「ああ、知つてるとも。

最初に出会つて彼女を家に招待して娘と打ち解けた時、私と妻から話したんだ。

だから娘の体を心配して、定期的に通つてくれてるんだ」

「それで、夜中からこの家に・・・」

「きっと彼女はまるで我が子の様に娘を心配してくれてるのさ。
そして今回が最後になるかもしれないという事も分かっている」

「彼女、昨日は一晩中カロナリアの手を握っていたんですよ・・・」

タリスは目に涙を滲ませながら語った。

「・・・すまない」

クレイヴはタリスの涙を見て、

自分が2人の気持ちを考えずに聞いてしまっていた事に対して後悔をした。

懺悔の意味も込め頭を深く下げる。

「いや、クレイヴが謝る事は無い。

別に隠していた事でもないし、事実は事実。

・・・そうだ、クレイヴも是非娘に会ってくれ。

外に殆ど出た事が無いから、色んな話を聞かせてやってくれな
いか？」

「俺で良ければ是非とも会わせてくれ。

シャーネルとネイラも起こしてさ、楽しい話を時間の限り話すよ」

「それは良かった。

だがあの2人を起こしても大丈夫なのか？」

「そこは任せくれけ。

あの2人、根は良い奴等だからさ、絶対会ってくれるよ」

そう言つてクレイヴはシャーネルとネイラを叩き起こし、カロナリアの事を話した。

シャーネルは二つ返事で会いたいとの事だったが、ネイラはいつも通りの調子だ。

だが、きつと心に響くものがあつたのか、決して「嫌だ」とか「まだ眠りたい」等という事は無かつた。

クレイヴの言つとおり、二人とも根はとても良い性格なのだ。

タリスが先頭に立つて、一行は木製の狭い階段を登つてゆく。そして階段の突き当たりに扉が一つ。

構造的に寝室からぐるりとUターンして昇り、入り口の部屋の上の部屋という感じだろう。

「二人とも、入るわよ」

ドアを軽くノックして、扉を開けるタリス。

木製の扉からタリス、フォルシオ、クレイヴ、シャーネル、ネイラの順に部屋に流れ込む様に入室した。

部屋の家具は窓際に机が一つ、向かいに物置用の木製の棚、その隣にベッドという簡素な造り。

ベッドの隣にはタナトス、ベッドには起き上がって座っている少女がいた。

少女はとても華奢だが、白い肌に大きな瞳、そして金色の綺麗な髪が似合うまるで人形の様な子だ。

少女はいきなり入ってきた人を見て、タナトスに聞いた。

「この人達が、お姉ちゃんのお友達？」

「うん、そう。

一緒にここまで着たのよ、列車に乗って遠くの国から来てるんだって」

どうやらタナトスはこの事態を予測していた様で、ちょうどカロナリアに話していた所の様だ。

「へえ、遠くの国か・・・」

見た事も無い地を思い描いているのだろっ、カロナリアは瞳を輝かせて言った。

「おはよう、カロナリア」

シャーネルはタナトスの横に座ると、目線をカロナリアに合わせて笑顔で言った。

「おはよう・・・えっと・・・」

「あ、私ねシャーネルって言うの。」

それであっちの無愛想な男の人がクレイヴ、女の人がネイラ」

「「無愛想は余計だ」」

紹介のされ方にムツとなる二人であったが、カロナリアの表情は逆に笑顔になった。

「あはは、お姉ちゃん面白いねっ。」

ねえねえ、遠くの国の話、聞かせて欲しいなあ」

タナトスも嬉しそうなカロナリアを見て、シャーネルと顔を合わせて笑顔になる。

「うん、いいよ。」

そうだなあ、まずはね、大きなお城の話から――」

「・・・流石、といった所だな」

少女と楽しげに話すシャーネルを見て、ネイラがクレイヴに対して
呟いた。

「だな。」

底抜けの明るさだけは負けないからな、あいつは」

クレイヴも腕組をしながら柔らかな表情で楽しそうに話す3人を見て
頷いた。

「だがタナトスも同じ様に笑顔でカロナリアと接しているのは驚き
だ。

何時もより自然な表情の様に思える」

そこでクレイヴはネイラの言葉に疑問を持つ。

クレイヴにとってタナトスのこの振る舞いは、いわば虚飾。

外面を良くしようとしているだけの行為に見えていた為、どうしても
も自然な風には見る事が出来なかったのである。

だが、ネイラにとってはタナトスの表情はごく自然。

むしろ、いつもの方が偽りを演じているのだと言っただ。

「それはいつもの方が不自然って事か？」

「飽くまでも私の見解上での話だ。

シャーネルは人を疑う事を知らない為に、気が付いていない様だが。。。

タナトスの何時もの振る舞いは、天界で初めて出会った時から何処か不自然だった。

表情も曇りがある様な気がしていて、私も見ていてどうも居心地が悪かったのだ」

タナトスから目を離さずに淡々と語るネイラ。

「・・・それであいつが苦手だったのか・・・」

クレイヴの言葉に対して、小さく頷くネイラ。

シュヴァイナーの館で、ネイラはタナトスが苦手だと言っていた。

その時はあの軽い性格が苦手なのだと思っていたが、

本当はタナトスの自らを隠すような振る舞いを見るのが、彼女にとって苦痛だったのだ。

「何の為にその様にしているかは知らないが・・・今は曇りが全く無い。

ずっとあの様にしていてくれれば良いのだが、奴にも都合がある。私達が解決できる問題でも無いだろう」

「冷めてるな・・・どうにかして解決してやろうとは思わないのか？」

その言葉に反応して、ネイラは鋭い眼差しでクレイヴの方向を見る。クレイヴはその瞳に気持ちうつろたえたが、ネイラはすぐに視線をベッドで話す3人へ移して、溜息を一回吐いた後こう言った。

「・・・思っ たさ。」

一度だけ聞いてみた事はあるが、誤魔化されて終わってしまった。それ以降も同じ様に接してきたが、曇りが無い表情を見るのはこれが初めてだ」

「なるほどな・・・」

クレイヴは一呼吸置いて、返事をした。

「ねえ、二人とも」。

二人だけで話してないで、一緒に話そうよ。
クレイヴの方が物知りなんだからさあ」

「あ、ああ、悪い・・・」

自分から部屋に來ると言っておきながらも、すっかりネイラと話し込んでしまった自分に羞恥を覚えつつ、

クレイヴは軽く返事をしてベッドの近くにしゃがみ込む。

それに続いてネイラも同様にクレイヴの横に付けた、彼女は座らずに立ったままだったが。

「初めまして、だな」

クレイヴは笑顔でカロナリアに話しかけ、彼女もそれに笑顔で答える。

「うん、初めまして。

ねえねえ、お兄ちゃんとシャーネルさんとネイラさんってどういう関係なの？」

10歳程の少女からの唐突な質問に少々うろたえたが、

クレイヴは一応シャーネルとネイラにアイコンタクトで話して良いかどうかを確かめる。

神様という事ではなく、精霊として契約している事についての事だ。もしかしたらシャーネルは人間でないという事を、

少女に知られたくないと思っているかもしれないと、思った上でのクレイヴなりの配慮だ。

結果は勿論二人とも話しても良いとの事だった。

「この二人は俺と契約している精霊なんだ」

「えっ、じゃあ二人とも精霊さんなの？」

「うん、そうだよ」

シャーネルは明るく返事をするが、ネイラは子供が苦手なのか黙って頷くのみだ。

「へえ・・・精霊さんか、初めて見るなあ。。。

二人ともすっごく綺麗だもんねえ」

「えへへ・・・そうかなあ？」

そう言われてシャーネルは照れ笑いを見せる。

「でもね、私の憧れはタナトスお姉ちゃんなんだあ。

すっごく優しくて、綺麗で、話してとても楽しくて・・・。

あっ・・・シャーネルさんと話してて楽しくない訳じゃないよっ！

でももし、大きくなったらタナトスお姉ちゃんみたいな人になりたいなあゝって・・・」

シャーネルは楽しそうに話す少女を見て、タナトスに微笑んだ。

クレイヴはその時分かった。

何故タナトスが何時もと同じ話方をしないのか。

それはカロナリアがタナトスに大きな憧れを抱いているからだ。

『将来彼女みたいになりたい』

何時、命が絶たれるか分からない少女が笑ってそう語ってくれるから、

タナトスはこの家では少女が憧れる自分を演じているのだ。

「それで、お兄ちゃんはどうな話を聞かせてくれるの？」

「ん・・・あ、ああ・・・そうだな。。」

それじゃまず、デイルモートって言う大きな国のお城の話から――

――

「その話はもうシャーネルさんから聞いたやつだよ」

「え、ああ、そうなのか、それじゃあな・・・」

デイルモートの町の話からしょうか」

「うんっ！」

元気に返事をした少女を中心に、4人の旅人と家族の間の会話は列車の出発時刻の直前まで続き、

家の二階からは終始笑い声が絶える事は無かった。

少女と旅人達（後書き）

タナトスが唯一自然に話す事の出来ていると言う少女が登場。
タナトスにとってのこの少女の存在とは一体何なのか？

ここから先の物語に大きく影響していきます。

次はいよいよ列車の乗り換え地点インティスへと向かいます。
これからのストーリー展開に乞うご期待。

別れそして旅立ち

「じゃあな。」

短い間だったが、世話になった」

時間が経つのは早いもので、完全に昇った朝日が夜の出来事がまるで無かったかの様に家々を照りつける。

それは彼らにとっての別れの時を意味する。

クレイヴは、家の外に出て最後まで3人を見送ろうとしているフォルシオとタリス、そしてカロナリアに向かって小さく一礼する。カロナリアは体の悪さ故、基本的には外には出られないのだが、今はフォルシオがおぶっている状態。

彼女が話をしてくれた三人を最後まで見送りたいと、どうしても聞かなかったのだ。

「世話になったのはこちらの方だ。」

本当に助かったよ、それに娘に話までしてくれてな」

フォルシオも戦闘の中とは言え、一時を共有して過ごしたクレイヴ達との別れを惜しむかのように言った。

「お兄ちゃん達、本当にありがとねっ！

話、とっても面白かったよ！」

本当に楽しかったのであろう。

今から分かれる事も忘れて、満面の笑みを浮かべながらカロナリアは言った。

「それは良かった。

俺達も話した甲斐があったよ」

「話してる私達も楽しかったしね」

クレイヴとシャーネルもその笑顔につられて、自然と笑みが浮かぶ。

「タナトスお姉ちゃんも、ありがとねっ！」

「うん、私もすごく楽しかったわ。

また来るからね」

「うんっ、絶対にだよっ。

約束だからねっ！」

「うん、約束っ」

そう言っで、タナトスは笑顔で少女の頭を撫でた。

カロナリアの体の事を考えれば、この『約束』も必ず成り立つものでは無い。

それを知っていながら尚、笑顔で接するタナトス。

いや、むしろ必ず再会する為に笑顔で接しているのだろう。

そしてカロナリアもそうであるのだ。

「それじゃ、そういう事らしいからさ。

また機会があれば、寄らせてもらうよ」

クレイヴはそんな二人の姿を見てから、フォルシオに向かってそう言った。

彼もまたそんな二人の心情を察して、再会の約束を遠回しにしているのだ。

「ああ、いつでも来い。

歓迎してやる」

「その時はうーんと美味しい料理を用意するわよ」

「ああ、それじゃ」

クレイヴ一行は、手を振るフォルシオ達を背に駅へと歩を進めるのであった。

恐らくいつものどおりの朝が、町の人々には訪れている。

勿論多少の損傷はあるものの、砕かれた結界もすでに回復し、人々も普段どおりに生活をしている。

一行はそんな風景を列車の席に座り、やや眠気が残る目でぼんやりと見つめていた。

すでに列車は動き出しており、窓の外の風景は速度を増して流れてゆく。

行きと同じく水の壁を突き破り、一行が乗る列車が向かうはこの世界一の巨大都市『インティス』

「いよいよ、あともうちよつとでインティスだね」

「ああ、そうだな」

「あゝ、そう言えば俺ってば、一旦そこで皆とお別れって事なんだよねえ」。

何か滅入っちゃうねえ、折角楽しかったのにさあ」

タナトスは本当にそう思っているとは思えないような軽い感じで、両手を頭の後ろで組みながら言った。

「ようやくお荷物が減るって事で、こっちは大助かりだよ」

これも本心かは分からないが、出発したばかりの町の風景をぼんやり見ながらクレイヴは皮肉っぽく言った。

「ええゝそうかなあ・・・タナちゃんといると楽しいのに」

「そうか？ 疲れるだけだろ。」

さつきみたいなの、ややこしい事になったり・・・」

クレイヴはすぐさま嫌がるシャーネルを否定した。

『さつき』とはフォルシオ宅でのタナトスの演技に対してだろう。その事もあってかクレイヴは窓の外から目を離さない。

「それをいわれちゃあ、困っちゃうんだけどねえ」。

あ、そう言えば聞かないワケ？ 俺が演技してた意味さあ」

「いや、それはもう良いよ。
何となく分かった様な気がするし。
あんまり話したく無いんだろ、お前も」

勝手にクレイヴの中で解決しただけなのだが、聞くほどにまでの興味は無くなってしまう様である。
と言つよりも面倒くさいだけか。

「うゝん、何だかんだ言つてクレイヴって優しいんだよねゝ。
シャーネルちゃんとネイラちゃんが何でクレイヴを選んだのか、
分かる気がすんねゝ」

「でしょ、でしょ？」

そうそう、あゝだこゝだ言つても結局は優しいんだよねゝ」

「お前らな……」

興味が無くなったただけなのに、勘違いで褒められても嬉しく無いのだろう。

しかし文句を言っても不自然でしかないので、ひとまず窓の外から視線を外してから正面を向きシートに深く座り込む。

するとふと思い出した。
昨晚から寝てない事に。

会話に疲れたのも相まって、睡魔はここぞとばかりにクレイヴの瞼を下ろそうとする。

「……んじゃ、俺は寝るわ。」

二人は問題ない程度に行動してくれ」

これは敵わないと思い、会話を無理やり切って目を閉じる。
目を開けたときにこの二人が問題を起こしてない事を祈りつつ。

「はぁい」

「はぁい」

間の抜けた返事がどうも心配な心を揺さぶるが、睡魔には対抗できず、
クレイヴは一瞬の内に瞳を閉じ、眠りに着いた。

別れそして旅立ち（後書き）

遅れた割に文章短くて申し訳ないです。

今回は別れから、出発までの展開で区切りたかったので短めなんです。

さて、笑顔で再会を誓ったクレイヴ達。

次に向かうのはいよいよ折り返し地点のインティスです。

そろそろ、物語的にも大きな転機がやってきます。

乞うご期待！

追記：そう言えばブログ始めました。

良かったら見てください、損はしないっ・・・はず。 ←

<http://u0831.blog89.fc2.com/>

始まりの国へ

大きい影。

そんな風に形容しても良い程の、黒いマントを羽織った大きい体格の男が村にやってきた。

荒地の真ん中にあるこの小さな村は、訪れる者も出て行く者も決して拒まない。

何せ他の町との交流も少ない小さな村だ。

他の国の町から人が来る事はむしろ良い事なのだ。

男は村にやってくると、村の所々にある木の一本に寄りかかる様に座り込んだ。

人がやってくると、村の人々は興味津々になって話しかけるものだが、

その男の近寄りがたい雰囲気、誰も話しかけられずにいた。

その男もまた、その様な事は一切気にしてないようで、村を眺めるように時々首を動かすのみだった。

そのままの状態で一時間が経つころ、大柄の男の元に一人の青年が歩いてきた。

剣の稽古でもしていたのだろうか、この青年は木刀を手に持っており、額には大粒の汗が浮かんでいる。

そして手に持っている木刀を地面に置いて、青年は大柄な男の横に

座り込む。

猛暑とも言える暑さから逃れられるのなら、何処でも良かったのだが、青年はあえてこの男の隣を選んだ。

「アンタ、何処から？」

この青年は一息ついて、額の汗を手で拭いながら視線を男に向ける事無く話しかけた。

どのような意思でこの男に話し掛けているのかは理解しがたい。興味ゆえか、果てまた警戒心ゆえか。

「・・・どこか遠くからだ。

何故そんな事を聞く」

大柄の男は話しかけられた事に驚く事もせずに、これまた無愛想に聞き返す。

「いや、何となくさ。

じゃあ、アンタ名前は？」

「・・・リグレス・・・と言う名前だった」

「名前だった？」

実に意味深な言葉である。

生まれて、名付けられ、それから後に名が変わったのではなく、まるで『無くなつた』様な言い方だ。

青年の首が男の方向へ釣られる様に動き、青年はそこで始めてまともにも男の姿を目に入れた。

「いいや・・・今も尚そういう名前だ。

確かに私の名前はリグレス。

だが過去に存在していたモノと、現在に存在しているモノが同名であつても、それが必ずしも同じであると言ふ事は無い」

「何を言つて——おいつ・・・」

青年が男の言つた事の意味を問いただそうとするも、男はそれを遮るように立ち上がり、青年に言つた。

「青年よ。

この村に宿はあるか」

先程の意味不明の言葉とは真逆の現実的な言葉。

これまた唐突な質問である。

しかし青年は、この男がこれ以上先程の言葉について説明する気が無い事を悟ると、宿屋の場所を説明する。

男はそのまま木陰を後にし、宿屋へと向かつていった。

青年は男の言葉の意味を考えながら、しばらくその場に座り込んだが、結局結論が出る前にその場を去つて行つた。

数日後。

すでに、あの太柄の男は少し不思議な人間だったのだと結論を下し、その事すらも忘れかけていた頃だった。

青年はまたもや太柄の男が木陰で木にもたれ掛かって座っているのを見かけた。

未だにこの男が滞在していた事には驚いたが、今度は何の気なしではなく多少の興味を持ちながら男の横に座り込んだ。

「アンタ、まだ居たのか。」

何時までこの村に？」

「明日の早朝には発つ」

以前に会った時とは違い、明確な言葉が返ってきた。

このような男だったか、と少し疑問が浮かんだがあまり気にせず会話を続ける。

「そっいゃ、前に聞いてなかったけど、何が目的でこんな村に？」

住んでる俺が言うのもなんだけど、正直何も無い村だ」

「目的はほとんど終わっている。」

最後の仕事は明日、ここを発つ時にだ」

「いや、目的の内容を聞きたいんだが。。。」

まあ言いたくないなら良いけどさ」

男は黙り込んだ。

また妙な事を話し出すのではないか、と青年は少しだけ後悔にも似た心地で男の言葉を待ったが、
ついに男は黙ったままそこを後にした。

変わった男。

青年はその男の背中を見ながら、改めてそう認識した。

「・・・そろそろ俺も帰るか・・・」

あの男は明日にはこの村を出ると言っていた。

あんな妙な男について思考を巡らしても仕方が無い。

そう区切りを付けると、青年は木刀を杖代わりにして立ち上がると、その場を後にした。

「――レイ……クレイヴ――」

(……夢か……また昔の事を……)

クレイヴは呼びかけの声と列車の揺れで、先程まで見ていた事を夢で有った事を認知した。

そして自分の名を呼んでいる者の顔を見る為に瞼をゆっくり開ける。

「ッうおっ!？」

ゆっくり目を開けるつもりが、途中で一気に目を見開いたクレイヴ。それもそのはず、目の前には恐らくシャーネルのものとされる大きな瞳があったからだ。

つまりは目の前に顔があった。

「な、何やってんだよっ！」

人を起こすのにそこまで顔を近づける必要は無いだろう」

「知ってるよ、それ位っ。

わゝい、久しぶりにドッキリ成功っ！

イエゝイツ！」

「イエゝゝイ！」

シャネルは隣に座っているタナトスと小さくハイタッチを交わした。

「・・・こいつ等・・・」

「まあゝまあゝ、こんな怒る事じゃないっしょ？」

「お前が言っとなっ！」

タナトスはクレイヴが若干不機嫌になっている所に追い討ちをかける様に、笑いながらそう言つと、

案の定声を張り上げたクレイヴを見て満足そうにタナトスは話し始めた。

「それにゝ、起こしたのにも理由があるに決まってるっしょ？
怒るのは、外見てからって事でゝ」

「外？」

タナトスが窓の外を指差すと、クレイヴはそれにつられる様に窓の外へ顔を向けた。

すると、クレイヴは何かに気が付いたかのように小さく声を出した。

クレイヴの目の先には、人が造ったとは俄かには信じがたい巨大な、壁、が大地に聳え立っていた。

その高さは100メートル以上はあろうかと言う程で、幅は見渡す限り続いているといっても良いほどの長さである。

「……着いたのか……インティスに……」

そう、クレイヴが眠っている間に列車はいよいよレランガート第一の都市『始まりの国 インティス』に到着しようとしていたのだ。

となると、先程クレイヴが見た、壁、はインティスの国を囲んでいる塀という事になる。

その大きさは先程も述べたとおり、目視では長さが確認できないほどの大きさで、この国の国土の広さが伺える。

『始まりの国』と言うのは、その昔、魔族の王を倒した英雄の生まれた場所、つまりは人類の歴史の始まりの地として、その名が付けられた。

勿論歴史的背景から、レランガート中の工業、商業、農業がこの国を中心に動いており、世界中の人々がこの国を『世界の中心』という認識を持っている。

人口、面積、経済力、軍事規模等様々な要因でも世界のトップとなっているまさに『第一の都市』なのだ。

そして、国の中心には高い塀よりも更に高い塔が一本、天にも届く勢いで聳え立っている。

二人の神と契約を交わした勇者生誕の場として、人々に崇められている神聖な塔である。

その塔は天界の楽園との繋がりとして『エリュシオン』と呼ばれている。

その高さは本当に天に届いているかと言うほどで、まだ数キロほど塀から離れている列車の中からでも確認できる。

「……ん？」

シャーネルは質問とか無いのか？」

クレイヴは、新しい土地に着いたというのに黙っているシャーネルに違和感を感じて、そう尋ねた。

「大体の事はタナちゃんから聞いちゃったよ。」

人間界はタナちゃんの方がクレイヴより長いもんね」

「なんでお前が威張ってるんだよ」

自分の事でもないのに、自慢げに胸を張るシャーネルの頭をすかさず軽く叩いた。

「いてて・・・」

「さて、そろそろ準備しだすぞ」

時はすでに夕暮れ時。

尤も、夕日はその大きな壁に遮られ、確認は出来ない。

夕日が遮られた暗闇の中、列車は大きな壁に臆する事無く直進してゆく。

始まりの国へ（後書き）

超久しぶりの更新となりました。

お待ちしていた方もそうでない方も大変申し訳ございませんでした。

さて、話の方はですね。

いよいよ巨大都市に到着。

そこでのタナトスの言う仕事とは？

彼らを巻き込み、更なる展開へ乞うご期待。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7068b/>

NEXT GEARS

2011年10月3日17時16分発行